





襄陽峴山羊公祠有石幢一枚。凡六面。高六尺。每面闊九寸。有蓋有座。一面直書下第一行。刻使帖。襄陽縣第二行。刻淮慶曆七年十一月六日。中書劄子。襄州奏當州城南五里有峴山一所。上有古祠碑。又有晉太傅。已下俱磨滅。僅存聖旨字。末行。上有帖。到速探石大字。書刻上。件。其四面界。作六層。刻詩下題名。又幢一。臥峴山上。其文可辨者十三字。云々。

又按蒲州府志卷三。棲巖寺條下云。

寺外石幢六已折。其一幢。皆刻梵經。不知何人書。大要隋唐時也。これによりてみれば、普濟寺の六面の碑も、蓋あり座あり、高さも六尺程にて、石幢といふものなるべし。此石幢といふ物、所々に有と見えたり。

天寧寺塔幢塔高三十三尋。塔前一幢。書體適美。開皇中立。(帝城景物畧)

金剛經石幢。開元二十六年建。在襄陽龍興寺。(輿地碑目)

江陵府官石幢。貞元十年。吳仲舒撰。(輿地碑目)

尙書省石幢記。胡證作。元和八年。(金石錄)

白龍寺經幢。在寧國府水陽鎮。開成元年。(輿地碑目)

廣濟院石幢。在蕪湖縣。大中十二年。(輿地碑目)
廣濟院石幢。在蕪湖縣。乾符六年。(輿地碑目)

右の七幢の事は、「佩文齋書畫譜」(卷六十二、六十三)にみえし所なり。
又、「江西石幢記」 觀察支使試左武衛兵曹參軍來擇撰。泰和二年建云々。(下略)「格古要論」に出たり。

(八) 武州豊島郡赤塚といふ所に觀世音あり、東明寺と云。又松月院あり。むかし吾友岡部公脩(名正懋、後剃髮號素觀)菊池叔成(名禎)と同じく此地に遊びしが、舊友南條山人(川名氏、名孟綽、字仲裕)かつて松月院に寓居せしころ物語せしは、此地に廢たる寺あり、大堂といふ。古き鐘あり、といひし故に、たづねてみしに、日くれかれば燭をかかけてみるに、

武藏州豊島郡赤塚(泉福寺)兩寺鐘銘

驚沈潛之幽蟄。破衆生之大夢。莫先於鐘也。武州豊島彼兩寺者。前朝全盛之時。所建。具體古招提也。獨缺鑿篋之器。可謂缺典矣。今快賢阿闍梨。幹衆緣鑄巨鐘。厥志勤矣。若夫豊嶺霜降。祇園月明。揚音於大千沙界。傳

篋篋一鼓を懸くる横木を篋といひ

縦木を篋と

いふ
鬼氏一周禮
に鬼氏爲鐘
范鏞一范は
笙の誤歟、
書經に笙鏞
あり、鏞は
大鍾
以豊一牛の
血を鐘にぬ
る儀式

益於未來無窮命。中岩銘。銘曰。

武之豊郡 州之重鎮 崇崇福山 哀我彦俊
鬼氏范鏞 以落以釁 大扣大鳴 鯨吼霆震
啓昏迪迷 遐邇咸進 劫石有消 洪音無盡

曆應三年辰四月初八日筆執三位親慶

大工 平次五郎行次

勸進沙門右部阿闍梨快賢

公脩は古を好むの癖ありて、都下より三里餘へだたれる道をいとはず、二日過て墨をたくはへゆき、三本を搦かへりて、叔成と予におくれり。安永六年丁酉十月九日の事にして、今は二子ともに泉下の客となれり。按ずるに、此銘を書し中岩は、圓月と號す。「中正子」をあらはせしもの也。「鎌倉志」(卷三)建長寺の下に、

梅洲菴佛種慧濟禪師諱圓月號中岩嗣法東陽當山四十二世。永和元年正月八日示寂。世壽七十。

とあり。泉福寺眞福寺の兩寺に一鐘をともしせしも、古質なることなり。

(九)「日蓮上人御書撰時抄」に、

彼漢土の嘉祥等は、一百餘人をあつめて、天臺大師を聖人と定たり。今日本の七寺二百餘人は、傳教大師を聖人と號したてまつる云々。

按ずるに、七寺僧徒の數、これによりてそのすくなきを見るべし。同書(錄外第七神國王御書)。

漢土の寺は十萬八千四十一所也。我朝山寺は十七萬一千三十七所也。又日本國の叡山七寺、東寺園城寺等の十七萬一千三十七所の山々寺々云々。

又(錄外卷十五垂迹法問御書)。

一日本國中社數一萬三千三十二所あり。一佛法住所十七萬一千三十七所也。

此書をみて其時の寺社の數をしるべし。

(十)南郭翁(服部元喬)「檜垣寺古瓦の記」のかな文一篇、翁手づからかきて、肥後の曇龍上人におくられしを、金地院よりしばく翁に書給はん事をこはれしかば、うけひかれしが、いく程なくて身まかり給ひぬ。その草稿の家にありしを、其子仲英(名元雄)翁の志をつぎて、金地院におくれり。さるを青山妙有菴にいませし耆山上人のかり得て寫

し置給ひしを、翁のかな文めづらしければこゝにしるす。

ひくとはなしに陶淵明無絃の琴を撫して自ら娛む
硯ならでも唐庚古硯
し置給ひしを、翁のかな文めづらしければこゝにしるす。
ひがきのおうなのうた、その事をあはせて、「後撰集」「天和物語」にあらはれたれば、人みなしる所なり。今はその跡寺となりてなんあるといひ傳ふめり。肥後の曇龍上人、ふるさとよりふたたび東にむかはんとて、ふるきをしのぶかたくななる翁が心ぐせを思ひばかりて、かの寺の瓦をもて傳へてあたへ給へり。朝夕なづさひみんに硯になしてんとて、其みちのたくみにことづけてこゝろむるに、いとかたしとていなびたれば、とゞめにけり。さばれ、ひくとはなしに琴を手まさぐりて過せしためしもあらざらめやは。さるは、事からのいみじうむかし覺えて、もてあそぶばかりも、こゝろ一つにをかしきわざなりや。おのれめでたしとみるのみかは、上人のはるくふりはへたづさへたまへりしこゝろづくしの、海ふかき情もすてがたきままに、ならはぬ女もじしてかきつくれば、にけなくこそをこがましけれ。かつはかの白川のみづから思へば、老にける身の、今はた硯の墨の黒髪にたちかへるべきすぢもあらずかし。硯ならでも世をもてかぞふるものこそあれ。はかなきいのち毛の筆のすさみはながきもよしなしとて、かきさしてやみつ。

銘序に、筆計、墨の壽以月計、硯之壽以世計

寶曆八年

七十六翁志

(十二) 世俗に、新宅をつくれれば三年の間煤を掃はぬ事、古きことなり。「東鑑」に、嘉禎二年十二月六日、爲大膳權大夫奉行召陰陽師等於御所。歳末年始雜事日時、勘申之。御煤拂事有相論。文元朝臣申云、新造者三ヶ年之内可有其憚云々(中略)所詮此條無證據。然者無煤拂御沙汰可宜歟之由。被仰出之間、各不申子細也。

又明「袁中郎集」(卷十四)、

歲時紀異云、十二月云々、二十七掃屋塵、曰除殘。

又明王在晋が「海防纂要」、「十二月二十六日、在軫俗云掃塵風。」又清の沈歸愚が「國朝詩別裁」(卷二十)に、張自超が掃塵行の詩をのせたり。

掃塵練日臘三七	細竹長竿風捲疾	歲々荒村守敝廬
家々淨掃迎新吉	掃遍瓦椽及四圍	甌中之塵凝不飛
朝來坐曝茅簷下	垢面相逢猶苦飢	

此方の煤掃のさまにかはる事なし。今江戸の俗、十二月十三日を用ひ、京都の人は二十

日を用ふといふ。南郭服先生(元喬) 毎年十二月十三日、煤掃を避て、東海寺の中なる少林院に詩會あり。これを掃塵會といひしよし、青山妙有菴にいませし耆山法師の物語なりき。

(十二) 此方の人、十月五日を達磨忌といふ。「廻向双紙」(卷下) 諸歎佛偈并伏願句の中、群機有頼播揚少室之家風妙智無窮成就大乘之根器(句也) 達磨千年忌之伏願之十月五日(東山建) 仁月州和尚作。

とあり、十月五日のだるま忌もふるき事なり。今清朝の時憲書に、「十月初五、達磨祖師聖誕」とあり。誕生日と忌日とはいづれか是ならん。

(十三) 八丈島宗福寺の主僧契譽病ありて、その弟江戸深川六間堀にすめる山下宗徳(稱嘉傳次)の家において、若州の醫官杉田伯元(名公勤)の治療をうけし時、八丈島の事をかたる。この僧は、鎮西八郎爲朝の後裔なり。保元年中爲朝伊豆の大島に流されて諸島を威服し、久く八丈島にありしが、又鬼が島にうつれり。(今の青が) 其うたる時、一矢を射て軍船をくつがへし、家にかへりて腹きりて死す。その地は今の小島にて、爲朝明神の社あり。爲朝の妾の子を爲宗といふ。長じて僧となりて、一寺を西山にたてて、父の冥福

をとひ、香爐山彌陀寺といふ。肉食妻帯帯刀して、子孫相つゞきて住持す。永享年中に西山に火おこりて、彌陀寺も又やけぬ。その時の主僧、寺を今の太田郡大里原に移せり。時に武州金川に奥山宗鱗(一作林)といふ者あり、交易を通じて此島を奪ひし時、此寺も金川の宗興寺に屬し、龜峯山宗福寺とあらため、曹洞宗となる。是を中興の開山とす。それより以下、今の契響にいたりて十五世なり。いつの比よりか、豆州下田の海善寺に屬して淨土宗となれり。爲朝より今にいたる迄七百年に近く、血統相つぎて絶ず。寛政の比命ありて新田を墾く事あり、此地も又他にうつりし時、二の石槲をほり出せり。その中に種々の器ありしが、鏡三面、筭一つ、硯一つ、皿一枚のみのこれり。佩刀の類もありしが、朽そこなはれて、その形もわかちがたし。伯元今は玄伯といふ。鶴齋玄白翁の子なり。

按ずるに、「今川記」に云、

當時源氏の正統を申奉るに、義國の御子一男義重、新田初也。次男義康、足利殿是
 先祖義康の御子、一男矢田判官義清、木曾殿と同時に責上り、備中國水
 島合戦に討死也。二男足利判官義房者、頼政に一味し、宇治川合戦に討死し給ふ。

三男上總介義兼ぞ、義康の家督をば御相續なり。

義兼者實は八郎爲朝の子也しを、義康のひそかに養ひ給ひけると也。御長九尺計に
 て、ちから人に勝れ給ひ、義兼は此事知しめさずにや、頼朝はひそかに知し召給ひ
 けると也。頼朝はきんし給ひ、人からも穩便にましくければ、時政が聲になし被
 申けると也。然は頼朝と義兼も従弟にて、又相聲なり。去程に新田殿より足利殿御
 末繁昌し、代々北條家と縁を結び給し也。

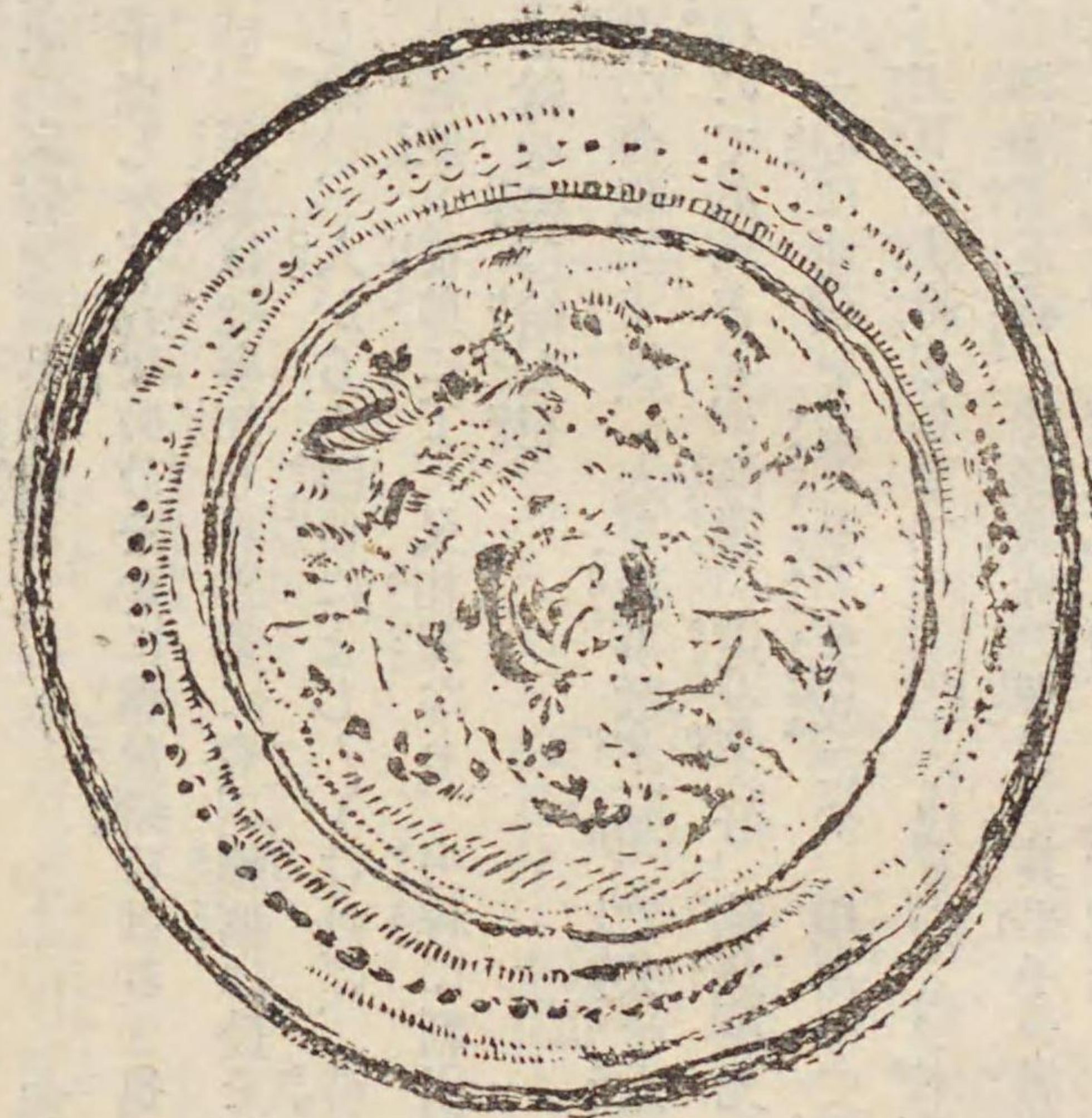
義兼の實父爲朝は、高名の合戦二十度、人を殺事數不知。然共一人として非義の敵
 を不打。古今無雙の強弓にてあれども、漁獵の遊を不好、慈悲を先として父母に孝
 あり、禮義を専とし、一心に地藏を奉念。去故にや、現在にて荒神の様に恐し

かども、子孫は残りて、天下の武將としてに残り給ふ。不思議の御事也。
 義兼の御子左馬頭義氏、御法名正義、北條義時の聲也。其御子一男足利五郎長氏上
 總介、二男義繼、三男泰氏宮内大輔、平石殿と申。此御母義時の息女の腹にて、左
 馬入道殿の家督を相續にて、惣領に立給ふ。泰氏又最明寺殿の妹聲にて、式部太夫
 頼氏を生給ふ。頼氏の御子家時、伊豫守、其御子貞氏讚岐守殿、其御子尊氏將軍等

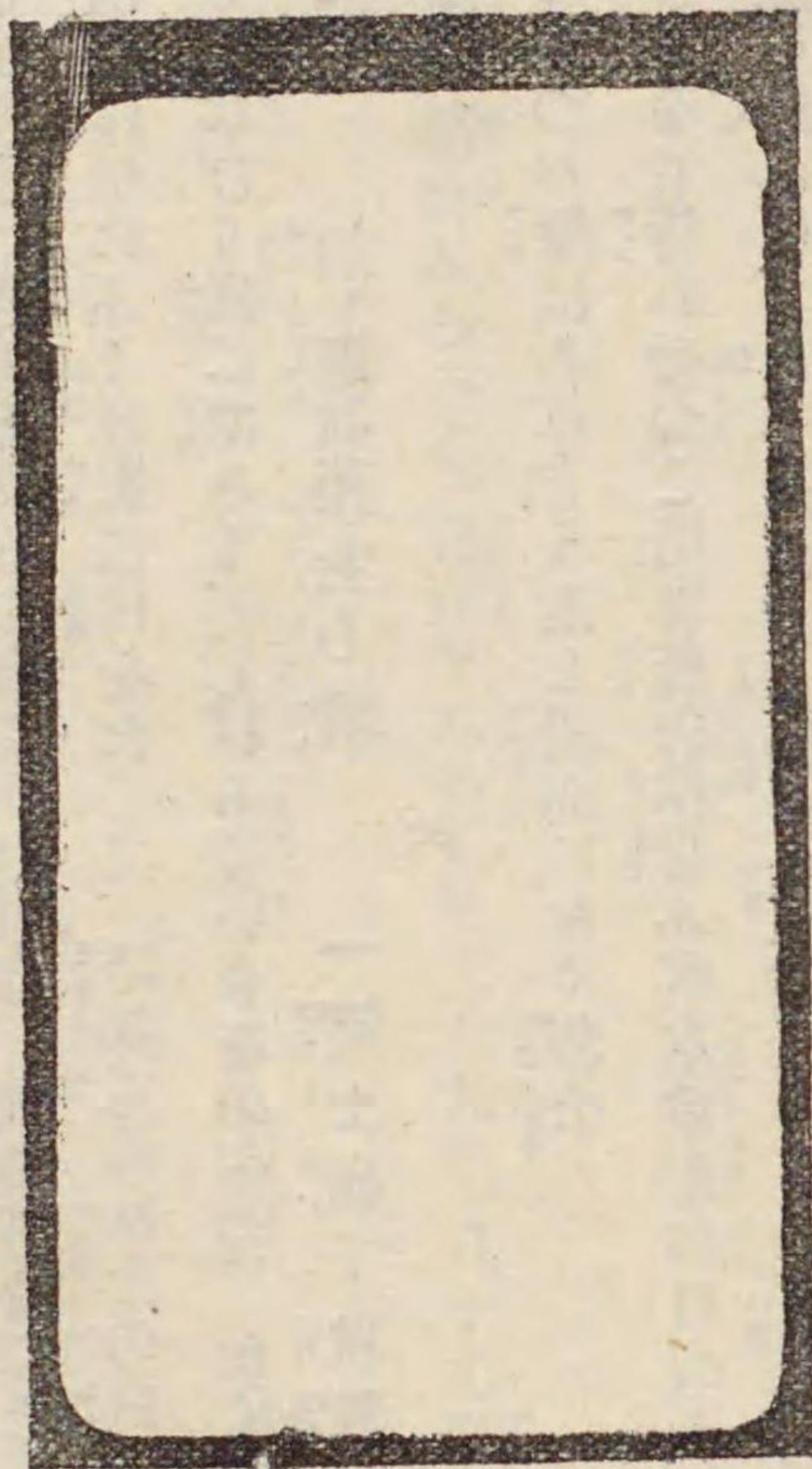


兼
并

鏡



硯



右三品

持院様是なり。其御弟直義大休寺殿、今の鎌倉の初なり。尊氏公は、北條相摸守久時の
 の聲也。寶篋院御母是也。加様に代々先代の御縁邊にて、の御威勢、源家の棟
 梁にてましくけるとかや。
 予かつて「今川記」をよみて、爲朝の子孫繁昌せる事をしれり。今又八丈じま宗福寺の事
 をみて、ますます積善の家の餘慶あることを信するにたれり。

(十四) 北村季吟翁の墓は、池の端茅町正慶寺にあり。昔年ゆきてみし事あり。其墓に、
花もみつほととぎすをもまちいでつこの世後の世おもふことなき
再昌院法印季吟先生

寶永一乙酉年六月十五日八十二歳卒

大悲者一觀
音

と彫つけたり。此うた辭世の歌にあらず。しかれども、季吟翁「疏儀莊の記」の末に、
猶日ながき折は、鬼子母のおはす曹司谷も遠からず、護國寺の大悲者のみまへにも、
たゞはひわたるほどなれど、老のあゆみに猶ちかければ、新長谷寺にまうでて、不
動尊の堂下より、西南にかたぶく日影に杖をたてて、時知らぬ富士の白雪をながめ、
千町の田面のみどりになびく風に涼みて、しばらくいきをのべつ。かくて、
八十年來筆硯間 道遥歌苑老心閑 一望士嶺千秋雪
雲帶清風往又還
初かりのいなばにおつる聲はあれどうるし田面になく郭公
花もみつほととぎすをも待いでつこの世後の世思ふ事なき
となんよみて疏儀莊に歸れば、日くれぬ。宵過て月松の上にさし出てあきらけく、

こゝにはけふみし花の色もみえず、鳥の聲も聞えず。かの桐火桶の餘薫、あるかな
きかにもこの端にとゞまれり。寶永二年五月初つた、法印季吟口にまかせふんで
にまかす。(以上文)

按ずるに、此うたまことに絶筆なるべし。元祿十六年正月二十九日、八十の賀の祝せし事
も記中にみゆ。
(十五) 東坡が前後赤壁の事は、人のよくしる所也。其年十二月十九日、又赤壁に遊ぶ事
あり。「古文眞寶抄」巻首に、

韓私云、建仁常庵和尚之「古文眞寶」は唐本也。此本に云、「古文眞寶箋注釋大全
卷之一」と。下に「松塙門人京兆劉刻音校、永陽麟峯後學黃堅編集」とあるほどに無
疑乎。但先輩不見此本とあり。按ずるに、韓とは清韓長老にや。
前赤壁賦、凡赤壁と云處五あり。周瑜が曹公を破るは江夏の赤壁なり。東坡が賦つ
くるは黃州の赤壁也。元豐五年壬戌、東坡四十七歳にて黃州に在り。其年の七月既
望に、赤壁に遊て赤壁賦を作る。又同十月望に赤壁に遊て後賦を作る。又同十二月
十九は坡が生日也。此日赤壁に遊、と「施宿年譜」傳藻が「記年錄」等にあり。然ば元

豐五年壬戌一年の中、三回赤壁の遊をなす。賦は七月と十月とに兩度作る也。「東坡文集」又「紀年錄」には前の字なし。後人開板の時加之乎。按ずるに、傅藻が「東坡紀年錄」に云、

元豐五年壬戌先生四十七歲七月云々。既望泛舟於赤壁之下。作赤壁賦。又懷古作念奴嬌。十月望步自雪堂歸於臨臯。二客從之。過黃泥之坂。復遊赤壁之下。作赤壁後賦。十二月十九。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯。俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生。頗知音。謂坡曰。笛聲有新意。非俗工也。使人問之。則進士李委聞坡生日。作新曲曰鶴南飛。以獻呼之。使前則青巾紫裘腰遂而已。既奏新曲。又快作數弄。瞭然有穿雲裂石之聲。坐客皆引滿醉倒。委求詩作一絕句。王郎以詩見慶。次其韻。

又按ずるに、僧方里の「帳中香」(卷五)に云、

子瞻詩句妙一世。乃云。效庭堅體。蓋退之戲效孟郊樊宗師之比。云々。詩赤壁風笛句。注漁隱叢話後集二十六。東坡云。元豐五年十二月十九日。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯。俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有古郭二生。頗知音。謂坡曰。笛聲有新意。非俗工也。使人問之。則進士李委聞坡生日。作新曲曰鶴南飛。以獻呼之。使前則青巾紫裘腰遂而已。既奏新曲。又快作數弄。瞭然有穿雲裂石之聲。坐客皆引滿醉倒。委袖出嘉紙一幅。曰。吾無求於公。得一絕句足矣。坡笑而從之。詩云。

山頭孤鶴向南飛。載我南遊到九疑。下界何人也吹笛。

可憐時復犯龜茲。

茗溪漁隱曰。西清詩話云。余嘗觀唐人西域記。言龜茲國王與臣庶。知樂者。於大山間。聽風水聲。均節成音。後翻入中國。如伊州涼州甘州。龜茲至也。云。仙溪傳藻所編東坡紀年錄云。元豐五年壬戌。先生四十七歲。七月既望。泛舟於赤壁之下。作赤壁賦。十月望。步自雪堂歸於臨臯。二客從之。過黃泥之坂。復遊赤壁之下。作赤壁後賦。十一月十九。東坡生日也。置酒赤壁磯下。踞高峯。俯鵲巢。酒酣笛聲起於江上。客有郭古二生云々。與漁隱叢話同。某謂。漁隱叢話并仙溪紀年錄等所載。元豐五年壬戌。東坡遊黃洲。

之赤壁蓋三度也。其第一則七月十五前赤壁也。其第二則十月十五後赤壁也。其第三則十二月十九日爲吹笛李委作詩之時也云々。

又五羊王宗稷が「東坡年譜」元豐五年壬戌の下には、十二月十九日の事を載る事なし。「舌文抄」に引所の「施宿年譜」なるもの、未考。但王宗稷が譜には、

仁宗皇帝景祐三年丙子。先生生於是年十二月十九日乙卯時。按先生送沈遼詩云。嗟我與君皆丙子。又有贈長蘆長老詩云。與公同丙子。三萬六千日。又按玉局文云。十二月十九日。東坡生日。置酒赤壁磯上。と見えたり。

享和二年壬戌十二月十九日に、七月既望の盟をつぎて、再び墨田川に舟を泛べて月見し事ありき。同遊の者七人、所謂篠本廉竹堂、鈴木恭白藤、井上玖子瓊、鱸文猶人、山本鄰徳甫、中村亮子寅、書肆樂地堂等なり。予戲に賦のやうなるものをつくりて一時の遊を記せり。人みなこれを後々赤壁賦といはんなど笑ひ興じき。

遊墨水賦并序

杏園主人

是歲壬戌七月既望。與諸子泛舟墨水。欽於蘇公赤壁之遊也。十月之望。

有疾不果。若夫諸子則復遊之矣。按蘇公年譜及紀年錄。十二月十九日爲生。日置酒赤壁。然則壬戌三遊。赤壁而前後二賦。膾炙人口。生日之遊。人不。或記蓋以無其文也。是日陰雲新霽。天氣肅然。乃與井鱸二生。昏暮敲竹。堂門主人欣然相迎。酒二三行。豪氣十倍。又促山村二子。訪白藤書齋。相。携而出。道過樂地堂。與會牛門市。賞舟復遊於墨水之上。斯遊也。不期而。得友七人。亦不奇乎。因不自量。作爲斯文。其辭曰。乘墨水之長流。擬赤。壁之舊遊。提挈芝蘭之交。容與竹葉之舟。迴茗溪下。柳堤出。曲岸望東西。兩。國之橋。宛如虹蜺。霜氣滿天。北風淒其。積陰蒼茫。不可端倪。時乃萬物閑。塞。群動滅息。流光混々。水波如織。寒月揚色。玉缺石泐。裂三派之素練。啓九。重之淵默。皎兮如冰雪之逼。卓乎如斷山之巖。恍焉惚焉。如神仙之不可。測也。客山德甫有操絲桐者。新得古琴。沈思而高吟。器冷絃調。山。虛水深。峩々之德。洋洋之音。得之敏手。而應於閑心。漸近自然。餘音愔々。於是合尊促坐。獻酬交錯。放肆大川。談笑嘔噓。不知舟楫之載形骸邪。抑。形骸之載營魄邪。蘇公逝矣。天地非昨。至今七百二十甲子。孰知有今夕者。

上下千年唯有三孤鶴

(十六) 僧周興が「平陶稿」には、古の人生を養ふものは、その枕を高くせず。おぼむね始はこれを高くして、やうやくこれを低くす。故に紙を以て枕とし、日ごとにすこしづつ減す。是第一養生の妙術なり。服薬百裹不如一宵低枕。といへるもこの事也。高枕表號の説、代桃源師の文にみえたり。

(十七) 同書には、宋人西湖詩に曰、「却將錦樣鴛花地、變作元暉水墨圖。」元暉とは何人ぞ。吾雪舟首座是也。四景圖一景一幅楊知客筆に題する文に見えたり。元暉といひ楊知客といふ、みな雪舟の事にして、そのいにしへより賞せらるゝ事かくのごとし。(十八) 足利氏の頃、五山の僧の學問に、史記家と漢書家とわかれ、書物に師行未師行といふ事あり。(臥雲日件録、文安三年の條に、施行未施行とあり。假名書にて通用するなべし)僧蕉了が「史記抄」に云、

今史記家と漢書家との讀癖を見るに、史記家の點は猶も念比にくはしい讀癖があるぞ。漢書家は尋常なる文字讀がまだ多ぞ。さるほどにか、妙智のあそばすを、家の人は、まだも本式にはないとてそしめる人がある、と古老僧のあつたが云はれたを、貶所で云

はれたと思たが、史記家からはさふ思ふ事もあらうぞ。妙智のおせられしは、「史記」と「後漢書」とには、家の點本があるぞ。師行したほどにぞ。「前漢書」は未師行程に家の點本はふつとあるまい、とおせられたぞ。さあればこそ世間にいつとうながるらうぞ。一條關白殿には、帝紀十二卷ばかり家の點本があつたぞ。偕は東山に、昆布屋の山莊に列傳がありたが、多缺て全備はせぬぞ。つよくしつした本と見えて、金銀薄紙を以て、有説と面に貼して、其裏に師説をかいたぞ。師説が重寶ちやぞ。「史記」にも師説とてあるぞ。さては常德慶雲と云寮に一部折本の家點あり。其わざ程の點でもないぞ。さる時は未師行は治定なり。小くあるも全はないぞ。往々にはあらばやぞ。妙智は惠林院の御影から相傳してあそぼしたぞ。惠林は家の人に傳授あつたぞ。さる程に、「漢書」の家と我もおほし、世人も皆心得たぞ。既に師行がなくは、惠林妙智の師行が本なり。帝紀の第一からして列傳の四十三までは、聽聞して聽がきをして置たぞ。其中に二十二から二十六までは、用堂の死なれて中陰に居たほどに、闕所あり。偕は一度も不闕ぞ。さるほどに遅く參れば御待あつたぞ。坐敷でもあれ、かはらなんだぞ。益之や月翁もつかれたぞ。亂前に麟統淑之三子を携へて禮にまゐりたれば、酒

右、沙汰
左
小人一若衆

を御出あつて、御氣息よけにあつしほどに、「漢書」未了遺憾不淺を申したれば、様も
いるまい。只以前の讀だを以て讀め、とおせられた。そあれども、同くは受まらせ
たい、と申したれば、其時分はや御目が一向に御みえなかつたほどに、目だに見え
易い事なれども、ちつとも不見ほどにかなふまいぞ、とおせられたぞ。そこで愚が、
ささふらはば、身御前で讀さふず。ちがふ處で御なほしありて、義理をも、おせられ
う處をばおせられて御聞せあれ、と申したれば、さらばよい事ぢや、此邊にも聽たが
る人どもがあるほどに、とて四五日の中に始めうとしたれば、淑侍者が執爵申した
に、湯（按に、湯は般若湯なるべし。禪家語殊勝なり。）を御すごしあつてから歎漱を
されて、わきへひきつめくすると、若なほりたらばさうを申さふ、とて御のべ
あつて、不幾此亂が出来たほどに、今迄の遺恨なり。帝紀十二卷と列傳二十一
より至三十二迄の聽書をば横川の借て、人にあつらへて寫すとて失はれたぞ。嵯峨
に普明國師の弟子に施玉林とて「漢書」を讀まれたぞ。近比の幢立之は其弟子也。是
も「漢書」の家と思はれたぞ。立之の法眷に西堂のあつたが、名譽の史學に達した人で
あつたぞ。小人でゐられたし時に、此人によつて念者が人を殺したほどに、其様な事

にちつと輕忽な事があつたと云ぞ。天龍寺參暇、西堂で稜嚴會（稜は楞の假名がきな
り。の中で、維那が三段の燒香を遅すとてわらく云はれたほどに、維那かはかてむ
ずとくうで、こきやうてから、龍華に延慶と云寮のあるにひつこうで居られたぞ。西
胤の弟子に等慶藏主とて、史學を專にした人があつたぞ。其の西堂に習たぞ。「宋元通
鑑」をも講せられたぞ。おれは三劉宋祁の本はもつたり、喝食でから袖に入れて、巢雲へ
いつてかくしく「漢書」を習て、帝紀の始から列傳の二十四五卷迄いつたぞ。さるほ
どに、等持院のあそばすを聽かやうもなかつたぞ。今は玉林の傳授も絶つ、漢書家は
自彊の一派迄なり。前等持綿谷西堂は、愚が聞たより先に一遍聞て、三劉宋祁の
本を書して、委く點じてもたれたぞ。近來三十餘卷迄人に講じて聽かせられたぞ。
綿谷の行 狀に、竺雲の「漢書」を聞く者、いか程にあつたらうなれども、綿谷一
人爲後生授此書とあそばしたが、是も此で絶たぞ。可惜ぞ。「史」漢のかはりめ
をば、史記家と漢書家とのちがひと思ふべし。ちがうたとてどれをも不可譏ぞ。
按するに、此比學問のかたき事を知るべし。
（十九）同書（六卷）に云、

丁亥應仁元年歲五月諸侯分黨相爭東諸侯以細川氏爲首西諸侯以山名爲首深溝高壘於跬步之間而細川公戴天子挾相公以令諸侯山名則無適從故我爲官軍彼爲賊虜諸將斬營而攻則彼亦嬰城而守呼聲動天地飛矢如雨一敗一勝殆無虛日京師喋血天下洶々余也脫身於兵馬之間一錫飄然岩栖谷飲有年于此江州之變亦不一也及賊勢稍彊勤王之兵日益少黨逆之卒日益多蓋人勝天之秋乎

甲午文明六年之秋余讀易至屯六二曰屯如遭如乘馬班如匪寇婚媾女子貞不字十年乃字解之者曰屯難之世勢不過十年者也十年則反常反常則本志獲矣余是以知其十年而天下定一焉自爾以降儂指而數者久矣

乙未文明七歲官軍進討江賊筮之得乾之九五吉莫大焉而軍不利而却人皆以爲聖賢之言無驗矣余獨不然其敗死者皆鄉者彎弓其主之徒焉耳其餘無亡矢遺鏃之費則是未十年之謂也去歲丙申文明八年已當十年而未見其應矣今茲十月畠山賊入寇河內所過殘滅復無噍類其勢略

江守一守は
寺か（作者
自記）

與項籍相若於是乎諸州之黨賊者意氣揚々可見河內賊又攻記之根來山敗績走保河內十一月十一日夜防賊無故棄營而亡新出河公君皇與登濃二賊不攻而破彼甲者不逞其胃執弓者至失其矢官軍乘勝逐北其敗散之卒父不知子所之弟不知兄所在死傷者不可以十百數之二三賊魁館于江守（守疑寺者）一宿去蓋以其黨與也嗚呼天之亡時其在斯乎原夫亂之初起在五月者廼姤卦也其初六者一陰之始而與坤初六同臣弑其君子弑其父非一朝一夕之故其所由來者漸矣是也十月賊勢大振若坤卦純陰用事之月極則必變是將亡之策也十一月軍破者一陽來復之初小人道消君子道長也其爲日也又十一也寔冬至後二日也言其年數則十有一年言其月日亦同其數矣易之言也如合符節余適講史記項羽紀而河內賊盛高祖紀而防登濃諸賊一時敗亡不亦韙也哉

文明丁酉十又一月十四日記

これその時の實録にして 應仁記を補ふべし
（二十） 去年の秋、深川のある書肆の、朝鮮本の「法華科注」二卷を持來り示す。上層并

に傍注を書いれし書もまた拙からず。蠹のはみたる所せく、全部八卷ありて、價も又貴しときけば歸しぬ。ことしの春、書肆曬書堂全部をもて來しをみれば、同じ本なりしが、事しけてかへせし後、重て持來りて、此經あまた所にみせられたれども售れず、今は價もひきくなりぬれば買ふべきやといふ。三たび同じ經の來れるもめづらしく、その奥書をみるに左のごとし。

蜡月一十二
月
人日一正月
七日

余會托法住院景春藏局。曰。若逢鬻法花科注者。請告而知焉。前年蜡月二十七日。景春以好本被送。雖不堪舞蹈。以闕第一爲恨矣。翌年人日雲頂院仁如藏局相過見之。歎賞且曰。往歲店上見一卷於故番堆中。不知猶在也。否待我遣人搜之。須臾仁如蒼黃自携來。則如合符。不亦異乎。聞此經者。應仁亂後。西陣除鐘男某得之。而施與於慶雲僧某。其端闕者殆數十年也。嗚乎。余何幸不出十日以補之乎。屏山先生所謂神寶去來自有定數。不可以歲月而測焉。寔知言者也矣。時永正戊寅孟陬上浣日。東樵瑞佐。書于相國寺裡長得禪院。

永正十五年戊寅より今年文化十四年丁丑にいたるまで、二百年にみり。應仁の亂の

後、西陣の人慶雲の僧に施せしとあれば、三百五十餘年のものなるべし。其後織田、豊臣の代をへて、今の世まで傳はりし事、めでたき經にあらすや。況や朝鮮征伐の時など、かの國にありても恙なかるべしや。わが家父祖の時より此經を信じたまひし値遇の縁にもやと、速に買ひ得て家に藏む。實に文化丁丑四月二日也。

(二十一) 僧虎關の「濟北集」に云、予少して黃山谷の書を學ぶ。戊申の年の夏元國にゆく。歸る時眞本を得て歸る者あり。數々の船數本を持來れり。予之を怪しみ思ふ、昔泉涌寺の楞師山谷の書を好み、宋の盛なる時、宋國に留る事十三年にして歸し時、篋中の墨本數千紙、皆眞蹟にあらす。今をさる事百年にして、何ぞ眞蹟の多きや。遠游の者のいへるは、今元朝の士大夫黃山谷の書を好まざるが故に、散じて此方に入ると。嘉曆二年の文に見えたり。

(二十二) 「本朝文粹」に、都良香が道場法師の傳あり。敏達天皇の時尾張の國に農夫あり。夏の頃田に水をそぐ時、空くもりて雷雨せしかば、木蔭に耒を支へて立ちしに、雷おちぬ。形小兒のごとし。農夫耒をあけて撃んとせしに、雷かたりていふ、汝われを害せずば、汝に恩を報じて、汝がために異なる兒を生ぜしめん、といひしが、いくほどなく

てその妻男子を生めり。年十餘にして甚力あり。元興寺の鐘堂にすめる鬼を殺せり。童子僧となりて、道場法師と號せしよしをしるせり。今に小兒を怖す諺に、元興寺にありませんといふは是なり。寶曆五年乙亥、聖武天皇千年の御忌に、南都元興寺にて開帳ありし靈寶の中に、古き面あり。其形左のごとしといふ。

又宝曆

道場法師一

面龍雷五魂

八雷變相惡

魔降伏神像



二十三 文祿慶長の比盛に行はれし一節切尺八といふものあり。今はふくものまれなり。按ずるに、「羅山文集」(卷十九)元和九年作

唐太宗貞觀年中。有起居郎呂才者。善知音律。依破陣樂舞圖。教樂工百二十人。被執甲執戟而習之。以寓偏伍魚麗之兵法。又造尺八八十二枚。而獻之。太宗大嘉焉。於是景雲見。河水清。協律郎張文牧。制景雲河清歌。名曰讌樂。奏之管絃。爲諸樂之首。其樂器若干數。尺八居其一矣。(中略)吾國近代有宇治菴主狂雲子一路。叟者。并避世之徒也。俱吹尺八。(下略)

同書「餘音尺八記」に云、
我邦尺八形制者。擇奇生之竹。挑截本末。規摹瓠矩。間一節。上短下長。總稱其中。虛如解谷而無底。四孔在面。一孔在背。炳表點髹。腕裏順樸。大於笛稍短。而豎吹之焉。頃有大森宗空者。善吹尺八。嘗手自截一管。聲調適意。號曰餘音。蓋取諸赤壁客吹洞簫。餘音嫻々。不絕如縷之語也。宗空平日雖造若干管。然未有過餘音者。故祕之年久矣。堀丹州太守爲政。講武之暇。吹尺八。宗空於是取餘音以呈焉。(下略)

按ずるに、一路老人の名は、僧横川が「京華集」(卷四)にみえたり。
依一路老人詩韻

白髮高僧來得々

茅椽雖小有三條

迎川蓋直梅橫水

送濟風顛雪滿橋

尺八數聲雲起處

尋常一樣月沈宵

扶桑國裏無人會

咲破山中且過寮

又狂雲子は一休なり。一休自書の詩に、

一枝尺八恨難禁

吹入胡笳塞上吟

十字街頭誰譜曲

少林門下少知音

此詩狂雲集には見えず。

糸竹初心集に云、

一先一節切尺八は、其濫觴まちくにてさだかならず。其かみ異人有て宗佐老人に傳へたるよし、代々いひ傳へたり。然しより、宗佐は高瀬備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也。此宗君は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤なり。織田信長公につかへて人に名をしらる。信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念をこととし、尺八の

ぼろくー
虚無僧

妙音を味ひ、此道中興開山となれり。流れの末をくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだもみず。わづかに其かたばかりをうつして、今書にしるし、宗君門弟の外、餘力有て音をしらべんと思ふ人の一助となさんとおもふのみ也。虚無僧尺八といふは、長尺八寸にきるゆゑ、尺八といふとぞ。濫觴はたしかに不知。そのかみ由良の法燈此道の祖たるよしいへども、了簡せず。昔よりほろくの家に用るものと聞えたり。梵字、漢字、色おし、しら梵士などいひしもの、此尺八の修行者ときこえたり。近き比不人といふ虚無僧有て、ごろといふ事を吹出し、其外れんほながし、京れんほ、さむなり、井川、よし田など云さまぐの手有て、いづれも呂律の調子にあはせたる物とは聞えず。されども我道にあらざれば、其深事をしらす。一、一節切尺八切やうの事。節を一つこめ、長さ一尺八分にきるゆゑ、此名を附といふ。節より下は七寸、上は三寸八分にきる也。但竹のふとほそによりて調子違ふものなれば、極て寸は定まらず。筒音を黄鍾の調子にあはせたるものなり。(下略)

中村宗三

此書二板あり、「寛文四年甲辰卯月吉日 秋田屋五郎兵衛板」と、「寛文十二年壬子林鍾日



寛文九年板本

文宝模寫

山形屋吉兵衛板」とあり。
洞簫曲(卷下)に云、

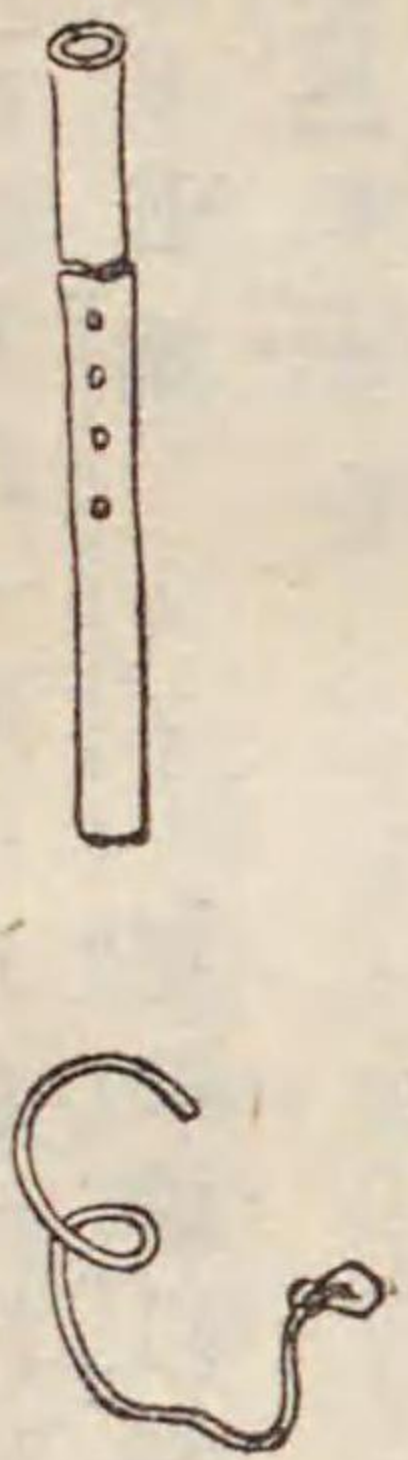
抑 當流尺八者。宗左老翁相傳高瀬備前守。備前守傳實相房。竝尼子同
宮内少輔。實相房傳教院。教院傳大森宗勳。大居士宗勳傳愚以。愚以傳惠
海。是相傳村田宗清。依一流之義者。無滯覺習畢。爲一毛所誤。不可
有之。予雖爲祕書。一向之所望。依難默止。贈書之者也。

于時明曆三四月壬寅嚴島暫居賤所狹家 注記 大坂村田宗清

(絲竹大全第四卷「紙鳶」に云、

實相房は教院に傳へ、教院は安田城長につたへ、城長は大森宗勳につたへ、宗勳よ
り中興して、今の世に是齋、宜竹、洞中節、指田一音など云あまたの吹手蜂起せり。
元祿十二己卯曆 永田調兵衛板行

「和漢三才圖會」に云、



按一簡切似尺八而短其長一尺八分止一節故名之近世之製與尺八同類異音遊興之具其音嫻々不絶如縷以爲謳歌之語與三絃相比宇都宮由的が「日本人物史」に云

大森宗勳翁

宗勳者其先出自彦七幼好音樂頗以尺八鳴世曲節無施而不可也一日宗勳登樓奏曲時有鳴鶯來和之豈不同聲相應之謂乎後陽成帝有詔使宗勳製五調子之尺八此名譽彌高矣至今言尺八者以宗勳爲法

黒川道祐が「雍州府志」(卷七)土産門(下)に云

笛尺八所々造之其内宜竹所作爲妙近世指田某所造亦佳也吹笛有數流所謂牛尾流一草流守田流是也尺八倭俗稱洞簫今按洞簫其製與尺八異考之中華所謂短笛是也倭俗專弄之近世吹之有兩流所謂宗左流西實流是也宗左弟子有理菴宗勳者於尺八也世稱美之其次曰宗拮今西實流絶凡弄尺八者多出自宗勳者也尺八之發好音者多有稱號是謂名管

村瀬栲亭(名之熙)が「藝苑日涉」(卷四)尺八の條に、委く一節切の事を辨じ、體源鈔を引きて、

尺八之制凡六曰黃鍾切曰盤涉切曰壹越切曰雙調切曰平調切曰新黃鍾切切者國語云調律裁管也蓋管之長短依律損益最長者爲壹越切(俗讀云非都越祗黎長曲尺一尺一寸最長者爲平調切長曲尺一尺四寸近世所傳唯壹越切之一管耳余幼時猶有善此管者今之尺八笛盛行而壹越切遂廢云々

天明の比深川にすめる調理家望汰欄のあるじ祝阿彌、一節切を學びて吹しが、名管の世にすくなきをうれへて、今の世に一節切を吹ものすくなくなりし故、古人の銘ある管多くは茶人の蓋置にきられて失へり、といへり。惜しむべきの甚しきにあらすや。市橋家の巨山崎(正峰)の所藏一節切十九枝。

- 柯亭銘 黃鐘調 三百年來の物なるべし
- 無銘 樺卷 同 四百年來の物なるべし
- 新枕銘 同 紹窓作

此君銘	妃聲銘	浦風銘	無銘	初郭公銘	山里銘	七夕銘	同	無銘	鶴音	無銘	鶴舞銘
同	同	樺卷	樺卷	黃鍾調	黒塗樺卷	同	同	樺卷	樺卷	樺卷	黒塗樺卷
			燕蒔繪	黄鍾調	黄鍾調	黄鍾調	鸞鏡調	神仙調	亮鍾調	同	同
				黄鍾調	黄鍾調	黄鍾調	法橋	法橋			
							宜竹作	是齋作	宜竹作	宜竹作	宜竹作
							不知				

吹おろすあらしならでばとふ人もなぐさめがたき秋の山里 歌蒔繪

我も人も卯花垣のへだてなく聞くぞうれしき初ほととぎす 歌蒔繪

無銘	雪山銘	寢覺銘	なら柴銘	尺八笛箱	篁	同	同	同	同
樺卷	同	黒塗無樺卷	同	同	黒塗	秋草蒔繪	鶴頭蒔繪	絡石銘書	裏書蒔繪
同	同	同	同	同	東山の比の物なるべし	東山の比の物なるべし	東山の末の比のもの歟	江州中野蒲生氏	城跡古木定家かづらもて是を造る

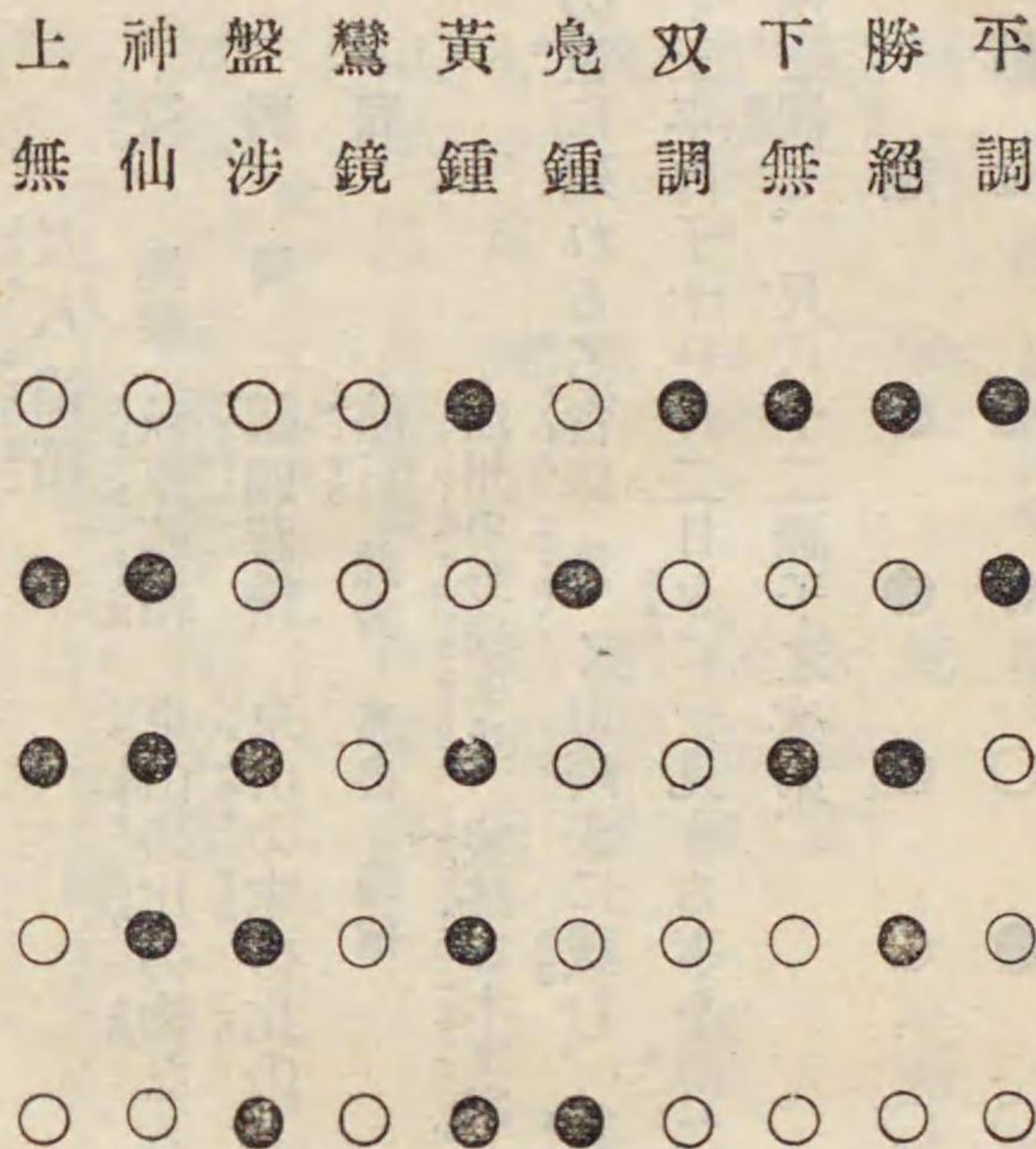
今この世に残れる名管は悉く山崎氏に藏む。數十年の精力を盡て是を得たりといふ。文化十三年丙子十一月二日夕に一見する事を得たり。又永祿年中古文書「洞簫曲」に載する所と同じ。尺八十二調子之次第。

一越 ● ● ● ● ○ ○
 斷金 ● ● ● ● ○ ○

按するに、大森宗勳の名、元和の「羅山文集」に宗空とあり。寛永の「尺八手數目」といふものに宗勳とあり。明曆の「洞簫曲」に宗勳とあり。寛文の「絲竹初心集」に宗君とあり。享保の比ある人の記せる尺八譜引書に宗薰とあり。いづれも代々ソウウクンと號せしなる

永祿九年閏八月日

清 彌



べし。山崎氏云、宗薰の名三代に及び。初の宗クンは名人也。中の宗クンは多能なり。末の宗クンはさもあらざりけりと云々。又一節切尺八は洞簫にあらざる事、委く「藝苑日涉」にみえたり。

(二十四)「楊鳴曉筆」に云、

調子肝要事、觀應年中、後醍醐天皇兩六波羅を亡し、帝道を再興せんと思召せども、終に南方に引籠り玉ひき。其頃樂人豊原龍秋と云者有。文筑後が先祖也。樂の名人也。宮商の調子を伺ふに、宮がしづみ、商がかかる程に、タツアキは不審す。又大原に聲明者のなにかしの僧都、聲明の宮の調子がしづみ、商の調子がかかる程に、是を不審して、京へ被上。タツアキは大原へ行くに、賀茂河原で行逢たに、是を互に語りて、不審はれずしてはた。さて宮は君の位也。商は臣下の位也。宮の天子は南方に引きこもり、商の臣たる武士は都を取り、故に天地も宮商角徴羽の五音と通じた物也。人君の心悪ければ、夏も寒く冬温也。

(二十五)明譚友夏(名元春)「答李長叔表兄書」に云、

又平嘗好爲人涉筆、作一箒筭數字、而知與不知。固來相強、敗楮退筆、率滿

床几刻期追索有如連一負。虛火攻中對飯不食。常自思惟。日月逝于上。體貌衰于下。前有未了之事。現有當卜之歡。而枉費精神。供一人之刻之求。眞有何益。不如已之。已之不信。遂作一札。有來乞者。舉以塞之。此既一事矣。云云。

とあり。予が平生人に書を乞はるゝ事多し。此書をよむにいたりて嘆息にたえず。此方の人は、一札をつくりて責を塞ぐとも、中々に聞いるゝ事かたかるべし。

(二十六)「聯珠詩格」周南峯閩浙分水界の詩あり。

古驛頽垣不記春

隔籬雞犬舊比鄰

東家纔過西家去

便是閩人訪浙人

此方の美濃と近江の寝物語に似たり。

(二十七)「元史類編」に、「貴竹有呼應泉。呼之水即湧出。」按ずるに、美濃の念佛橋の類なるべし。

(二十八)今江戸目黒の事を、延寶板の「江戸案見圖」に、妻驪と記せり。詩人驪山と名づくるもこれによれり。按ずるに、「仁部記」(權中納言資宣卿)弘長元年七月の下に云、「御牛

妻黒(炎暑天爲用意。今一頭二文字内々儲之。)とあり。之によりてみれば、妻驪は黒馬にあらずして黒牛なるべし。又「長秋記」(皇后宮權大夫師時卿)相撲人名九番左伴固季。武藏國住字目黒丸」とあり。此地より出し人なるかも知るべからず。

(二十九)梅岡松村子長(名延年)云、孟子に滕國壤地褊小なることを云。今山東省袁州府の滕縣は、古の滕國の地也。(古今四竟)一彼一此、沿革出入もあらん。今の界を以てし

るす。今清朝の書に、滕縣の租税の數を載るに、徵銀四萬二千七百四兩、雜稅二百五十兩、米九百八十二石、とあり。是公儀へ取箇の數也。其四萬二千七百四兩は、今日の金の

金にして七千百七兩一步五匁也。(中華の銀一兩十匁雜稅銀二百五十兩は、此方の金にして四十兩二步拾匁也。(金相場今の六十匁のつもり)兩件合せて金七千百五十七兩五匁

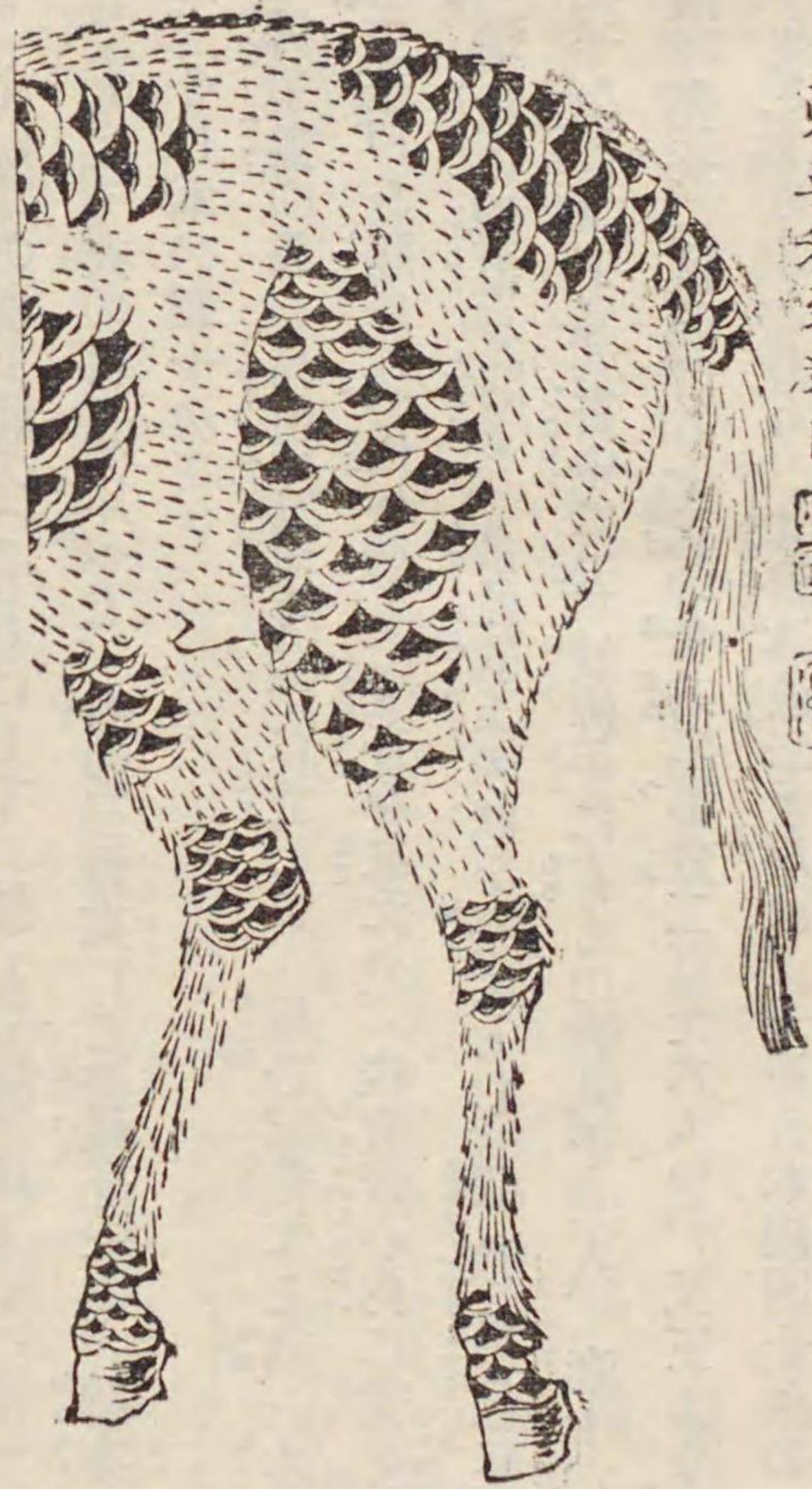
也。米九百八十二石は、此方の現米四百九十一斛也。(中華の量半分也。其一石は此方の五斗也)此米を金にして四百九十一兩也。(金一兩に一斛のつもり)前二件を合せて都合金七

千六百四十九兩五匁也。是を倍にして(中華は正銀通用、今日本の南鐮と云ものなり。此方の銀賤しき故、唐銀一兩の所へ、此方の文銀二十匁のわりの勘定なり)一萬匹千三百三十三兩五匁也。然れば滕文公は、今日本の大名にしては四萬石ばかりの身代也。褊小

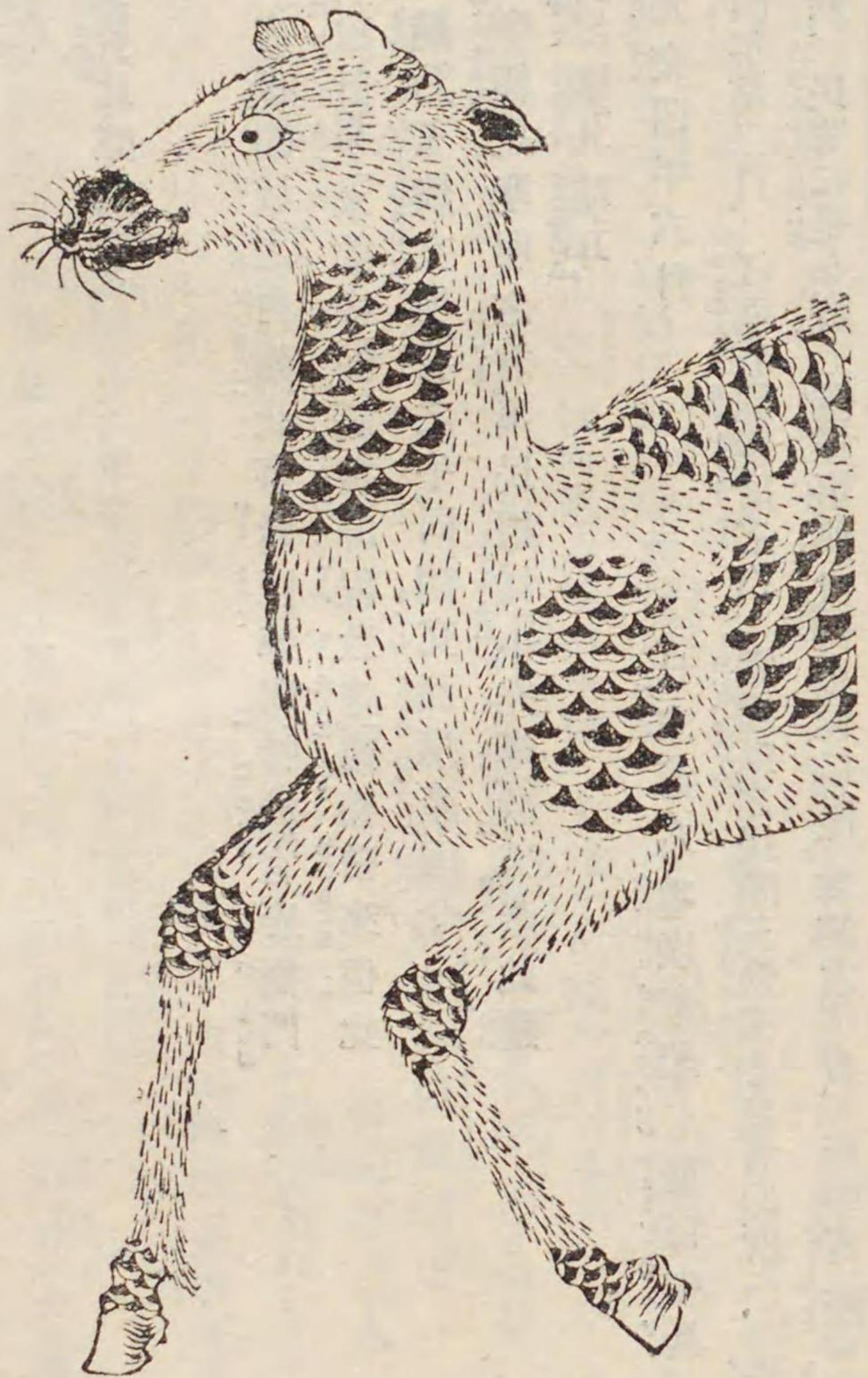
と云こと宜なる哉。按ずるに明張鼎が、「山中讀書印」に云、「吾過滕縣見碑刻滕文公行_二井田處_一云々。」又云、「漢書食貨志」に、穀の中價を云て、石三十とあり。漢代の米一石にて銅錢三十文の相場を、平中の價とつもりたり。漢の一石は日本の一斗弱也。九升九合八夕二撮に當る。然れば此方の一石にて三百文也。此方の一石の價金一兩(六十匁)と云ふもの中價なれば、漢の一石平均此方の六匁也。(漢の穀を米としてつもりたる也。もし粟ならば、今少し價宜からんなれども、倍には至らじ。漢書には穀とあれば、粟やら米やら知るべからず。銅錢一文は此方の銀二分に當る。(金相場今の六十匁を用てつもる。漢の時似せ錢を鑄、又は錢の鎔をすり取の盜あり。是にて漢代錢の貴きこと知べし。)又云、漢の時諸侯の封地より納むる租税一戸より銅錢二百文づつ也。(此方の銀四十匁なり。)千戸侯なれば一年の收納二十萬錢、即銀四十貫目也。金にして(一兩六十匁のつもり)六百六十二兩二步拾匁也。日本武家の祿にして(一石金一兩のつもり)僅千六七百石ほど也。是祿にて千戸侯の朝覲聘享より、衣食祭祀病喪音信、奴婢の給分、牛馬の飼料、諸器雜用居宅の修理等まで、一切營辨せしなれば、漢代諸物の價甚た下直なりしことと知べし。同志に云、衣

人 率 錢三百とあり。今此邦の極下賤のつもりにして、綿布五端(綿入一つ拾一つ單もの一つづつ)綿花百五十匁(冬衣の料)を用べし。右の三百文にて營辨すべし。綿布一端にて銅錢五十文ならん。(今日本の銀十匁)又云、漢の昭帝崩じて御子無ゆる、昌邑王賀を天子に立しに、行ひ淫亂なる故、太后の詔を以て廢し、湯沐邑二千戸を賜ひ、故邑へ歸し、宣帝を立たり。後宣帝心内に賀を猶忌したまひ、山陽太守張敞に璽書を賜り、昌邑故王の狀を察せしむ。張敞昌邑に行て故王に對面し、委細様子を言上す。其書中に云、奴婢中に在もの百八十三人、妻十六人、子二十二人とあり。(漢時妻妾の目混ぜり)王の身共に都合二百十六人也。又王より錢を出し人を雇うて夜巡りをさすることあり。其湯沐邑二千戸は、(一戸日本銀四十匁のつもり)八十貫目也。金にして(六十匁一兩なり)千三百三十兩餘也。今武家の祿にすれば三千五六百石の身上なり。此祿にて貴賤二百十六人の衣食病喪諸雜用、居所の修理、夜巡の雇錢まで營辨すれば、漢代諸物の價下直なること、此文にても見ゆるなり。(三十)清の乾隆四年(此方元文四年)麒麟の出し事あり。左につまびらかなり。乾隆四年二月一日午時鳳陽府靈璧縣天產麒麟。屬

身牛尾馬蹄五彩。腹下黃。一角々端有肉。縣宰即繪圖
申報進呈
御覽



東吳程致遠臨
[Seal]



雷州縮圖
[Seal]

一乾隆四年二月牛產麒麟於江南省鳳陽府靈璧縣民間王煥文者家因民間不敢隱藏即速呈報官府官府著畫圖形即刻進

上北京

御覽將此麒麟進

上

帝都之後即放之內苑此事格因傳聞特於官府衙門

內設計覓求圖樣即託畫師程致遠臨而帶來但此

麒麟乃王煥文所蓄之牛同龍交而所產因今

乾隆帝極是聖明之君萬民稱爲小堯舜故天產此靈

獸以顯其瑞耳

元文四年六月

日未第六番廣東船主龔恪中具

一乾隆四年當二月江南省鳳陽府之內靈璧縣之民間王煥文與中者之所牛麒麟產申候民間是是隱置候事難成御座候に附其節右の者所の官所へ訴出候

を官所より繪圖を以早速北京へ差上入御覽申候其後右の麒麟帝都に差上候處内苑に被召置候由に御座候右の段私承り候に附此繪圖も官人に手寄を以相求則程致遠と申畫師に寫せ候而持渡申候且又右の麒麟は王煥文飼ひ置候牛産之申候牛と龍と相交候而産み候由申候尤唯今乾隆帝殊外聖君に而小堯舜とも萬民相唱へ候程に御座候依之天右の靈獸を産し其瑞を顯候と申候

元文四年六月

日未六番廣東船頭龔恪中

唐通事二人

按するに乾隆帝乾隆元年丙辰(此方元文元年)二十五歳にして即位ありしより同六十年乙卯九月在位六十年八十四歳にして皇太子に傳へ明年丙辰(此方寛政七年)を以て嘉慶元年とす乾隆四十六年辛丑著す所の「欽定蘭州紀略」にいふ朕即位初年戸部庫銀不過三千萬兩今四十餘年以來仰荷上蒼嘉佑年穀順成財賦充足中間普免天下地丁錢糧三次蠲免漕糧兩次又各省偏災賑濟及新疆兩金川所費何啻萬々而賦稅並未加增非如漢武帝用桑弘羊唐德宗之用裴延齡以培克爲事而致府藏充盈也現在戸部庫銀

尙存^{そんす}七千萬兩^を。朕^な又何肯稍^な爲^な斬^な惜^な乎^や。且^や卽^て以^て歲^{せい}支^し頓^{とん}增^{ぞう}三百萬^を計^る之^を。至^{りて}乾隆^{けんれん}六十年^を歸^き政^{せい}之^の時^{とき}。所^ゆ用^る不^す過^す四^す千^{せん}餘^り萬^{まん}兩^を。加^{くわ}以^て每^{まい}年^{ねん}歲^{さい}入^{にゅう}所^を存^{ぞん}。其^{その}時^{とき}庫^く藏^{ざう}較^{かく}卽^て位^い時^{とき}。自^{より}必^{かならず}尙^あ有^{らん}盈^{えい}餘^{いよ}云^ん々^や。

財^{さい}用^{よう}は國^{こく}家^かの要^{えう}なり。十^{じゅう}四^し年^{ねん}以^い前^{ぜん}にあらかじめはかる所^{ところ}。思^{おも}ふにたがはざるべし。その代^よのはじめにかゝる瑞^{ずい}ありし事^{こと}も、また宜^いなるかな。

南畝莠言終

我^{わが}師^しからもこの園^うの大人^{だいじん}年^{とし}比^ひこの國^{くに}か國^{くに}のふる事^{こと}ども、何^{なに}くれとな^なく書^{かき}あつめおき給^{たま}へるを、此^{こゝ}まくにうちおかんもいと念^{ねん}なく、人^{ひと}にも見^みせまほしうて、大^{だい}人^{じん}へその事^{こと}きこえまるらせしに、さらばおのれにもものせよと宣^{のたま}ふまゝになりはひのいとまあるをりく、これを拔^{ぬき}書^{がき}しつゝ、ふみやのあるじとはかりて、木^きにゑらせつるを、一^{ひと}わたりみ給^{たま}ひて、南^{なん}畝^ほ莠^{いげん}言^{げん}と名^なづけ給^{たま}へれど、これはしももとよりはぐさにあらず。此^{この}草^{くさ}一^{ひと}たびつむ人は、二^{ふた}たびつまん事を思^{おも}はん。摘^{つむ}にしたがひてをかしきくさぐさ、さまざまなることのはどもあまたおひ出^いなん。されば維^{これ}莠^{いげん}驕^い々^やとし、て、やがて世^よの中^{ちゆう}にはひひろごりぬべし。かゝる事^{こと}つたなき筆^{ふで}もてしるせるもをこがましく、謝^{しゃ}肇^{てう}制^{せい}がいひけん、莫^{はく}廷^{てい}韓^{かん}は書^{しよ}才^{さい}ありて書^{しよ}學^{がく}なし、

邢子愿は書學あれども書才なしとか。おのれは書學もなく書才もなく、
たとへば時にあたれるわかうどらが、わざをぎの聲まねぶにひとしく、
いと益なきわざにしあなれど、師の宣ふ事いかゞはせん。これやことわ
ざにいへる、目しひのくちなはにおそれざるたぐひならんと、みる人わ
らひ給はんかし。

文寶亭しるす

俗耳鼓吹序

からうたの鼓吹俗耳のいしばりとうち誦しつゝ、肴なりける小柑子を
とりて、酒たうべてや聞きはやしけん、唐人の鶯にはあらぬ、濁みたる聲
に鳥がなく東訛にいひ傳へたる都のてぶり、書いつけぬれば、かの大な
る聲の里人の耳にいり難き類にはあらじとてなん、俗耳鼓吹といひ侍
るもかたはらいたしや。

天明八のとし水無月

杏 花 園

俗耳鼓吹の語路となる。語路とは、詞續によりて、然もなき事の、其ときこゆる也。
 九月朔日のちはをしし
 「河豚はくひたし命はをしし」と響の聞ゆるなり。
 市川團藏よびにはこねえか
 「うちから誰ぞよびには來ねえか」と聞ゆるなり。
 一年淺草正直蕎麥の亭にて語路萬句あり。その時宗匠の句、語路萬たま子也。のろまの
 たまごといふ事なるべし。此頃の佳句とて、人の物語せしを聞けば、
 田舎侍茶店にあぐら

俗耳鼓吹

惰農子著

○地口變じて語路となる。語路とは、詞續によりて、然もなき事の、其ときこゆる也。
 たとへば、

九月朔日のちはをしし

「河豚はくひたし命はをしし」と響の聞ゆるなり。

市川團藏よびにはこねえか

「うちから誰ぞよびには來ねえか」と聞ゆるなり。

一年淺草正直蕎麥の亭にて語路萬句あり。その時宗匠の句、語路萬たま子也。のろまの
 たまごといふ事なるべし。此頃の佳句とて、人の物語せしを聞けば、

田舎侍茶店にあぐら

のろまの玉
子馬鹿の
芽ばえ

「死なざ止むまい三味線枕」なり。

ぶざな客には藝者がこまる

「芝の浦には名所がござる」なり。

○金羅(俳諧宗匠)が點は、言懸の句を好む故に、卷中の秀逸に、言懸の句多し。思出し
て一二をしるす。

金羅—夜雪
菴

お目にかゝるはお初徳兵衛

あはれ柳の下へうめ若

姉女郎に顔も二丁目

夕べも一人きりしたん坂

朝々粥をくふや上人

猿寺の下は赤城の組屋敷

鍋島の尻は黒田の表門

組やしき通りぬけすべからず

市川團十郎三升、市川八百藏の後家と(名はおるや)密通の沙汰ありし時、

二町目—第
二流
くふや—空
也
猿寺—江戸
牛込

八百藏が後家へさんじやう仕つり

鬼娘の見世物ありし時、

きぬをめくりの鬼のみせもの(メクリカルダの札に鬼あり)

してやんしてどうした、といふ歌流行りし時、

駈落をしてやんしたがどうしたへ

この金羅は、

首を斬られにきたの御番所

にくいやうでも川井次郎兵衛(其頃御勘定奉行にて高名なり)

といふ句を高點にして出せしを、宗匠仲間衆議して、禁忌の句なりとて大に恐れ、金羅

を破門せしといふ。

○戲場の切落の天井は竹の格子也、名づけて葡萄棚と云ふとぞ。

○信濃善光寺如來、回向院にて開帳ありし時、(安永七年戌秋なり)川柳點の前句に、

後からゆるい髪だと如來言ひ(本多鬻の事をかくせり)

二菩薩は歩かつしやいと本田言ひ

切落—看客
を容るる所
の一部分

善光も初手は河童とおもつて居

○(此一項省略)

○宴席の戯に、衆人頭をさけてドグハンスウというて、一度に頭をあけ、いろくの顔つきをなすをドグハンスといふ。是は藤屋伊左衛門夕霧が許にて初めてせし戯なるよし、平賀鳩溪の話なり。

新町細見濔標には、藤屋伊左衛門と云ふものは、作りものなりといへり。

○古今の事を附會して、時代違ひの咄をなすを青特といふ。是は龜成といへる俳諧の宗匠の始めたる事也とぞ。青特は龜成が號なり。(龜成が墓在牛島弘福寺)

○俄と茶番とは似て非なるもの也。俄は大坂より始る。今會我祭に役者のする、是俄なり。ナンダくと問はれて思ひ附の事をいふ是なり。茶番は江戸の戲場より起る。もと樂屋の三階にて、茶番にあたりし役者は、いろくの工夫を思ひ付き、景物をいだししを、茶番々々といひしより、何時となく今の戲場になれり。獨狂言の身振ありて、その思ひ附によりて、景物を出すを茶番といふなり。今専ら都下に盛也。(大坂板に、「古今俄選」といふものあり、俄の事を記せり。)

會我祭一五月二十八日
芝居にて會我兄弟の祭を行ふ

菱川吉兵衛
一師宣

○元祿の頃の板にて、「月次の遊」といへる繪本ありて、菱川吉兵衛畫也。中に芝居の顔みせの事をしるして、つら見世といへり。

○歌舞妓の役者の異名ある事、もとは少かりしが、近頃にいたりて甚多し。一朱判吉兵衛などこそ人もよく知りたり。その外にもありしや聞きもわたらず。

親玉 四代目市川海老藏 小玉 五代目市川團十郎
頗 篠塚浦右衛門 さまよ 松本大五郎

松伯 山下次郎三
猶あるべし。是もまた伏柴加賀、榎僧 正の類ならん。

○塚越菜陽(三三)は狂言の作に老いたるもの也。一とせ森田座の顔見世の名題に、

柏木の衣紋坂 蕘替月吉原
梅津の掃部宿 蕘替月吉原
といへる柏木梅津の對聯、狂詩の名對といふべし。此年(明和八辛卯)吉原火災ありて普請出來し比なれば、蕘替へてといへるなるべし。(蕘替といふも狂言の詞なり)菜陽がつて作れる狂言の名題に、其名月色人といふあり。此狂言よりして菜陽が作衰へたりといふ。其名も盡ぬるといへる識語にや。今、月も吉原といへるは、祝ひ直せし意なるべし。

民間歌之一
楊貴妃寵を
受けし時の
こと也
招隠の詩一
文選

○「通鑑」玄宗紀、「民間歌」之曰。生男勿喜女勿悲。君今看女作門楣。門以楣而撐拄。言女能撐拄門戶也。今の人はじめて女子を生るを賀して、門開きといふに似たり。
○予かつて風雪の朝、爐邊にありて、最明寺雪の段を誦讀する事一過、左太沖が招隠の詩に代ふるにたへたり。

○淨瑠璃作者紀海音は、狂歌師油煙齋鯛屋貞柳が弟なり、と稻毛屋東作の話なり。

按、油煙齋狂歌集「置土産」の序に、愚弟紀海音堂貞峨とあり。

○紀海音が作に、青梅撰食盛といふあり。おちよ半兵衛の元祖なるべし、おちよ半兵衛の名を忌しにや、お長半平とありて、板行の本に、埋木したる様に見ゆ。故に末の方と

ころどころに、おちよとありて、お長と直さぬ所も間々見え侍る。
第二段目に、半平が濱松へ行きたりし留守に、女房お長を姑が去りしを、お長が伯母は半兵衛も同意と心得、途中にて半平にあひ、恨むことば妙也。

しうとめごのさがなうて、取りにくい御きげんに、辛防するは何ゆゑぞ。男の顔を樂しみに、くらす女房に口出して、最負こそあるまいけれ、陰日向になるほどの、氣骨は折てやられても、さのみ人はしかるまい。いふではないがかはいそに、物も見

んごと縫ひまする。書出し一つする程の目は、親達があけておく。うみつむぎなら人あいなら、標致はこなたの覺えてなり。ちつとのおちめは派手なれど、若い時は

二度はない、さのみ無理にもあらぬ筈。(下略)
手を書く事を、書出し一つとは、老婆の聲色、奇妙々々。末に七郎兵衛がことば見合すべし。きりやうは云はぬ處も、又妙也。

此はでの字、始終に照應あり。此所に島原の駈落ものにまぎれて、追手のかゝる所あり。これも此はでの字に眼をつくべし。この次に姑のことばを書き抜き置く。見合すべし。

同所お長が詞

此世の縁はうすくとも、未來はながくそふべしと、たのしみにした我身をば、むごとくと計半平を、じつと見やりし目の内に、恨と戀の二瀬川、みちくるしほぞ涙なる。深情妙語、多言するに及ばず。妙々。

第三段姑のことば、

ア、太郎兵衛様よい推量。半右衛門殿(半平養父なり)は佛様。めうとの中はちんち

ちんちく
大睦まし

ん。いなしたは此母。お前の様なよい衆の嫁子にしては似合はふが、此方づれの内にて、飯をも炊かにやならぬ身で、はだには小袖、はながみは、のべでなければ手にふれず。わしらはお寺の奉加さへ、百目の銀は太儀なり。五兩とやらの櫛をさし、鳥かぶと程つと出して、太夫の道中する様に、せばい所を八文字、そこらあたりの青物は、踏みつぶされて芥になる。(下略)

この姑がいふ詞を、半分はかけねと見ても、よほど派手とは見えたり、はじめの伯母の目からも、おちめはちつと派手なれど、と見える位なれば、姑の丸で無理ともいひがたし。

七兵衛にじりより、(中略)どこを聞いても其様に、よい事計はそろはぬ物で、身共が嫁は随分と、世體はようする、歩くにも、八文字は踏まねども、一文字をえ引かいで、是も又きのどく。(下略)

一文字をえひかぬとは、始の書出し一つかく程の目は明いてゐる、といふお長が手をかく事に對していへり。細かく。右の通りのこまかき文章の照應、一々かぞふるに違あらず。後世の作者も斯る文段あり

や。如何々々。

道行のうちに、お長半平が辭世をのせたり。

はる／＼と濱松風にもまれきて涙にしづむざ／＼んざの聲 半 平

古へを捨ばや義理も思ふまじ朽ても消ぬ名こそ惜しけれ 於 長

○松葉屋瀬川を、鳥山檢校が請出せしより後、天明二年寅四月朔日、つき出し瀬川いできたり。

竹村蒸籠自分明 松葉屋中第一名 檢校昔時金已没

瀬川今日水猶清

松ばやのちりうせぬ名をつき出しや瀬川の水に蒸籠の山

となん口すさみ侍りし。

同三卯年秋、瀬川を後藤手代のもの請出せしよし。(千五百兩をもて贖ひしといふ。)

同四辰年四月朔日、瀬川出来る。(このもと云ふ禿也。うたひめが禿なり。)

天明八申年三月、瀬川請出さる。主は松前公子文喬也。五百兩也と云ふ。

同四月朔日より、瀬川といへる出来る。

後藤一金座
後藤庄三郎

○すまひ人谷風梶之助、(與四郎)身のたけ [] 力強くして、一度も負くる事なく、
浅草藏前八幡の社内にて、相撲ありし時、小野川榮藏にはじめて負けたり。天明二年寅
三月二十八日の日なり。

わつと一輪
にかけたり

手練せし手をとろうがをの川や勝つと車のわつといふ聲 菅 江
谷風はまけたくくと小野川が鯉より直の高いとり沙汰 赤 良

○同じ年彌生五日の日、祝阿彌、文竿、五凌など、洲崎のほとりを逍遙し侍りしに、秋葉
の宮居の内に、猿をつなぎおきたり。めぐりに垣結ひまはして札を建てり。讀みてみれ
ば、「猿の近所へよるべからず」とあり。童などのたちよりて、いろひなどして怪我あや
まちもやありし時、親のむづかり言ひけん懲りて、かゝる札をや書きて置きけん。い
とをかしかりき。

望陀欄—當
時の有名な
る料理屋

○ひと日洲崎の望陀欄にて、酒に酔ひて物かくとて、硯の左にありけんを知らず、書
きはてぬれば、あるじ祝阿彌いとをかしがりて、戲言をかきて見せ侍りき。
白雲が柄袋は旅にあらず。赤良が硯は右にあらず。

○いつぞや四谷邊にて、「三國志」を講じける講師の、ある日門に札をはれり。「今晚より

孔明出る。」

出合

藏前八幡の普請小屋に(天明四年)「でやい無用」といへる札はりてありし。

○「小便無用」、「車無用」等の札は見なれたれど、一年牛の御前の堂の上に、をかしき札を
たておけり。「堂の上にて晝寝無用」とあり。その寂しさ是にておしはかるべし。

又牛込改代町の路次に、「がらくおくべからず」もをかし。がらくとは骨董也。

「寛政二年八月朔日より、築土明神八百五拾年忌、平親王將門御玉首也」といふ札もをか
し。

○浪花の一本亭芙蓉花は狂歌に名あり。ことし(壬寅)東に下りて、浅草觀世音の堂に、
一つの繪馬をさぐぐ。自ら寶珠をゑがきて、傍に狂詠を添へたり。

みがいたら磨いただけはひかるなり性根玉でも何の玉でも
ある日何者かしたりけん、一首の落首をなしおけり。

磨いてもみがいただけは光るまじこんな狂歌の性根玉では

京都にても落書あり。

光ろかの蒔蕪玉も藍玉も炭團玉でもふぐり玉でも

訥子—澤村
訥子

○小祿の事を稱して、はつち坊主の報謝米ほど、といふ名言は、訥子が由良之介となりし時云へるといへど、それより前に、近松作の「天經師昔曆」中の卷に、梅龍といへる講釋師のことばに見えたり。

○一日、今戸橋のかたへの船宿にいこふ。壁にかゝれる帳あり、題して曰く、「客人大人帳」。

○「現金かけねなし」の、「かけ賣不仕候」の、といへるは聞きたれど、髮結床の定書ほどをかしきはなし。「懸職一切不仕候」。又青山の餅屋の見世に、「居喰不仕候」もをかし。

○淺草日輪寺にて、能狂言をなして見物させしが、見るものなし。

落書

狂言に能なし猿があつまりて見ざる聞かざる入はあらざる

表徳—號

○竹本住太夫俗稱は田中文藏、(表徳文起)石町に住居す。

○局岩藤上鏡山藤かみ舊錦繪やまきこ(容楊なまき傑作)天明二年寅正月より中芝居なかのしほ(名代薩摩屋小平太、座元豊竹新太夫)座にて大あたり也。此時、竹本八重太夫下りて、堀川の段をかたる中に、猿の場大あたり也。その唱歌。

猿の場大あたり也。その唱歌。

猿廻し傳兵衛近頃河原立引に見ゆ。

お猿はめでたやな、婚入姿の、のつしりとく、詞コレさりとほく、ノホンホヨホく、あろかいな、さんなまたあろかいな、合の手コレくく、戴くものじやさかづきを、さんなまたあろかいな、合そこでおはつが戴くものじや、コレ戴くのふ盃を、さんなまたあろかいな、コレ嫁御のひるねは、ころりとせく、ナァコレ、ノホンホヨホく、あろかいな、えいコリヤく、ヤイコリヤ、さりとほく、ノホンホヨホく、あろかいな、合起きたら、たがひにだきつきやれ、オ、それで機嫌がなほつたぞ、キツく、あろかいな、さんなまたあろかいな、合くるりとかへつて、立つたりな、立つてくれ、コレくく、立たしやませ、ついでに日和を見てたもれ、よい女房ぢやのくく、ノホンホヨホく、あろかいな、さんなまたあろかいな、合日和見たらば、起きてたもく、そうじやく、お猿めでたやめでたや。

この猿廻しのうた、竹本八重太夫かたれり、大に流行せり。八重太夫俗稱泉屋平兵衛、人皆いづ平と稱す。

文化五年戊辰、中村歌右衛門(芝翫)中村座に下りて、この猿廻し大あたり也き。

○去年(辛丑)あたりより、京都にてはやりし歌とて、文竿の見せ待りし。

「しやうならくくぜつをしやうなら、宵の内にしやれじや、合上あけのからすがな
くといな、中なほりするまがない、くちすふあひだに、あけむかひのかこのしゆが、
やかましういふ、やかましいく、やかましいのめい物茶きん餅。

「しやうならく、喧嘩しやうなら、さめざや新介、かりがね文七五人組、濡髪長五
郎放駒長吉、黒舟の忠右衛門に、ざぜんの庄兵衛ざぜんの庄兵衛、庄兵衛のさる
もん薄雪さ。

○この頃酒宴にもてはやせる歌、

「そもくわれらは、西の宮の夷三郎左衛門の尉、色の黒いが大黒天、顔の長いが
福祿壽、頭巾々々かぶつて、おいこみ姿の親仁どの、言はねど知れし壽老人、布袋
はどぶつ、その中に、合美くしいのは辨才天女とほめたれば、そこで毘沙門はらを
たて、そこで毘沙門腹をたて、なぜ譽めたなぜ譽めた、七福神のその中で、辨天ひ
とりをなぜほめたと、いうたも野暮かいな、わらふ門には福來る。

庄兵衛のさ
るもん一團
部の左衛門
のしやれ

○(此一項省略)

近松戯文評

(情農子著)

「そよく風にさそはれて、はぎもあらはに、ねみだれて、ヨイくくくくヤサ。ア
リヤサ、ヨイヤサ、ヤツトセイ。(此歌をうたひて手拍子をうつなり。)

○曾根崎心中德兵衛上卷、德兵衛縁の下に忍び居、おはつ足にて喉を摩づる所妙々、可

曾根崎心中
一近松の心
中物のほじ
め

断腸
下卷

此世のなごり夜もなごり、死に行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足
づつに消えて行く、夢のゆめこそあはれなれ。あれかぞへてか曉の、七つのとき
が六つなりて、のこる一つがこんじやうの、かねのひびきの聞きをさめ、寂滅爲樂
とひやく也。

徂來先生云、近松が妙處、此中にあり。外は是にて推はかるべしと、宇佐美惠助(名は惠
字は子廸)の話也。
「摩訶十夜」に云、

涼菟一俳人
岩田涼菟

一會根崎心中の道行の中に、何々として何々と死に行く身の道の霜、一足づつに消えて行く、と云ふ所迄作りしが、言葉盡きて心たらず、いかにくくと案じほけたる。其頃伊勢の涼菟攝に來合はれけるを悦び、いかゞして取續けんや、御助言し給へ、と投げかけたり。菟聞きながら、外の咄して酒飲み、物云ひて笑ひ遊ぶ。門左衛門只管にすくめて頼めるにぞ、菟何やかや雑談しながら、夢のゆめこそはかなけれ、となりともやり給へ、と云ひしに、近松大に悦び、やがて作り入れしとなり。まことに詞情の盡きたらんに、いと佳く轉じたる文體、すらくとして、行跡のいかやうにも取つけやすき、元彼決前生後の文法。涼菟は奇異の作者。

明和二乙酉年八月板

右は古素堂五十周忌追善之俳書、右小石川紅束自書。

○「嫗山姥」(五百番之内)全篇、頼光の逡巡退避を以て文をなす。

怪胎一奪胎
などの誤か

第一段、惜むらくは敵をうつ事早し。第二段、姫の奥へ入るところ、散しの妙を得たり。不如此則山姥となる事あたはず。第三段、美女御前以て怯割愛、讀髻中書而始識其志。一哀深於一哀。第四段、山姥必ず奥を見まいぞと云ふ、是安達原の怪胎也。第五段、無味。

詹々一多言
する貌

○「百合若大臣野守鏡」後世義太夫本の名に似たり。

第一段、第二段、さして評すべき事なし。第三段、有馬湯處、此老本色、子竊父刀、使入感泣。別符殆死於浴室、忽如脱兔。奇々怪々。第四段、島中事妙々、鷹化爲女、妙一層。母子情態、宛然如睹。俊寛島物語及道滿大内鑑子別等、不能出於此範圍中。第五段、僞盲女餘波可笑。

○「淀鯉出世瀧徳」(小言詹々たる者)

上卷 名言、

ば、こゝぞうき世のだての大木戸、あけぬは銀のミがしの關、それつらくおもんみれば、

狂文、

大じん客衆の秋の月は、小判の雲にひかり、小傳よびましや長へんじ、おどろかすべきよはもなし。

滑稽、

新町橋のはしのうへ、橋辨慶が長刀の、さや落したるごとくにて、うろくとして

俗耳鼓吹

立たりしが、

下卷 妓東殺客藤五郎之條下、

詞「ヤアこりや、なんで殺さう刃物がな。帯を解いてしめころさうか。いやゆるりとする間は有るまい。烟草でふすべころさうか、酔うてさきへ此方がしなう。」

評云、痴態妙々。

本庄一本所

○本庄押上村、長行山大雲寺に古き石塔あり。

寛文十二年

寶安林清信士

中村長十郎

十月廿五日

十七歳

七三郎一名
優中村七三郎

如此紋ほりてあり。今の七三郎が紋也。その先祖歟。

寛政十一年己未九月一日、大雲寺へ立寄り見るにこの墓あり。

此寺に役者の墓多し。瀬川菊之丞代々の墓あり。委くは瀬名氏の役者墓詣に見えたり。

寛延二年九月二日

圓學院即譽源阿是空居士

初代菊之丞なり。

寶曆六閏十一月十三日

功德院淵譽水阿仙魚居士

菊次郎なり。

寶永二閏三月十三日

正覺院譽譽十阿方順居士

王子路考なり。

表徳一號

○原富五郎(後稱武太夫)表徳は原富、三線に堪能なる人なりけり。いつの年にてやありけん、市谷長流寺にて、原富の三線に白獅(市谷袋寺町一向宗淨榮寺先住)が尺八を合せて、道成寺の曲をなせしに、頃しも秋の末なりしが、空俄にくもりて雨降りけるとなん。此座にありあふ人々、その妙を感嘆しければ、原富笑うて、かゝる三線は、淫聲にて雅樂にあらず。道成寺の淨瑠璃、また古の曲にあらず。何ぞ天の感じ玉ふ事あらん。ほどよく雨のふりたるは、己が幸ひなり、と申しき。此時先新九郎、(鼓の名人)山彦源四郎、

俗耳鼓吹

六三九

(三線の名人) 歌舞妓役者尾上菊五郎、(梅幸)市村龜藏、(五代目羽左衛門)も聞居て感じけるとぞ。

此時白獅が吹きたる尺八は、放下著といへる竹也。此竹長サ一尺二寸、もと越後國のある山僧、此竹をきりて所持せしが、これを吹けども音いらざれば、久しく床の間に置きしに、ある日秋風ふきて、その竹に入りしに、面白き音の出でたるを聞きて、その竹を吹き見るに、よき音出たり。それより二なく秘藏せしが、鈴寶寺の普淨といへる僧、尺八に堪能なりける者、之を借りて吹きて、返すとき甚だ是を惜み、放下著と名づけて返しけり。山僧其志の切なるにめでて、すなはち是にあたふ。普淨是を白獅につたふ。白獅死にいたるまでは是を秘藏し、ある門生某に傳へしが、そののち門生死して、又淨榮寺(白獅子の住寺)に藏めけるとぞ。

寛政三年己亥上巳、同近郊庵主人觀放下著於市谷淨榮寺。

○坂東と吾妻との二の名字は、市村家の名字なり、と市村五代目家橘の咄なり。

○市村家橘、狂名を橘太夫元家といふ。天明五年二月十八日より、堺町へすけに出て、三ッ人形の所作事大入也。此時狂歌連中、三枚の摺物各二百枚づつおくる。これ芝居狂

歌摺物のはじめ歟。

礎の辯

○月の前のチ、マきぬたはア、マ夜さむをつぐるウ、雲井のチかりがねは、琴ぢにまがへて面白やア。(此間に手あり)夜半の砧は、時雨か雨か、うちつれだちて通ふ賤が家。是古代本手のきぬたなり。礎は秋氣にして平調の調子、行においては金をつかさどる。律はかなしむ聲に應ず。されば其心をもつて弾すべきを、花やかに手をひく事になりゆき、聞く人もさまざま、手のある事とのみ覚えしは、大なるあやまりなり。名づけてきぬたとあるに心をつくべし。唐大和ともに、きぬたの聲は感情のものなれば也。又いはく、近世おしなべて長唄といふは、意味有ることなるに、其わけも辨へずして長唄とはいかなる事ぞや。古歌に、

月前擣衣

小夜ぎぬたうつ音さびし秋風に更行く袖に霜や置くらん 兵部卿 長 綱

あはれ又誰ゆる長き秋の夜に月にうらみて衣うつらん
夜をさむみ賤が衣をかりかねの聞ゆる空の月にうつかな

爲家
爲遠

右礎彈方、并七段獅子祕曲、傳授せし名曲、

長井谷助 金子氏世野女 勝原氏悦女 多田氏たち女 西川徳藏 にしきや惣次
佐々木市藏 杵屋佐次郎

此外懇望に附、自筆して送り遣候名曲、

觀世古新九郎 市村羽左衛門 尾上菊五郎 山彦源四郎 山彦百次 高橋孫左衛門

小松屋三左衛門

安永元辰十一月

原武太夫盛和



行年
七十六歳

○松江老候(出羽の隠居也)葬送は、天明二年十月十三日也。

松江老候一
松平直政南
海と號す、
不昧侯の父

芝天徳寺に葬る。高名の諸侯也。(辻々見物多し、飴うり杯出たり。墓の石扉に十六羅漢有り、榮川典信の下畫也。めぐりに櫻を植う。又退筆塚あり。

○すべて東都士大夫の家、慶弔の事ある毎に、盲人多く来て施物をうくる也。朝四つ時前に來りて、四つ時に受取るといふ。その盲人、鞆町組、傳馬町組とて二組あり。

○「手れんいつはりなし」と挑灯に書きしは、いにしへの遊女奥州、「するけなし」と張札せしは、今の講釋師馬谷なり。「みれんなし」は、芝居三階の餅の名、「かけねなし」は現金正札なり。

○友泉染といふあり。友泉は繪師也。かれが書く所をうつして染めたるなり。尤墨繪にて書きたるも有り。友泉は祇園町に住すと、活涼が「世事談」に見えたり。按ずるに、貞享板「友禪ひながた」(四卷有)序に、「宮崎氏友禪といふ人有りて、繪にたくみなる事いふ計なく、古風のいやしからぬをふくみて、今様の香車なる物數寄にかなひ」とあり。

○此頃狎の名とて、人の見せけるを見れば、
壹まい黒 壹まい白 白黒ぶち 目黒 鼻黒 赤ぶち 栗ぶち かぶり むじな毛
毛なが 耳は大耳べつたりだれ 毛づまり
當世は (地びくの毛長流行申候)
上田すぢ こくすぢ 治郎すぢ 小田すぢ 大島すぢ

○天明五年巳八月廿五日、六代目市村羽左衛門家橋死。致興院讓譽保壽居士。寺は本庄
押上大雲寺。

○同年顔見世より、中村仲藏(六代目)中山小十郎と名を改む。是は仲藏養親にて、こ
との外世話になりしもの名なりといふ。歌うたひの家也。右歌に、

中村のワキ師はきねや江戸けいしやふりは志賀山歌は中山

志賀山の江戸一流は兩座にて中村生島ふりの三ヶ所

これは古市村家橋吾妻藤藏(園枝)に傳へしといふ。志賀山の家は身ぶりの家也。元祿二
年の板にて、「舞子式正稽古本」といへるものあり。予が家に藏め置けり。志賀山萬作(ま
ひ子の師匠)が弟子の名、并唱歌をのせたり。

寛政二庚戌年夏、中村仲藏死。

○天明五のとし七月十四日頃、御旗本藤枝外記といへる人、新吉原大びしや綾衣といへ
る遊女と、田圃に住める餌まきの家にて心中せしに、藤枝氏五千石を領する家なれば、
その頃吉原にての歌に、

君と寝やるか五千石とるかなんの五千石君と寝よう

といへるを、三味線にあはせてうたひ興じけり。予たはぶれに古樂府の詩を摸す。

羽林衛藤枝氏。與北里菱家倡綾衣狎。親戚諫

之。將幽藤枝氏于一室。藤枝氏走至菱家。携妓

入所。識農家共死。里人哀之作斯歌。

寧與君同寢 將守五千石 徒見五千石 不如一歡夕

烏亭焉馬云、それより前にある歌なりとも聞けり。予按計府簿、

知行上り候書留

寶曆元年未年

一高五千石(下總下野安房)

三浦肥後

天明五巳年

一高四千石(武藏相摸)

藤枝帶刀

然らば此歌、三浦氏の時の歌なり。焉馬老人の語徴あり。

文化十一年甲戌七夕後日記

○文彌といへる節は、文賀といひし座頭の三味線に、彌太夫といへるものの淨瑠璃をあ

はせて、語りし聲なり。よつて文彌とは名づけけると、名見崎喜惣次(剃髪して大喜都)の物語り也。

此説、文字太夫の方にて傳ふる所と異也。

○不忍の池の蓮、天明六年丙子七月中旬の大水よりして断えたり。近頃菱の多くなりたるも、蓮のために害ありしや。そのとしの七月九月頃、津田胡蝶子、植木氏、井上氏などと蓮見侍りしが、又寛政二年庚戌六月七日朝、徐徳卿、鈴木一貫、井上子存などと蓮見にいき侍りしに、去年頃よりして、蓮やうやく處々に生ひたりといふ。

○河東節の文句のうち、おもしろき所を左に抄出す。

神樂獅子

女にー女有
餘布男有餘
粟園、家殷
富上下交足

○扱、其頃、女にあまんの布あり、男にあまんの粟有り、(以下麒麟その園にいたるとはといへる迄、文選賦の語也。起し得てよし。)ひとつ星をみつけたら、長者にならうな。(以下俗語のうつりよろし。)

神樂獅子忍の段

九軒ー大坂
の遊廓

○じつは九軒に隠れなき、とけも花さく茨木や、難波なれどもあづまとて、かの楊貴妃がはえぎはに、王昭君がおひさがり、また李夫人がひとつまへ、西施がはける上草履、花の鼻緒をふみしだく、鶴のあゆみのゆたやかに、よめりくるわのすがきや。

有馬筆

○暮れなば、雨と契りにし、うき世の人のそらごとを、集めてうめて見るならば、淺くなりなん天の川、星もあま夜のなぞくになに、それは見えねど、とくくござれ、軒の玉水おちやすき、身よりながるゝ川竹や。

○こぬ夜つものうらみては、我さへ身をもわすれつゝ、心づからやかれぬらん、萩やききやうを其まゝに、つくらぬ顔の寂しさは、遠山の暮秋の色、はらくくと吹きぞ散る、人もあらしの音ばかり。(蕭敬)

○くまり枕のあひおひも、まつとは知らぬ君ゆゑに、枕ひとつでよいものを、残るひとつのおもかけは、蚊屋のおさへとなりにけり。(結得妙)

つものう
らみー津守
の浦、積り
の恨

鵠のはし小袖

○男をみがく玉くしけ、心のおくのひきだしも、はや秋風のふくさぎぬ、ぬぐふ油のしみ附し、比翼のけぬきとりいだし、かぎはよくこそ。

○さまに一夜のゆかり有り、たなばた様と書きちらす、禿が筆のかさぎの、はしたないやら戀じややら。

水上蝶の羽番

○なるもならぬもながし目の、ながれにそよぐ川竹の、あふさきるさにさはくと、さはるその夜は貫うてあうて、とんとねじめの一二三。(曲調如流)

○みつとや、みつありとてもてふくぞ、蝶はおぬしの替紋と、つねに縫はせて染めさせて、ひよくのはねをうちかけの、うへにみだるゝ洗髪、しやんとあけはの諸翼

○これは手越の少將の、夜はくれどもひる見せぬ、忍びすがたは朧夜の、つき出し女郎はつまくら、いほりの内にふたり寐は、風情なりける次第也。

帶曳をとこ結

○義秀聞て、ヲ、それこそ、いとやすけれど、からいと組のやへ織の、板のやうな

金輪際―地底

奈落―地獄

る幅廣帯、二重ながらむんずと取り、あけんとするに動かばこそ、金輪際よりはえ出たる、大磐石のごとくなり。(中略)

時致も、むかふまさりの大力、引けども推せどもゆるがばこそ、よもやぬけじのかなめ石、奈落のそこへとつゝ立たる、膝は枯木のちから瘤、すつくと足を踏占めしは、石になりたるくすの木に、櫻の咲きしごとくにて、綿帽子とつて八方を、にらみ附けたるありさまは、身の毛もよだつ斗也。

唐團扇

(此文琵琶行を摸擬す。意をとりて文をとらぬあり、文をとりて意をとらぬあり、その文の妙所は下に抄出す。○を印とす。錯綜の妙、言外にあり。)

ワキ潯陽のほとり江上の秋、秋風客を送つて一葉かろく、蘆間をわくる船の中、酒をすくめて白居易は、月にうそぶくあまの原、八重のしほぢの末遠く、千さとの外もくまなくて、水の上よどみもふかき江や、みぎはの霧の絶間より、なほ下もゆるる漁火の、ほの見えそめし苦のうち、浦ふきかよふ秋風の、幽にそれと琵琶のねか、おほつかなみの調かも、四絃一聲すればともこらみを語る、まれにだに、みぬめ

の浦のあま小舟、いかなる風によるべ定めん、ワキ船こそり居て聞もなほ、秋の哀も
 身にしれて、袖に涙のおもほえず、たぞやと問ふも浪の上、シテこたふる人もなく
 鷗琵琶聲やんでおともせず、ワキなほしき浪のうつゝなく、千こゑよびも、聲よばふ
 船の内、シテ「忍ぶとすれどあり明の、さやけき月に色もれて、苦ふくかけの花薄、ほの
 めく袖に露かゝる、ワキ時に樂天言葉をやはらけ、いかでかく波にうきねの船よせ
 て、妙なる琵琶のいと、なほ、おほつかなしやさるにても、御身はいかなる御事ぞ、
 シテ「あまのかる磯の玉藻の下みだれ、うき言の葉もしらいとの、びはをいだきておも
 はゆく、なかばかくせしかほせば、卯月に残る葉櫻や、木の間の花の露おもく、
 打たれがみをそのまゝの、すがたもよしやにくからず、ワキ樂天いと、あやしくて、
 たれか比目の浪枕、かたねの夢をうらみてや、いぶかしさよといひければ、シテ「くち
 なしの色に染むてふ山吹の、花もあだなる身のむかし、ツ「かたるもさすがはづかし
 の、もりてうき世の定めなき、いく宵々のかり枕、かはすちぎりも河竹の、ながれ
 の末と御らんぜよ、ワキ扱はあだなる河竹の、ながれの水の末とほく、などてや爰に
 すむ月の、行衛をかたりませと、ツ「なほさしよする船のうち、つなでかはして

シテ「花と見し、昔のはるは夢なれや、芙蓉帳のうち、せし手枕のかずゆるく、ツ「肘
 の環のはてしなき、思ひに瘦てとぶ螢、ながるゝ水の影うすき、あやのうちはお
 ひ風は、かぶろが袖の香ににほふ、けしきもよしや里わけて、片日夕だつ空もすゞ
 しき小村雨、かさの長柄をさしかけさせて、伽羅の足駄にこほるゝ露の、つゆにぬ
 れぬれぬれてほす、きくの盃ゆらぐ手も、はでな心かくれなるの、もすそにすそに
 したみ酒、シテ「また待宵に、ふけて廓のもゝ羽がき、ツ「まぶな男のかすり歌、聞く
 に心のまゝならぬ、つとめの客に下紐を、とくくしほる露涙、シテ「そよや浮身を巫
 山の雲の、行衛とはれて寝る宵々に、たれか身うけのかねごと、かしこはまゝよ
 この人の、涙ほくろもうるさしと、シテ「男えらみに今年も過つ、またくる春も、ツ
 「あだに散る姿の花もうつろひて、今はねびきのまつ人も、誰にすがらんよるべも
 浪に、身をうき草の根を断えて、さそふ水とて行くふねの、ともにこがれてくこ
 こに、茶をめせ茶をめせ、小うり茶うりて世をわたる、その人にさへ忘られて、や
 がてといひて出船の、片帆なみ間のよすがなく、こと浦風のおとづれを、磯山松の
 よそにして、心にふくる有明の、つれなく残る身はひとり、涙の外にとふ人も、な

くねを琵琶のもろごゑに、伏沈みてぞ居たりける、ワキけにや商人は、利をおもんじて、別離をかるんず。今樂天が身のうへも、都を出でて遙々と、斯る邊土に謫居して、古郷の秋のなつかしく、絲竹のこゑも稀なるに、いと珍しき琵琶のねの、ひなにはあらぬ思ひでに、今又かゝるうき涙、むかしにかへす花の袖、都の春もあだ夢と、おもひ比べてけにまこと、ともに天涯淪落の、ツゝあひ合たりし身の上と、シテ其歎息のことはに、なほ濡れまさる紅の、なごりの袖に琵琶とりて、いとかきならしさうくと、シテむら雨つたふこそより、くだけて落る玉水の、岩にせかるゝ瀧川や、流れもあへずせきとめて、たちまちさくる銀瓶の、水ほとばしる一曲も、是迄なりとゆふ汐の、さしてわかれのこゑも、遠ざかり行く船のあと、月ぞたゆたふなみだの袖、しほらぬ者こそなかりけれ。

此文まことに一唱三嘆と云べし、因て全文を載す。白氏が琵琶行をうつつして、斧鑿の痕なし。本文と離れて合ひ、合ひて離る、何等の筆力ぞや。意は琵琶行の詩を主として、調は諸曲の趣を得たり。

狂女草枕

黄河一拾遺
紀、黄河千
年一清聖人
之大瑞也

○おきまよふ身は淺茅が原、人をおもひの草かれて、嫁菜土筆は有ながら、茅花ぼうけしおもかけは、くしせぬ髪のかたよりに、よりもあはねばおやと子の、面變りせばいかならん。

角田川船の内

○黄河千年過ぎて後、一たびすめる角田川、牛田によする水の玉、かゝる例はあらかねの、土とり船のわれら迄、豊にすめる御代のはる、君にすゝむと書くとかや。
(謠に似たり)

○あの念佛について、日本に一つのあはれの候を、語つてきかせ申さん、紙仕度して聞き給へ、涙がやがて出ましやうと、棹の雫ぞはじめなる。

○ひでりの櫻色さめて、心ばかりはしめれども、口には綿の轡をはめ、さげべど聲の出でばこそ、不便なりともあさましし。

はつね聲

○梅でなければねぬ鶯の、梅でなければ腰さへかけぬ。(春情可唱)
山かつら

○二人が中^{ふたり}にあくる夜^よは、結びもわけぬひとへ帯、かけし島田^{しまた}のかみかけて、いつはりならぬ床^{とこ}の山^{やま}。

待宵

けぶり草
煙草

○簾^{すだれ}もしめるよるの露、消^きゆるおもひのけぶり草、かをりは餘所^{よそ}へ漏^もらさじと、きせる相手^{あひて}に待つ宵^{よひ}の、月はながれへやどかりて、ぬれて干^ひるまもなき盃^{さき}を、さしてさはりの雲^{くも}もなき、月見小袖^{つきみこそで}の裾^{すそ}模様^{ようばう}。

○ほんにおもへば假^{かり}の宿^{やど}、とめ木^きはぬしへやどる身^みの、つとめといふは名^なのみぞと、すゝむ言葉^{ことば}のいみじさは、なほも思^{おも}ひのます鏡^{かがみ}。

袖若葉

○あけほのも、紫^{むらさき}だてる筑波^{つくは}根^ねや、今朝^{けさ}しらぐと富士^{ふじ}のかほ、袖^{そで}のほひもわかやかに、そろふすがたぞ憎^{にく}からぬ。

○わか草^{わかくさ}も、かぶとぬけけり土手^{どて}の霜^{しも}。(發句^{はつぐ}歎)

雪間

○廓^{くわく}はひとへふたへ帯、緋^ひ無垢^{むく}の椿^{つばき}白^{しろ}無垢^{むく}の、梅^{うめ}がかをりをあそびつれ、誰^たがためぬ

紫だてる
雪は申さじ
まづ紫の筑
波山、嵐雪

らす衣手^{ころもて}の、つむ手もしろし若菜^{わかな}には、きのふもけふもゆきの間^まを、かよふが實^{じつ}か待^{まち}つもまた、になうてみせん田子^{たご}のうら、よきはいり江^えの波^{なみ}うちよせて、枕^{まくら}のふさの磯菜^{いそな}摘^{つみ}、戸^とさへ細目^{ほそめ}に月^{つき}かけも、道^{みち}たどくし土手^{どて}の馬^{うま}、^親くわんを^音むけにくさの花^{はな}。

○宵^{よひ}ふる雨^{あめ}をけさ見れば、下^{した}はくもらぬ袖^{そで}のいろ、寒^{さむ}きをあます山^{やま}おろし。

袖かゞみ

○かざせばぞ、柳^{やなぎ}は袖^{そで}のふりはじめ、そらは霞^{かすみ}の人^{ひと}はおしろい。

○とくくと、はるの行衛^{ゆくへ}のすだれして、一寸^{いちゆん}呼^よぶにも書^かいてやりけり。

○さす棹^{さざ}はすびみにきあめくれの月^{つき}、乾^{かわ}かぬはだにきて夏衣^{なつぎ}。

○見^みよかしの見るやみよかしみよかしの、身^みは身^み上^{あが}りの夜^よをそとに立つ。

○きひとつの暖簾^{のれん}をないておしだまり、鴛^{せし}も惜^{おし}むかさはらせぬ髻^{たむげ}。

○戀^{こひ}すれば人はわか木^きにかへり花^{はな}、解^とくも結^{むす}ぶもおなじ盃^{さき}。

此曲、俳諧^{はいかい}の句^くを以て一曲とす。妙々。

助六後日道行

吉田一吉田
神社には延
喜式内の神
々を殘らず
祀れり
うつちん一
痴者
げしん一わ
かり
松の位一遊
女の最上位
太夫

○つまぐる珠數のたもと川、水盃はるひもせず、京の吉田の神帳に、顔だしもせぬ
産神は、野暮てん神かうつちんか、けしんのわるい神さまと、うらみ唧ちしとがめ
にて、今また今の身の恥を、さらしなはてのみこしより、松の位とそやされし、そもま
あわしはぬし様の、つまといはれし初言葉、七十五日過ぎもせで、かくなるやうな
よめ入は、宿世いかなる因果ぞと、襟につまみしたきつせの、はだもふちにや沈む
らん。

此曲、俠客の氣象今みるがごとし。其比の當世文なるべし。

景清道行

○みのならば、花も咲きなんくんせ川。(發句なる歟)

蟬丸道行

御侍一御侍
御笠と申せ
宮城野のこ
の下露は雨
にまさされ
り、古今集

○やくあつて希世の卿、かやうの御すがたにては、盜賊のおそれあり。御衣を給はつ
て、簀をまるらせ候べし、「是は雨にきる、田みのの鳥と詠ぜしみのか、「又雨露の
御爲なれば、同じく笠を參らする、「是は御侍御笠とよみし物よなう、「又この杖は御
道しるべ、御手に持たせ給ふべし、「けにくこれも、つくからに千歳の坂も越えな

つくからに
一千早振神
のきりけん
つくからに
千年の坂も
越えぬべら
なり

んと、かの遍昭がよみし杖か、それは千とせのさかゆくつる、爰は所も逢坂山。

同笠の段

○第一第二の絃は索々として、秋の風松をはらつて疎韻落つ、第三第四の宮は、われ
蟬丸がしらべも四つの、をりからなりける時雨かな。

かぶる萬歳

○ふみに宿かすふり袖の、あけほの染もやうくと、むらさきだちし初空に、はるも
をさなき鶯の、わやくをおのが姿にて、心にならふとりなりは、いさみあるみのさ
へかへる、朝おそけなる雲の帯。

○ちよの數ある御代ながら、枝もならさぬ内氣はいやよ、世心しらぬ姫小松、初音を
しへん手枕の、夢見おほえていたづらや、おとな心の春もさて、つとめせぬ間にさ
く梅の、雪だまされし風情あり。

○夜はすがらに焼きすてて、けさは霞もにぎはしき、香聞きならふはじめより、客と
いふ名のいとしさは、どうともこうとも言へばえに、いはねにおふる戀草の、ふた
葉に物や思ふらん。

第一第二の
一白居易の
新樂府五絃
彈に、第一
第二絃索
々、秋風拂
松疏韻落
第三第四絃
冷々、夜鶴
憶子籠中
鳴

此曲全文ともよろし。一二の警句を抄出す。

狂女あらじよたい

過ぎこし方の枕草紙に、過ぎにし方戀しきもの枯れたる葵

泔坏一髪だらひ

○さかりなる、男ふたりを清少や、一二まくらの草紙にも、過ぎこしかたの戀しきは、かれたる葵ひな遊び、調度品ある姫ごぜの、十ヲより内のたはぶれを、二九や十九のやよひまで、女夫もてなすうらやまし、こゑもをします野良猫の、心のまに妻こふる、唐も大和もつながる、是煩惱の犬はりこ、ひいな祭のさきばらひ、うきを載せたるのり物は、さりし夕の合籠や、それより後のおとづれば、鳴くねをそふる色鳥の、ゆかしくのつもりきて、身のかひをけは外になき、行器香笛玉くしけ、かゝけの管に泔坏、二つべつつひ火吹竹、れん木すりばちわれからと、やつす今年の新所帯、とんとみづしの黒棚や、すゞり香ほん高つきや、かけばん合子蛤の、さら盃もびいどろを、置きまどはせるしどけなや。

○悔の八千度ふりしきる、のきの點滴、とひ竹を、二つにわりて見せたきも、ちかくはあらで遠ひらと、松蘿の契り引かへす、破鏡のわかれ、つきなくも、缶をたまくうれひ有り。

巡簷點滴似琴筑三體詩、又笋曲にみえたり。松蘿の契、毛詩に出づ。破鏡の別、古詩。破鏡飛上天又故事。鼓缶は易に出づ。

京わらんべ

此曲全文ともよろし。されどこれぞといふべき佳句も見えず。

ひとへ帯

○外のつとめのさはりとて、内外の者にせかれては、文も通はず主もこず、待乳の嵐箕輪の雨、いづれ思ひのつまごとの、うき寝にたつや名取川。

松の内

○新玉の空青みたるあけほのは、つね聞く鳥も若々と、若水はやき車井の、めぐりくるくる年の朝、こぞのまゝなる亂髪、こほれかゝれるさし櫛は、誰結べとかしどけなや、しどけなりふり品定め、しつけぞ残る戀衣、どの袖ひかん移香の、峰にひとはけ夕霞、二日は茶屋にゐるの日にて、手まづさへぎるはご板に、軒より傳ふつくばねの、篋にからまり裳へ襦が、襦が袖くゞる、手もとに一つ袂へ二つ、篋にからまり、もすそへまりが、まりが袖くゞる、手もとに一つ袂に二つ、戀ぞつもりていつの

青陽—春

沅湘—沅湘
日夜東流
去、唐詩の
句
ちたね—ち
とせの誤な
るべし

間に、ちよと百ついたまりの數、とんと落ちては名はたゝん、どこの女郎衆ぢやうしゆの下紐したひもを、結ぶの神の下心、かねてしりたし問はまほし、三日は客のきそはじめ、抱だてねの日のひとたきの、かをりほのめく奥座敷おくざしき、君がちびきの丑うしの日や、うしとやいはんわがおもひ、五日やみなん懲こりずもかよふ、土手どてにあけたる身ぞつらき、大いそのかねは、七つなまもどり、虎こに逢あをとて、裾すそにつゆ、小づまは嵐松風、實ひに君が代の繁榮はんえいは、虎もすみなん千本の竹、梅はづかしきえりの香に、まだ青陽せいやうの夕ぐれ寒く、かりぎの袂たもとちはやぶる、かみもおもひのあればにや、いつしかけふはきぬぎぬの、沅湘ゆんしやう日夜にちやひがしには、あま戸もはやくあくる日の、しめてねなん七くさは、ごぎやうたびらこ佛の座、鈴菜すずなすゞしろ芹薺せりなづな、君がためとて若菜摘つむ、ちたねの色こそ久しけれ。

此文、北里初春の景をつくせり。

松の後（此文松の内の甚しきをとれり）

○ながれ久しき夕汐ゆふしほの、挿櫛さしぐしさはるけづりかけ、かねてきのえと寐ねてまつ枕、障子しやうじまばゆきあさあけに、見おろすよももうらくと、はたけくの賤しんがわざ。

さきわけあひの山

○君とわれとは縁障子もぢしやうじ、はてはうき名のたて附つけに、身をひそめても影かげやどす、弓張ゆみはり月にいとかけて、するや胡弓こきうの忍しのびねに、きかせまほしきまへ渡り。

おせんものぐるひ

○人めの關せきを忍しのぶが岡、よし不忍しのほすが池いけの面おも、けにいさぎよき清水しみず村、弓張ゆみはり月つきや入さの山、谷や中の木立こだちしけり合あひ、花の盛さかりはみよしのの、よしのより猶上野山うへのやま。（清水村とは清水門のあたりを云歟。是は考證のために抄出す。）

○霞あせのまより灰ほのかにも、見てし人には逢あひたらぬ、淺黄あさぎちりめん茶ちりめんちりめん、鬱金うこんべにかば薄鼠うすねずみ、色ある人に見せばやな、をじまの海士あまの濡衣ぬれころも、もしほ角袖かくそで一つまへ、繻しゆ子すや唐緩白からあやどんす、縫ぬいすり箔はくのは、ひろに、ゆかりの色やむらさきの、ちりめん手ほそ結びさけ、たれ白菅しろあやの加賀笠かががさを、まへ深々ふかかと著きなしつゝ。（此頃の衣裳の風俗おもひやるべし。）

きよつら道行

○諸行無常しよぎやうむじやうの鐘かねのこゑ、けふを限かぎりとひゞけども、身の夕ぐれをしらかしの、杖つゑを力ちからに

霞あせのまより
—山櫻霞やまざくらあせの
間まよりほの
かにも見て
し人ひとこそ戀
しかりけれ
(貫之)
—見せばやな
—見せばや
なをじまの
あまの袖そでだ

にも濡れにぞ濡れし色はかはらず
(殷富門院大輔)

たどくと、一足ゆけば娑婆とほく、二足ゆけばさきちかし。(實に大夫の道行なるべし。)

とら少將道行

○戀はくせもの皆人の、戀はくせものみな人の、まよひの淵やきのどくの、山より落つるながれの身。

○御身とても、われとても、花ならば初ざくら、月ならば十三夜、盛にたらぬ身をもちて、おもふ人には添ひもせず、かゝる憂きめをみる事と。

袖とめ會我かみ結の段

○ふたみがうらの玉櫛笥、千筋の髪の數々に、たのむ誓の末かけて、すがれの伽羅のけぶりとも、消えなばともにわれとても、ながらふべきか今日有りて、明日をば誰かしらかみの、うすき契と思ふにぞ、くしの齒毎にもる涙、袖より傳ふ五月雨、おもひくらべてあはれなり。

○いうては歎きくどきては、又ひとむすびふたりねに、むすぶ契の元結を、くり返してはまき戻し、まき返してはくるくと、めぐりあふ夜の手枕に、もつれあひたる

亂髪、ゆひがひもなき妹背ぞと、泣いつ啣ちつとら御前、わりなく髪をぞげづらる。

髪を結ぶ體、今見るがごとし。妙々。

しのだづま

○又飛出でて細道の、一もと柳かいめぐり、しやんとたゝすむ姿見の、池水寒きうたかたの、うたてやかをる焼鼠、さはるとはねんねぢ返し、あらおそろしや。

紋盡しかご蒲團

○六つをうき世の火影とは、此里よりももしそめ、歸るあみがさ來る頭巾、おくるなごりと待つ人と、みちは二つにかはれども、同じ堤の通路に、いたゞくほしの挑灯は、くぎぬき松皮木村ごう、木村ごうと申すは、三浦のたれとしら茶亭の、下著に物をおもへとや。

○やみとふる夜もかよひ來て、三本からかさ雪折の、竹町にての九つは、土手の四つかや三つへいじ、大すながしの長刀、はおりは富士の腰をまき、袴のすその清見がた、浪の字をなす右巴、左どもるにくるくと、くるふや戀のつなぎ馬、間夫のた

づなにからまれて、矢筈のちがふその夜半は、籬にひとり立ゑほし、大一大萬大吉の、首尾を千とせと羽をのして、舞うたる鶴の松たかき、すだち禿のしきせもの。

灸する岩ほのたみ夜著

○ふたりねの、夢ばかりなる春の夜の、みじかき年をうらやみて、世話になるをば姉といひ、うきをかたるを妹と、名をよびかはす世界なり、今日しも聞けば虎御前、いとし男とかくろひの、淋しさとはん心ざし、常盤の色の松のはに、つゝむ事をもかくさぬは、中よいどしの誰彼と、手づから持ちしくだ物も、なにたちばなの懐は、母ある人の誠とや、是は姉へのみやけ物、茶やあつらへはふるめかし、思ひ附きなる品々は、けふの笑と夕まぐれ、「風の襖をさしもぐさ、さしもならはぬ竹ばしの、かみにかゝれば取直し、節のないのは我ふたり、すゑてやるのは恩ならず、すゑさするのを恩にして、男心の憎いのも、嬉しきほどの野暮となり、貧の病は苦にならず、外の病のなかれかし、左より先するゑそめて、右にとめるも夫婦合、灸によい日と定むるも、曆にまかす世のならひ、だまし賺してさながらに、おとなけないと恥しむる、熱さ怵ゆる「たはぶれに、一かたに思し召すかや深きかや、人をおもふ

たちばなの
懐—三國の
陸續橋を饗
せられて之
を懐にし誤
つて地に墜
せしかば主
人之を咎む
續曰く母に
贈らんとす
るのみと

か慕ふかや、逢へば別れをそのまゝ啣ち、きせる取る手に横雲渡り、さをなぐる間もやるせなや、「禿はそばにるねぶりの、顔に愛宕の山を見よ、今ふた火との何偽りも、男おもひのうら詞、根切は切のまじなひの、熱湯にひたす手ぬぐひの、ぬれてかわかぬ「勤ながらの憂き身にも、もれてや人の戀衣、恨みられてはまたうらむ、心その溜水、すます濁らす出ず入らぬ、其しこなしも化粧坂、しる人ぞしる物おもひ、さはる雲なき夕月夜、てり添ふ中の戯れかな。

此文、曲節の妙を得たり、因て全文を出す。結語餘情あり。

○一年市村座大人にて、中村座寂しかりし時、

潮みちて隣の潮干なかりけり

何江 (市村羽左衛門)

春の蛤ふんでふみつけ

柏筵 (市川海老藏)

市村家橘かたりき。

○天明八年戊申のとしの春のころ、名見崎大喜(始名喜三治)予が先の年書き置ける狂歌のことばがきと、歌とをあはせて、めりやすとせりとして、持て来て見せしかば、名をつ

け遣しぬ。

晦日の月

誠は嘘の皮、うそはまことのほね、迷へばうそも誠となり、悟ればまことも嘘となる、まよふもよし原さとるもよし原、うそと誠の中の町、(合スカバキ)傾城のまこともうそも有磯海の、はまのまさごの容の数々。

○此ほど三叉のほとりに、北里焼けてのち、假宅あれば、書きて遣しぬ。

かりまくら

身はひとつ、思ひは二つ三つ又の、ながれに淀むうたかたの、解けて結んで、結んでとけて、寝るもあだなる假枕、うはぎをぬいで下締の、あかつき頃の雲の帯、なぐや中洲のほととぎす。

○鶴澤蟻鳳 (初三村蟻鳳養子)「鎌倉三代記」といへる淨瑠璃のうち、姫君の水仕するところの文妙なりとて、口づから傳へし。

桶にひしやくとさまぐに、名も聞きはじめ天人の、おりるの清水むすほれて、酌めどもなれの水仕の手品、かへりかねたるつるべ繩、戀路におもひまるらせの、

なれのーな
れぬなるべ

筆よりほかはもたぬ手に、どう炊ぐやら、しらけの米に、こまろばかりのはてしなき。

享和元年酉浪花千日寺にて、蟻鳳墓を見て此事を思ひ出せしが、今年文化十五年戊寅二月八日、堺町にて、芝翫、三升、路考が、俳優に鎌倉三代記をなすを見て、又此事を思ふも、三十年前の昔なるべし。

戊寅二月望春雨中

七十翁 蜀山人書

○芝居の破風口に穴あり。トヒヨクにて鳥の下る所へ、樂屋の方よりみれば階子かけであり、ひおほひと云ふと見えたり。

ひおほひへ上る事、かたくなり不申候。

といふ張札あり。

○市川三升 (五代目) 狂歌を好む。名を花道のつらねといふ。丁未のとし十月晦日、曹司谷へまうでたりとて、歸路にたちより、暫といへる大字をかき、かたへに、いまが最期かねん佛といふうちにしばらくありて立歸る春と書したり。

暫一市川家
相傳の荒事

○天明四辰年十一月、顔見世、葺屋町市村羽左衛門座、櫓幕をおろし、桐長桐座にかしてより、今年ことし(天明八年なり)申年まで五年なり。市村(當)羽左衛門(龜藏)より到來書。

(天明五年巳十月十七日、家督相續羽左衛門となる)

今日御番所様御内寄合え被召出、羽左衛門芝居再興被仰附、難有仕合奉存候。興行之儀者、來る霜月朔日より、顔見世興行仕候様には亦被仰附候。右爲御知申上度如此御座候。以上。

申五月十八日

市村羽左衛門

菊屋善兵衛

同 茂兵衛

○くせまひ曲舞揃(二册)のうちおもしろき文句、

初瀬六代

○かりにみゆる親子の夢、幻の時のまと、かねてはかくと思へども、誠わかれになる

時は、思ひし心もうち失せて、唯くれくと堪へかぬる云々。

花車(全文)

○濡れつゝも鶉うづらなくなる深草や、たれをしのぶの浅茅原、實けに住捨すすてし故郷ふるさとの、野となりてしも露しけき、草のはつかにくれのこる、伏見ふしみの深田水しろく、薄霧うすぎり迷ふ夕べかな。

露(全文)

○つゆほどもかけじと思ふ盃に、むかへばかはる友人の、立はの花にたはぶれて、十五の數わかつて其まゝ心亂歌の、春の日ながきもわきまへず、秋の夜しばしめぐるなと、おもふも友の心なり、何いづまでもはなれぬ此度ぞうれしかりける。

隱岐物狂

○綺羅きらの御姿を引きかへて、衲衣なふえを御身に奉り、御似せ繪(今のにがほの畫也)をかゝせ給ひて、七條の女院にょゐんに參らせらる。(前後略)

由良物狂

○いにしへ人にあひなれて、偕老かいらう同穴どうけつ淺からず、同じ契とおもひしに、人の心の花か

葛城山の―
新古今集に
よそにのみ
見てややみ
なん葛城や
高間の山の
峯の白雲

とよ、葛城山の嶺の雲、よそにかよふと聞きしより、ひとり心はすみよしの、ねた
くも人を、まつといはれしとおもひしに云々。(略)

横山

○在原の中將二條の後にまゐりしを、いかなる人か大君に、つけのをぐしの鬘の髪
さしたる科にふせられ、遠島の身と業平は、當國に下りて、入間の郡みよしのや、
今の川越の山家の郷にありしに云々、(中略)それは秋かる鹿の聲、妻戀の歌の心に
や、又夏がりの玉江の蘆、あしくかたりなば、當座の恥辱家の恥、よしくいはじ、
唯酒飲うであそばん。

反魂香

○立さりて跡もなく、形も消えて跡は唯、烟ばかりぞ反魂の、孝行の子ならば、など
やしはしもとゞまらぬ。(下略)

歌占

○命は水上の泡、風に消えて江めぐるがごとし、魂は籠中の鳥の、開くを待て去るに
おなじ、きゆるものは二度見えす、去るものは重ねて來らず、(中略)しばらく目を

ふさいで往事を思へば、舊遊皆亡す、指を折つて故人をかぞふれば、親疎おほくか
くれぬ、時うつり事去つて、今何ぞ渺茫たるや、人とゞまり、我行く、誰か又常な
らん。(下略)

地獄の苦をとく月の夕の雲は、後の世の迷ひなるべし。

那須

○有時張良母にむかひて申すやう、我戰場に望み、密謀をなす隙に、後につゞく味方の
勢、箠にさせる箭をぬきて敵を射る事あり、いかゞはせんと申ししに、母是を聞附、
上衣をぬいで縫つゞけ、箠の矢にかけしかば、八百萬の軍神、母衣の縫目にうつり
つゞ、將帥の名をかゞやかす、それより母衣とは耀衣と書きたり、扱又母の衣とか
きしも、今の謂也。(下略)

徑山寺

○糸をみだせる柳は、緑なる色をそのまゝに、錦をおるてふ花は、又紅の色の外ぞ
なき。(下略)

玉取

○邪見偷盜は貧困の因縁、慈悲惻隱は富貴榮花の基とかや。(下略)

○市村羽左衛門(家橘)かたりけるは、家に三幅對の掛物あり。千歳翁、三番叟の畫なり。顔見世の朝ごとに掛けけるが、過ぎし焼亡に失ひたりとて、その發句計を覺えてかたる。

千歳 顔見世 なる瀧の水鳥遊ぶ日の出かな 何文(善兵衛)

翁 顔見世 この所久しかれきもはなの雪 九口亭 何江(羽左衛門)

三番叟 顔見世 水仙のはなぶさふつて鈴の段 玉淵亭 何亮(茂兵衛)

千歳 元日 若水やたえず吾等に掛鳥帽子 何文(善兵衛)

翁 元日 千早振る神も最負の春きたり 何江(羽左衛門)

三番叟 元日 元日や喜びあるを親にまつ 何亮(茂兵衛)

○五代目市川三升、その子海老藏柏筵、七歳の時かける達磨の畫に贊して曰く、

如何是祖父西來意 庭前柏筵子

如何云々
碧巖に、如何是祖師西來意、庭前柏樹子

○天明元年辛丑、小石川布施氏(狂歌の名、山手白人)の宅へ、洲崎望汰欄の主祝阿彌を招請、獻立。(客萬年氏、祝阿彌、文竿、予)

十月十七日

たばこ盆 蠟色火入宣徳 手あぶり

茶 肥後ほしの出し茶 茶わん南京染附

盃 貳つ組 地まきゑ 蓋臺 銘月すり出しまき 菖菊、屋州才

牡丹ちらしまきゑ

吸物 膳琉球もやう牡丹 箸あらゝ木五角

古渡南京青地中皿

銘々口取 朝日ぼら 二色しやうが 鹽梅酢

南京染附

どんぶり 車えび あはび鹽もみ

同斷

琉球 どんぶり 鯛ねた 唐がらしみそ

大丸盆

古渡南京染附 平鉢 つくし、よめな、みつば

古肥前小皿 銘々 しゃうゆ

八幡木地蠟色

大硯蓋 一つかけ、大かまぼ
こ二色、あられ鹽

丕品々盆かさざり

赤繪南京

ちよろぎ

木地

大鉢 鯉平作り 黒くわぬ
いり酒入

吸物 鱸 こんぶ
こせう

古渡南京壺

銘々ふたあり

木地らふいろまき繪

土器 白魚玉子とち

硯ぶた きす、なし、白魚
やき、おにがら焼

白かうらいやき

茶わん かけ、わさび

膳玉ざいくまき畫

溜ねり上

膳 しん溜ぬり 細はし

十きん出南京

白うな

向 鯛

さんばいす
大こんおろし
黒くらげしやうが
めし

汁 榎たけ
かいはりな

引て

平

いも、丸ふ、薄くす
まきゆば、
せり、袖

青地

焼物 鯛

色かはり南京

香の物 みそづけ大根、花丸(古づけ)
あさ漬、一口なす (新づけ)

朱

吸物 みそ、こたひ、
うど

硯蓋

ふき、松風くわぬ、にく
し、かうたけ、あはび

湯

仙だいあられ
かうせん

赤みそ

吸物 うどめ

春慶小角

木具足なし木地吸物わん

辻焼

銘々 赤みそれりもの

ふた茶わん

赤貝

吸物

せんかんなめ溜、膳朱くわ
しわん、あんかうひれかは
赤みそ

南京鉢

酢肴 みるくひ

後段 割めし

躰すまし しひたけ、かん
べう はんべん

菊手白南京
猪口 やくみ打込

引て

香の物 あさづけ
なづけ

吸もの すまし
たひらげ柚

口取 品々

わん小形 まき魚
寶づくし

菓子

しよあんくす
山吹まんぢう
八重なりやうかん

薄茶 銘こくそう

茶碗 黒らく、古唐津、
古瀬戸とりませ

あくるとし壬寅正月十六日、望汰欄へ布施氏夫婦子息予招請料理附。

孟春十六日 望汰欄

文臺

御吸物

鯛切め
尾
はだな
めうど

御硯蓋

かや
かちぐり、せん也
ほだはら
ところ
いせえび

のり巻
さけすし
しやうが

御小皿

おろし大こん
このわた
酢びてうを
田作りほくづき

御吸物

うしほ安かう
こんぶしん
黒くわぬ
ぜんまい

コンブノシン
ノ所チタンザ
クニ切タリ色
白クカンペウ
ノ如シ

御膳部

御向 たら子附、さるぼ、
こんぶ、わさび

御汁 米つみ入、かぶ、
からとり

小猪口 いりざけ

御飯 ぼうるく

御煮物 いりとり鴨、こ
んにやく、な

御焼物 あまだひ
ふきのたう

御手箱

御菓子 さらさやうかん
さわらび

御吸物 うすみそ、馬刀、
岩たけ、からし

御肴 漬あゆ、うにせん、鹽
かつをせん、なすび、
たうがらし

御鉢 大ふな、若大こ
ん、山せう

御茶碗 ちよ麩
りうきういも

御肴 うど黒あへ
色白あへ

一 みそづけ
ちよるぎ

山川酒

一 鹽だひ
一 かいわり
花がつを
一 ばか、いも、イモハ
ちんび、サトイモ也
青す
一 みるがひ、
ばう風
ひじき、くり

御吸物

一 たひほれ、同目、
みやうがたけ、
あかみそ、もろこ、
たつき大根、れぎ

御肴

竹の子、白うを
にしん、干疋

御吸物

あかみそ、もろこ、
たつき大根、れぎ

御肴

こせうみそ、ふか、
す貝、さより、わけぎ

御夜永

御茶わん

つけな
めし

御坪

今出川
みそかけ

椀もり

ほうぼう
若め

御湯

御くわし

御乾肴

あしのはかれい、
長いもせん、
青のり、くわぬ、
こんぶ、ゆば、
ハリくトスル
味也

此時あるじの思ひつきにて、先に布施氏にて南京の器を用ひしゆゑ、器物に唐物を一つも用ひず、和物のみ也。酒 闌にしてあるじ出で挨拶あり。布施氏、去年の調理はいかがと問ひ侍りければ、あるじ答へて、器物といひ調味といひ、残る所も侍らず。唯恨むらくは、一色申上げたき事あり、と申せしに、布施氏うなづきて、問はず止みにき。今はなき人なれば去年の曆を見、昔時の獻立紙にむかふがごとし。

予問祝阿彌以此事。祝云。白人料理。佳則佳矣。但恨美味累々。腹中飽満。故料理以不飽腹中不厭口中爲要。

○江戸の人、一日に黒砂糖百六十樽を嘗むるといふ。是は新川大島といふ家の藏より附出す故、大數知れ侍る也。杭州の人、日に三十丈の摺小木を食ふといひしも、同日の談なるべし。

○とほし油、一年に二萬樽つつ京より下す也。
天明のはじめより八年文月の二日にいたる。

此書南畝翁所著也。然るに碌々たる人の手に傳寫して誤脱甚し。
他日全本を得て再び校すべし。

安政五年戊午四月上澣

活東子識

俗耳鼓吹終

奴 風 序

和名抄に、紙鳶を師勞之と書しは、其頃の方言にや。都には、「いかのほり」といひ、あづまには「たこ」とよぶ。長崎にて婆羅門と稱し、びいどろよまをもて、彌生の十日に金毘羅の山にて、互に婆羅門をたゝかはしめ、かのよまといへる糸に、びいどろ粉を引て、糸をきりてかちまけをあらそふも、その國々の風俗なるべし。老のねざめに思ひ出せるくさぐさを、そこはかとなく書さしぬるはじめに、やつこだこのことあれば、奴風と名づけて、雲のはたでにかいやりすてぬ。

文化十まりいつゝのとし、卯月のはたちむゆかの日

七十翁 蜀山人

奴師勞之

(一) やつこだこは、鳶とびだこの形をうつして、足を尻尾しりなにしたるもをかし。是は安永の初より出来たり。其頃木室卯雲むろはううん(二鐘亭と號す、後白鯉館と改む)發句に、

初午はつうまや地に白狐天にやつこだこ

(二) 夏の頃、枝豆えだまめをありきながら喰ふは、明和の頃、三ツ又またに築出つきたしの新地出来し時よりなり。誰やらが句に、

冬はなく夏は中洲なかずの涼かな

椿軒先生ちんけん(内山傳藏)の狂歌に、

大橋のある上にまたかけたかと鳴くや鳴かずに行くほとゞぎす

此地を三ツ又また富永町と名づく、深川の名主持なぬしちなりき。わづかに十九年にして、もとのごとく川となれり。朱樂菅江あひらくわんかう(山崎氏)著す所の、「天抵御覽たいていごらん」といふ小本にくはし。是中洲

名主持一名
主の支配

の實録なり。

(三) 明和のはじめまで、「針がねく、二尺壹文、針がね」と呼びて、江戸中を賣りありく老父あり。予が若き時、牛込に居りしに、此邊へは毎月十九日に來りしなり。風説には、此老父隱密を聞出す役にて、江戸中を一日づつめぐると云へり。

(四) 馬鹿ものの事を、十九日と呼びしは、牛込赤城の縁日十九日なり。其頃赤城に山猫といふ娼婦ありしが、此所にていひ出せし隱名といへり。むろと書きて、十九日といふ字體にちかき故とも云へり。

(五) 明和九年壬辰二月二十九日の大火の時、通鹽町に大島蓼太といへる俳諧宗匠あり。(稱雪中庵) 火さかんになりし時、文臺に草稿を載せ、藥罐に白湯を入れて、心靜に立のき、深川六間堀要津寺の庵にゆきて、文臺を直しおき、發句をして、火のために問來る人をとめて、一夜に百韻をみりといふ。今はかばかりの宗匠もありやなしや。其發句、

緋ざくらをわすれて青き柳かな

(六) 予が牛込にありし時、此蓼太清水の藩の谷田貝左傳次といへるものを介として、酒

一陶をたづさへ來りて、

高き名のひびきは四方にわき出て赤らくと子どもまで知る

といへる狂歌を持來れり。其後深川要津寺に、毎月蓮華會といへる會ありしが、招かれて行きしに、一席皆禁酒なれども、ひそかに蓮社の禁をゆるして、酒などすくめたりき。

蓮社—晋の
惠遠法師廬
山に白蓮社
を結ぶ

蓼太晩年要津寺境内に小庵を占む。蓮華會は毎月二十五日にて、先師櫻井吏登の忌日なり。吏登は寶曆四年八月二十五日卒。

(七) 木室七左衛門(初名庄左衛門、後改七左衛門)卯雲はもと御徒目附なり。延享年中八月十五夜、殿中にて板倉氏細川侯を害せし時、細川の紋九曜の星なれば、

名月やけふ近星も間にあはず

といふ句を戯れにせしが、其句ひろまりて迷惑せしといへり。其後小普請方にうつれり。一とせ濱御殿に浚明院様成らせられし時、其頃の若年寄松平攝津守、濱御殿のうち船番所の柳かけに立とまりて眺望し給ふ時、卯雲た、ちにお側に進みて、今日はよき天氣なり、御發句はなきや、と問ひければ、懷紙に矢立の筆にて書きつけて給ふ發句、
しばしとて日かけをつくる柳かな

浚明院—徳
川家治

西行が西
行のは、流
るなり

それより御やしきにも立入りて親しくまゐりけるとなん。彼の西行が、道の邊の清水流れて柳かけしばしとてこそ立ちとまりけれと云へりしをとれるか。

番の頭一番

(八) 卯雲久しく小普請方をつとめし時、年老て頭はけ赤くなりければ、色くろく頭の赤きわれなれば番の頭になりさうなもの

頭の番を小
鳥の鶴にか
けたり

此歌、執政の御列座にきこえて、やがて御廣敷番の頭になされけり。

あがた田
舎

(九) 卯雲の狂歌を集めしものを、「今日歌集」と云ふ。其中に、
あがたのものに狐つきたりし時
狐ならきつねならぬぞ心得ぬきつねにせよや狐なりせば
そののち落ぬやら沙汰なし、と書けり。此の左註、尤も妙なり。

(十) 江戸にて、狂歌の會といふものを始めてせしは、四ッ谷忍原横町に住める小島橘州なり。(源之助と稱す、田安府の小十人なり) 其時會せしもの、わづかに四五人なりき。大根太木(山田屋半右衛門と云へる町人、辻番請負なり。飯田町中坂下に住す。松本氏俳名雁奴) 馬蹄(後に飛鹿の馬蹄と號す、咲山氏。田安府の士なり) 大屋裏住(金吹町の)

市令一町奉
行

屋なり、後萩の屋と號す。東作(四谷内藤新宿の煙草屋なり。稻毛屋金兵衛といふ。へづつ東作なり) 四方赤良等なり。(予はじめは赤人といひしが後に赤良と改む) 其のち大根太木、きり金を請とり、市令の腰掛にありて、かたへに湖月抄をよむえせものありしを尋ねれば、大野屋喜三郎といへるものにて、京橋北紺屋町の湯屋なり。是もとの木あみ事なり。此妻もまた狂歌をたしみて、知恵の内子といへり。それより四方赤良を尋ね來り、太木もくあみともなひて、橘州をとひしなり。橘州の唐衣といへる號を附けしは、椿軒先生なり。

貞柳一由縁
齋一藤原
卜養一石田
曉月一細川
定家一弟
幽齋一正
未得一石田
白玉翁一正
親町公連
口あみなに
なひ出し

(補) 岷江はじめ傷をうかぶる計なるも、楚に入て底なし。予額髪の頃より、和歌を賀邸先生に學び、はたちばかりより戯歌の癖ありて、しかも貞柳卜養が風を庶幾せず、たゞに曉月の高古なる、幽齋の温雅なる、未得が俊逸、白玉翁の清爽なる姿をしたひ、事につけつゝ口あみをになひ出し侍りし中に、臨期變約戀といふことを、今さらに雲の下帯ひきしめて月のさはりの空ごとぞうき
とよみて、先生に見せ侍りしに、此うた流俗のものにあらず、深く狂疎の趣を得たり、とほとく賞し給へりしは、三十年あまりの昔なりけり。其頃は友とする人、は

咏み出でし、土佐日記の「口あみも諸持にて」の詞をとる

草鞋大王一眞價なくして尊ばるる

つかに二人三人にて、月に花に予がもとに集ひて、莫逆の媒とし侍りしに、四方赤良は予の詩友にてありしが来りて、おほよそ狂詠は、時の興によりてよむなるを、事がましくつどひをなして、詠む痴者こそをこなれ。我もいざしれ者の仲間入りせん。と、大根太木てふものをもなひ来り、太木また木網知恵の内子をいざなひ来れば、平秩東作、濱邊黒人など、類をもてあつまるに、二とせばかりを経て、朱樂菅江また入来る。是又賀邸先生の門にして、和歌は予が兄なり。和歌の力もて狂詠おのづから秀でたり。かの人々よりく、予がもとあるは木網が庵につどひて、狂詠やうやく興らんとす。赤良もとより高名の俊傑にして、其徒を東にひらき、菅江は北におこり、木網南にそばだち、予も亦ゆくりなく西によりて、ともに狂詠の旗上せしより、眞顔、飯盛、金埒、光が輩ついで起り、是を狂歌四天王と稱せしも、飯盛はことありて詠をとぐめ、光ははやく黄泉の客となり、金埒は其業によりて、詠を専らとせず。眞顔ひとり四方歌垣と名のりて、今東都に跋扈し、威靈盛んなり。まことに草鞋大王なり。又一己の豪傑ならずや。是につぎて名だたるもの、淺草に市人玉池に三陀羅をはじめとして、枚擧するにいとまあらず。ついで尾陽上毛駿相奥羽

もの玉池一神田お玉が池

總房常越より、其外國々のすき人、日を追ひ月を越えて盛なり。かく世にひろこれるは、實に赤良菅江の功にして、予はた、陳涉が旗上のみなり。されど又臭きを追ふの徒すくなからざる中に、尾陽はすべて予が門葉のみにして、他の指揮をうけざるは、まさに雪丸、田鶴丸、玉涌、金成、挑吉、有文の諸秀才、よく衆を誘ふ故なるべし。この頃東都の諸大人の、餘國の歌に評するにも、尾陽を甲とし、上毛、駿河これに次ぐと聞きはべるに、予鼻うごめく計なるは、けに我をおこす輩といふべし。こたび玉涌翁、此冊子を人に託して、四方の諸君の詠をこひ、弄花集と題して、序を予にもとむ。もとより否むべきにもあらねば、繁文のつたなさをかへりみず、筆を醉竹庵にとるなるべし。

寛政九丁巳仲夏

こは橘州大人の序文にて、弄花集といへる書に載せたれど、前の條に因あれば書をへつ。(十一)天明三年癸卯正月十三日、京橋伊勢屋勝助方にて、木あみ狂歌の會をせし時集りしもの、三十餘人ありき。勝助が網の破損針金と云ふ名は、木あみより譲りし名なり。後に靜廉と稱す。其時の著到帳、おのく自筆にて記せしもの、予が家に納む。(天明樂事

本歌一和歌
家基公一家
治の長子

の巻物に入たり)

(十二) 朱樂菅江は、市谷二十騎町にすめる御先手與力なり。もと内山先生に學びて、本歌をよみし人なり。はじめの名を景基といひしが、家基公の御諱を避けて景貫と改む。靜山先生年忌の時、内山先生の出題に、

古寺鐘

鳴く鹿の園のわかればさらぬだに悲しき秋を鐘ひやくなり

と詠みしを、先生鐘ひやく聲と直し給ひき。其時はじめて菅江の歌よみなることを知り。[菅江]といふ名は、はじめ俳名を貫立といひし故、皆人貫公々々とよびしを、菅江と書きしなり。中ごろ菅江の名憚りあるべき歎とて、漢江と改めしが、日光の宮(公遵親王)の聞かせ給ひて、菅江にても苦しかるまじ、と仰せられしより、又もとのごとく菅江と書したり。「朱樂」の字を加ふる事は、安永の頃、我やどにて諸人酒のみし時、戲に行燈の紙に、我のみひとりあけら菅公と書きしを始とす。

(十三) 市ヶ谷左内坂の名主島田左内、酒を嗜みて面白き男なりき。狂名を酒上熟寢といふ。安永二年寶合といふ戯をなして、狂文を書きしことありき。牛込原町惠光寺に談義

憚り菅家
江家は朝臣
の名家なれ
ばなるべし

のありし時、此書院をかりて寶合なせし時、長持に寶物といふ札をはりて、惠光寺にはこびしかば、皆人まことの寶物と思ひて、うやく敷拜せしに、あらぬ物どもなれば、怪しみてかへりしものありき。此寶合の記二卷、市ヶ谷左内坂富田屋新兵衛(會尙堂といふ、狂名文屋安雄)板行にして世に傳ふ。今は此本すくなし。其のち天明三年、萬象亭竹杖爲輕、兩國橋の邊河内屋にて、寶合をなせし本三卷あり。

(十四) わが若かりし頃は、孟宗竹至つて少なし。大久保外山やしき門前腰掛外繫場といへる石の榜示のたちし所の農家に、植ゑありしを見に行きし事あり。(内山先生もともなひたり) 其後麻布六本木の植木屋にありしを見き。はじめ薩摩よりうつして、吹上の御園に植ゑられ、其のち四ッ谷大木戸の邊の、田安の園に根を分ち給はりしより、所々にひろまれりとぞ。かの大久保にありしは、四谷の園よりわかてるにて、麻布にて見しは、秋月侯の屋敷より出しなるべし。一年秋月侯にて、孟宗竹の羹を食ひしに、味ひとに美なり。是は薩摩よりうつせる種によりてなるべし。其後染井の植木屋根岸邊にひろまりしは、暫時のことなり。大久保百人町に、速水運藏といへる屋敷は、ことごとく孟宗竹を植ゑ置きしなり。

(十五) 明和の頃、四谷に藥草吉兵衛といふ植木屋あり。藥草多しとて、内山先生、大森見昌などともなひて見に行きしは、わが十六七の年の頃なり。(吉兵衛揚梅瘡にて苦しげに案内せしなり。)

(十六) 染井の植木屋伊兵衛が許に、享保の頃、「有徳院殿より」拜領せしといふ躑躅の大きなるが三本あり、面向無三唐松といふ木なり。其のち尋ねて見れば、其木もいづち行きけん見えす。伊兵衛は「地錦抄」つくりし者なりしが、其子孫衰ろへて、植木もすくなし。花屋十軒の内、小左衛門八五郎などが植木よろしくありしが、是また久しく見ざれば、いかゞにや。

伊兵衛の園中に、有徳公より拜領の楓樹一本あり。今猶存す。拜領の年月享保十二年九月なり。

(十七) 「地錦抄」の外に、「長生花林抄」といふあり。躑躅の事計書きしものなり。淺草御藏前のさらし見世にて、半本を見しことありき。

(十八) 福壽草に八王子より出づる一種よろしきあり。巢鴨の植木屋彌三郎にて見し事ありき。

有徳院殿—
徳川吉宗
地錦抄—觀
賞植物の圖
説

彌三郎は齋田氏なり。近頃此種多くなりて所々にあり。

(十九) 彌三郎物語に、巢鴨の古文書に、小石川の事を礫川と書けり。詩人の礫水といへるも是によるなるべし。

(二十) 深川八幡を富賀岡といふは、フカ川、フカ岡なるべしと云ふものあり。木下川淨興寺に、室町の頃の古文書ありて、龜下川とあり。江戸砂子に龜毛川といふも、これらによれる歟。

(二十一) 天明の頃まで、兩國橋の東回向院前(高野山大徳院やしき)に隠し賣女あり。金一匁を金猫といひ、二朱を銀猫といひしなり。其頃川柳點の前句附に、

回向院ばかり涅槃に猫も見え

といふ句ありしもをか。京の東福寺の開帳に、兆殿司の涅槃像ををかませしに、下の所まで見えがたければ、札をさけて、此下に猫ありと書きしもをかしかりき。文化二年乙丑の冬、長崎より歸りがけに、立寄りて見しなり。

(二十二) 同じ開帳に、虎關禪師の草本の「元亨釋書」に、黄山谷の眞跡の卷物などもあり。渡唐の天神の像に、渡宋の天神と書きしもをか。徑山の無準に衣を授り給ひしな

猫も見え—
涅槃の畫に
は多くの獸
を畫きたれ
ども猫は畫
かれざるな
り
此下に猫あ
り—此の畫
は猫を畫き
たるにて特

に名高きな
聖堂一昌平

どは、渡明の天神なるべし。
(二十三) 寛政の年、聖堂御再建ありて、神田明神の前の町屋を拂はれ、聖堂の圍ひ廣く
なりし時、前句附の句に、

將門一神田
神社の祭神

將門の前へ孔子は尻を出し

又其のち、

孔子一聖堂
の大成殿に
孔子を祭る

公家惡の前に魯國の實事仕

公家惡一芝
居にて公卿
の敵役將

といひしもをかし。明和九年の大火に、聖堂の孔子の像と、神田明神の神體とともに、あ
たり近き櫻の馬場に移して一夜明せしもをかし。夜もすがらいかなる物語かありけん
と、其の頃の人笑ひ興じき。

門實事仕一芝
居にて善
人孔子

(二十四) すべて城門の渡櫓の上の鴟吻は、(御作事にて鴟吻といひ、小普請方にて鱗とい
ふ)棟の上に向ひあひ立てり。大成殿の屋の棟に、鬼狹頭は外を向きてたつ。御作事
の人夫ども是をあやしみて、しやちほことは違ひて外を向きたるはいかゞ、といひしに、
一人の人夫のあざ笑ひて、宵の内は脊中合せしても、曉にはこちらを向くべし、といひ
しもをかし。

舜水談綺一
朱舜水の話
を安東省菴
の筆記した
るもの
牛門一牛込
東江一澤田
麟、當時有
名の書家

(二十五) 元祿の聖堂は、小普請方にて建てしが、寛政には、御作事方に仰附られしなり。
もと小普請方棟梁を勤めし中村七右衛門といふもの、(本所の焉馬が兄なり)庄内侯酒井
家の作事奉行たりしが、大成殿の地割の圖といふものを持ちたり。其繪圖に鬼狹頭を鬼
狀頭とあり。「舜水談綺」の板本には、鬼狹頭とあり。また鬼狹頭の瓦の下に、猫の如き
ものありて鬼龍子といふ。是は「談綺」にも見えず。

(二十六) 明和のはじめ、牛門の四友と稱せし岡部平次郎(名正懋、字公修、號四溟、後
剃髮改素觀)大森見昌(名彝倫、字君叙、號華山)菊地角藏(名禎、字叔成、號匡廬)など、東
江先生をむかへて、目白臺の潺々亭といふにあそび酒盛せし時、此あたりに白馬道人と
いへる醉客來りて、座中の客を罵りければ、我ひそかに其兄をよびてかへせしことあり。
東江は至て臆病なる人なりしかば、かゝるもの又も狗寶より來りて、騒がせんもはかり
がたし。早くこゝを立去るべし、とて牛門山伏町の岡部氏の嘯月樓にかへりて、又々酒
酌みかはせし時、予狂詩を作れり。

諸君斜曲脊 白馬横推車
已及戰場所 逃歸岡部家

(二十七) 東江先生、八丁堀地藏橋に居たりし時、門人いまだ少かりしかば、正月の會はじめに、岡部公修と共に來るべき由をいひければ、行きしに、日向氏その外十餘人なりき。「吉原大全」といふもの作りしとて、板下のまゝ見せられき。かつて「唐詩選」の句と、百人一首の下の句を合せて、青樓の事をしるし、「異素六帖」といへる小本を著し置けるなど物語あり。其座にて、池の端須原屋伊八が番頭迂平といふものに逢ひしが、「萬載狂歌集」の約束して、つひに其書をかきとおくれり。

(二十八)「萬載集」「徳和歌後萬載集」は、須原屋伊八が板なり。「才藏集」は葛屋重次郎が板なり。「萬載集」よりさきに、唐衣橘州「茗葉集」を撰ぶ。其のち朱樂菅江が「故混馬鹿集」あり。是を狂歌集のはじめとして、其後の集ども數をしらず。

(二十九)「萬載集」の跋は、橘八衢(千蔭の隱名)にて、自筆也。此集あまりに行はれければ、橘八衢の跋を除きて市中に行ふ。我家に其跋ある本を求めおけり。

(三十)「茗葉集」は、内山先生の長子の隱名にして、置木とあり。實は先生の文なり。集の中に椿軒とあるは、内山先生淳時の歌なり。

(三十一) 酒上熟寢は、狂名のはじめにして、大根太木は狂歌の歳旦摺物のはじめなり。二

角をぬきたる一額の上部左右の角の毛を抜きあげたるなり

人とも先立ちてうせぬれば、木あみ、菅江、橘州、赤良の門人の盛りなるを見るに不及。

(三十二) 木あみはよき男にして、角をぬきたるあとさだかに、常に居士衣のごとき物を著て、紫の服紗に包みし物を脊負ひてあるけり。其頃本芝二丁目、三河屋半兵衛といへる本屋、剃髪して齒を黒く染め、青き道服を著たり。色黒く太りたる男なり。狂名を濱邊の黒人とよぶ。人皆齒までの黒人とあだ名せり。此人狂歌の點をして、半紙にすりて出す。板料を取るを入花といへり。(今の狂歌の點料を入花といふの初めなり)時の諺に、木網は兼好を一ぺん湯がきたるやうなり。黒人は文覺を油揚にしたるがごとし、と云へり。

(三十三) 東涯先生の「名物六帖」に、蒼妓の字をトシヨリノウヂヨと訓ぜり。平賀鳩溪(名國倫、字士彞、戲號風來山人、稱源内)見て笑つて曰く、たゞトシマといふべきを、先生の訓笑ふべし、と云へり。(今の名物六帖に蒼妓の事なし。古寫本にありし歟。)(三十四) 平賀源内は讚岐の人なり。浪花にありて年を経しが、江戸に出て學校を建てんと思ひて出來りしが、寶曆の末の風俗を見て、其事の行れざるを知れり。性質物産を好みしゆゑ、田村元雄(坂上登)につきて、物産の事を講究し、物産會をなす。凡物産會

は、寶曆七丁丑年、田村元雄はじめて江戸湯島にて興行。翌年戊寅又神田に會し、同九年己卯平賀氏湯島に會し、同十年庚辰松田氏市ヶ谷に會し、同十二年壬午年平賀氏又湯島に會す。亭主方より出すものを主品とし、諸子の携へ來るものを客品とす。凡三十餘國の物産、二千餘程の品の内に、すぐれたるを擇びて一書とし、「物類品隲」と名付けて、寶曆十三年癸未の板なり。當時躋壽館の物産會も、是にならへるなり。

火浣布―石綿にて織りたる布、火に投じて汚を去る故に名づく
大通辭―通辭は今の通辭官
蠻學―洋學

(補) 平賀源内、名國倫、字士彝、鳩溪と號す。狂名は風來山人、又號天竺浪人、讚州志度浦の人なり。寶曆の末始めて江戸に來り、聖堂に寓居す。官醫田村元雄とともに、物産の學をつとむ。火浣布を考へ出して、御勘定奉行一色安藝守殿につきて公に獻り、上覽に入る。後神田白壁町の裏に住す。又藤十郎新道にうつり、又柳原細川玄蕃殿屋敷前の町家に移り、(此頃門口に柳一本を植ゑたり)終に馬喰町の町屋に移る。(檢校の住居を買つて移る。凶宅なり)是より前、明和七年癸辰の頃長崎に赴き、大通辭吉雄幸左衛門が家を主とす。阿蘭陀本草をまなび、エレキテルセイリテイトといへる奇器(人の身の火を取て病をいやす器なり)を造る事を學び得てかへり、専ら蠻學をなす。或は伽羅の櫛(銀むね、象牙の齒、月に時鳥などの細工

あり)をつくり、或は金から革等をつくりて常の産とす。安永八年己亥十一月二十日の夜、病狂喪心して人を殺し、(豊島町米屋の子なり。鳩溪門人なり)獄に下る。同十二月十八日病にて獄中に死す。屍を従弟某に給ふ。橋場總泉寺のうち左の方に葬す。その友杉田玄伯私財を以て墓碑を建て表とす。墓表に、

智鑑靈雄居士

〇〇〇紋あり。(是は「一話一言」にみえたるを鈔出す。)

(三十五) 誹諧師のつくれる「海の幸」といふ書あり。魚の正うつしなり。平賀鳩溪是を「日本魚譜」と名づけて、阿蘭陀人に贈りし事あり。魚の圖の上に發句あり。彼人形狀を解きし事とおもひしや。

(三十六) 鳩溪みづから風來山人、又天竺浪人と號して、狂文を書きしは、「根なし草」「志道軒傳」をはじめとす。明和のはじめなり。其のち「根なし草後編」「放屁論」「同後編」「痿陰隱逸傳」「里のをだ巻」「飛んだ噂の評」「天狗髑髏鑒定縁記」「菩提樹の辯」等を書きしなり。皆不遇のあまりに鬱懷を吐きし文なり。

(三十七) 鳩溪、義太夫木を初めて書きしは、「神靈矢口渡」なり。三段目南瀬六郎由良兵

庫の段は、「會我物語」の引事にある、杵臼鄭嬰が事にて書きしなり。四段目の口、わたしもり頼兵衛が所の文を、はじめ稻毛や東作よみて見て、此よしみね臺とも、今の六郷通りを來れば、矢口の渡しにかゝらず。此言譯なくてはいかゞ、と難ぜし時、直下に筆を採りて、「六郷は近き世よりの渡しにて、其水上は弓と弦、矢口の渡しにさしかゝり」と書きしを見て、流石に東作も稱嘆せしなり。

(三十八) 風來淨るり本の名は、福内鬼外と稱す。「矢口渡」の名文は、「忠臣義士のため涙天に通せばあまの川、堤もきれて流るらん」といふ文句を自讚せり。「琥珀のちりや磁石の針、粹も不粹も一樣に、迷ふが上のまよひなり」といふ文句は、例の物類品隨の餘習いまだぬけず、舊癖のおこりたるをかし。

(三十九) 十六羅漢は、「寶雲經」第七に見えたれど、黄檗の十八羅漢は、第一の賓頭盧尊者と、第十七の尊者は、同とせんや、異とせんやといふ事、「谷響集」に見えたり。江戸にて十六角豆といふ物を、大坂にては十八さゝけといへり。十六と十八の數いづれにもかよふものにやとをかし。

按に、李卓吾が梵書にも十八羅漢とあり。

心中宵庚申
—お千代半
兵衛の情死
をつくりた
るもの

(四十) 童謡に、

ほろづき程な血のなみだ、おちて松露になりやしよまい。

近松門左衛門作の「心中宵庚申」に、

ほろづき程な血の涙、はらくこほせば走りより、わしも病者な父様を、先へおくるが葦菜を、かへつて憂き目みせます。是も何ゆる相生の、松だけゆるといだきつき、木末にしらぬ松の露、おちて松露になりやせん。

といへる文句を中略したるなるべし。

(四十一) 筋違御門内、柳原に茶店あり。般若面をかゝけてしるしとす。是宇治の橋姫によれるなるべし。其ならびに、翁の面をかゝけし茶屋あり、わらふべし。

(四十二) むかしは、蕎麥振舞の跡には、かならず角きりがくの豆腐を、味噌に煮て出せしが、近頃はなし。豆腐は蕎麥の毒をけすといへり。

(四十三) 近頃まで、市の温鈍に、胡椒の粉をつまみておこせしが、今はなし。檢校勾當は、衣きてありきしが、今は羽おり著てありくもをかし。

近松作「天經師普曆」に、本妻の悋氣と、うんどんに胡椒はおさだまりにて、とあれば、

檢校—盲人
の官
勾當—同上
檢校の次

留袖—振袖
に對して並
長の袖をい
ふ

古くよりありし事なるべし。

(四十四)天明の頃まで、橘町藥研堀の藝者、座敷へ出づるに振袖著て來り、留袖に著かへ、又歸る時は、必振袖を著しが、今振袖を著るものなし。それより柳橋同朋町、本町、日本橋とうつり來て、眉を落し齒を染めたる藝者多くなりぬ。

(四十五)女藝者の事を 昔はをどり子といふ。明和安永の頃より藝者とよび、者などとしやれたり。辨天おとよ、新富などいひし、橘町に名高し。「妓者呼子鳥」といふ小本、(田にし金魚作、後に虎の巻と改む)此二人の事を記せり。橘町大坂屋平六といへる藥種屋の邊に、藝者多し。俳諧の點者祇徳、其邊に住みしゆゑに、祇王祇女がほとりに、祇一祇徳などいひし白拍子の名にたぐへて、祇徳とは附きたり。辨天おとよ追善の句に、

蛇は穴辨天おとよ土の下

祇 徳

といひしもをかし。

(四十六)むかしの藝者は娘ゆゑ、まはし方にお袋の附來る事多し。今は眉なく、齒を染めたる藝者多くなりし故、お袋の來るを見ず。お袋の役を兼帶するなるべし。これもまた流行の變を見るべし。

(四十七)乙丑の年の初午に、長崎にありし時、稻荷の社に詣でけるに、神にさくけし行燈あり。

十三むすめとかけてはな、ちんちく小藪と解きます。其心はな、まだけがはえぬじやないかいな。

と書けるもをかし。

因に曰、稻荷の社關東に多し。大坂より西には稻荷なし。たゞ安藝路にて一社ありしとおほえし。長崎にもたゞ一社なり。すべて西國に多きは、八幡宮と天満宮なり。富士を見ぬ故か淺間はなし。大師は弘法大師のみにして、元三大師はなし。天王寺に元三大師あるのみなり。

(四十八)木曾道中の髮結床の障子に、「そるは千年髪は萬年」と書きしもをかし。
(四十九)木曾道中には、二十三夜と庚申塚の石表多し。淺間山の麓に小社あり、楷書にて、「遠近宮」と書し、額を鳥居に掲ぐ。「をちこち人の見やは咎めぬ」の歌によれるなるべし。芝居もの、「みてのみや」といふ神を信するよし、「かたをなみ」は片男波となり、伊吹山の「かくとだに」と云へる谷の艾よしといふも大笑なり。おしつけ「さなきだ」と云ふ新田

をちこち人
の—上の句
は、信濃な
る淺間の嶽
に立つ煙の
伊勢物語の
歌
芝居もの—

此條のこと
假名世説に
出でたり
参照

もひらくなるべし。

(五十) 青樓にて、客人権現の宮を信するもをかし。山王二十社の客人権現は女神なり。青樓に女客は入らぬものなり。

(五十一) 九州にて、石地藏のかはりに、石のえびすの形あるもをかし。天道の宮といふあり。大日如来にや。

(五十二) 鰻鱺に酔は毒なりと關東にては云ふに、長崎にては、浦上のうなぎを、酢味噌にてあへて喰ふもをかし。うなぎを一斤二斤とて、死うなぎを提げて來るを見しなり。

(五十三) 長崎は暖國にて、すべて柑類よろし。橙など九年母の味ひありてよろし。豊後梅に星なくして大なり。密柑の味よろし。

(五十四) 安永三甲午年四月十日、或日記、

宮内卿殿郡奉行

御裏切手番之頭

日野小左衛門

眞方小平次跡

右被仰附旨、於御祐筆部屋縁頼、老中列座、右近將監申渡之。

星一實の斑

此時、小普請方木室庄左衛門(卯雲)跡役を願ひしが、叶はずとて述懐の狂歌あり。今日
はからず此日記を見て、此時の事なるを知れり。(八月二日記)

けなけなりなるも最さねかたのあいたところへ日の小左衛門

(五十五) (省略)

(五十六) 小松百龜が若き時、元飯田町に、小紋の羽織を持ちしもの一人もなし。百龜な
ど外へ出る時、小紋の羽おりを懐中して、護持院の原のあたりにて著たりといふ。町内
をば遠慮せしなり。今はいかなるいやしき裏店にても、羽織もたぬもの有るべきや。

(五十七) 文武丸といへる丸薬は、小松屋が秘方なり。老人など大便秘結するによろし。委
くは、予が板下をかける功能書に見ゆ。

(五十八) 安永六年丙申日光御社参の時、道中にて見し駄菓子に、五荷棒といふものあり。
其ころ駄菓子に達磨糖といふものに似て、一口も味ふべきものにあらず。三間梁の飴と、
よき對なりと思ひしが、今年庚辰ある友のもとより、武州忍領北秩父の邊の菓子とて、五
かほうといふものを贈りしを見しに、昔見しよりは形大にして、其質もまたおこし米を
もてつくりたり。其形は野鄙なれど、四十年の昔にくらぶれば味ふべし。其頃は千壽よ

千壽一住

り先には、干菓子なし。駄菓子の中にも、栗焼といふものなど丹緑青もて彩れり。今は左にてはあるまじ。

昔駄菓子達磨糖

安永道中満日光

秩父長傳五荷棒

大飴猶唱三間梁

五荷棒や三間梁を見るにつけ三十棒はいまの上菓子

紅屋、越後屋、船橋などは五十棒々々々。

(五十九) 品川の飯賣女の價、茶屋よりの勘定は、歳暮は事多ければ、毎年正月十日の勘定なり。小錢にて十匁を一貫文、七匁五分を七百五十文と定めて、兩替屋三軒にて是を賣るなり。一年何とやらんいひし兩替屋一軒、是を賣らんとせしを、三軒のものむづかしく言ひて、車に積みし小錢を通さず。然れども大道は、天下の大道なれば、通すまじきともいひがたし。たゞ青樓に賣ることを禁ぜしをいかりて、右の車をわざと三軒の見世先を廻りて通りしををかし。すべて所々のならひにて、曹司ヶ谷にては、十月の晦日を以て大晦日に比するも、かの會式の賑ひ故なるべし。今年(文政四年辛巳) 正月十日、品川宿ことごとく焼失して、かの勘定の日にあたり。

五荷棒一駄
菓子につれて
勢に上なる
もの上菓
子の依然た
るは禪家の
三十棒をく
らはしむる
に堪へたり
といふ事か
紅屋越後屋
船橋一いづ
れも菓子屋
の名

寺社門前地
一然るべき
寺社の門前
地はその寺
社の支配

本宿新 宿ともことごとく焼失。御代官支配計りも、千八百軒と云ふ。寺社門前地、町方支配ともあまたなるべし。此火に品川妙國寺の門の二王も焼失せたり。古きものにて惜むべし。

(六十) 新吉原京町大文字屋市兵衛が狂名を、かほ茶元成といふ。妻を秋風女房といひ、隠居の姥を相應内所と稱す。一とせ此内所にて狂歌會ありし時、持佛堂を見るに、先の市兵衛が位牌あり。「釋佛妙加保信士」とありしもをかしかりき。

此市兵衛、河岸にありし時、かほ茶といふ瓜を多く買ひ置きて、妓の惣菜に用ひ、産業をつとめて此京町へ出でしとぞ。皆人かほちやくと異名せしなり。顔色も童の謠ふ歌のごとく、背ひきくて猿まなこなりしとぞ。自ら此歌をうたひ、人を笑はせしとなん。寶曆の初の頃歟。

(六十一)「さくら鏡」に、(享保十九甲寅板)

山口屋七郎右衛門内やりて

はる

櫻にも出ぬは底なきうつはもの

「洞房詠園」(元文三戊午板)

底なき一徒
然草に、男
の色好まざ

らんは玉の
さかづきに
底なきが如
し

イツチよく咲いたおいらが櫻かな
 かしく
 あまたの中に、此二の發句をもて、壓卷とすべし。續江戸砂子に、往し丑年、藪をひら
 きて櫻樹を多く植ゑて、寅の春をまち顔なり、とあり。又「洞房語園」(元文三戊午板)
 淺草寺蘭若の後園に、往し年櫻を植ゑられし事のはじめは、鷹叟の「歳旦輯」の序に述
 べられたり。千株に越えたる櫻の枝ごとに、遊君が名の札をつけたるを、それかあらぬ
 か、木の下蔭によりあたりたる其名には、心の花ひらけと、歌ふもありけり。(下略)
 (六十二)つらく思へば、老病ほど、見たくでもなく、忌々しきものはあらじ。家内の
 ものにはあきらまれて、よく取りあつかふ者なし。われ四年前戌寅きさらぎ十八日、登營
 の路すがら、神田橋のうちにて、躓きころびし後、八月十日に血を吐きしより、もとの
 健にたちかへるべくもあらず。酒のみても腹ふくるみのみにて、微醺に至らず。物事に
 倦み退屈して面白からず。聲色の樂もなく、たゞ寐るをもて樂とし、奇書も見るにた
 らず、珍事も聞くにあきぬ。若き時酒のみて、とろく眠りし心地と、狎たる妓のもとに
 通ひし樂は、世を隔てたるごとくなりき。
 ながらへば寅卯辰巳やしのばれんうしとみし年今はこひしき

こは南畝翁の書きつめ置かれし草稿にて、其の弟子文寶亭といへるものの傳へ持て
 りしを、ゆくりなく己が所藏となりてより、ある人に見せしに、切に乞ひければ、否
 みがたくて譲り與へつ。されどをかしき冊子なれば友だち某に寫さしめ、いさゝか
 補訂してわが文むろに收めおきつ。

待賈堂主人識

奴師勞之終

松樓—江戸
吉原の娼樓
松葉屋

内證—主人
の居間

おかん—雜
煮餅

はりうち—
元結の数を
まきて男鬘

松樓私語

大晦日の晩、内證より、座敷持女郎にみす紙三ツ、へや持に二ツ、まはりに一ツ、玉たばこ一つづつ、こしもと持來る。中座より著物二つづつ内證へやる事也。

大晦日の晩、下にて田樂をやき、來る人にふるまふ。晦日のおつけは例の豆腐汁なり。二かいにては蛤そばを買うてくふ。

正月元日、宵より支度して、明七つ頃少しねる。やりて來る。もはやくおそくなる。おかんを御いはひなされ、といつて二階中まはる。一人も起るものなし。年男先へ湯へ這入りて、旦那衆も入る。旦那とかみさん、背中合にすわりて年神ををがむ。女郎衆目をこすりくつき、一所に湯へ入る。髪ゆひ長次、髪結部屋へ踏込み子どもを起す。子供湯に入り髪をゆふ。髪ははりうち、やつこしまだなり。女郎衆らふそく一丁、すきあぶら一貝遣し、子どもにやる。程なくやりてまたまはり、もはやくといひて起し、お

の如し
やつこしま
だ―髪を出
して島田わ
げに結ふこ
と也
かさ―椀の
ふた

内所―内證
に同じ
とさん―盃
臺
晝三―娼妓
の階級の名

かんをいはふ。内證より奥まで順にならぶ。おかんは味噌汁にかたき餅、菜、芋、大根なり。皿にごまめ二つ、長ねぎ二本、かさに数の子、酢牛房、豆あり。小さなおそなへ一つ、小さきだるま一つ、土にてつくりたる大黒えびすをくれる也。それより髪をゆふものはゆひ、ねるものはねる。子どもはあそぶ。晝の頃例のやりて、もはやくおそくなつたといひて来り起し、おせちをいはふ。

おせちをいはふ時は、髪を兵庫結にゆふ。さうけにべた金のくしかうがいをしてゆく。(此さうけのくしかうがい、金一匁三分ほど也。つね不用なれば質に入置き、貳朱づつにてうけてさす。)おせちの椀うるしくさし。おつけ鯨と大こん、むかふにひだこに午房にんじん、いもを盛りたる平あり。繪は大根とにんじんとごまめ也。香物は鉢にいれて出す。おせちすみで女郎衆みな内所へ行く。お職より順々にかみさん土器をさす。肴にするめをはさむ。いたゞきとさんに入る。かみさん、たれくは太分せいが出る。するぶん客人を大事にして晝三にでもなりや、とあやなす。すみで皆々引く。元日の夜内所大さわぎ也。二日の朝起きておかんをいはひ、こしもと、臺に白むく三つ、孔雀絞上著をのせ、晝三へ内所より持来る。へやもち白むく一つ、あや衣孔雀一つ也。まはり白

くひつみ―
蓬萊飾

跡尻―番頭
と遣手の居
る所

むく一つ、たゞのきぬの孔雀一つ也。八時頃禮に出る。是迄女郎の内所大さわぎ也。みなみなうらつけ草履をはく。一丁目を河岸の方へ行き、とつてかへし、中の町へ出で、ふしみ町に入り二丁目へ出で、中の町の下へゆき、京町、あけや町、新町、角町へ廻る。夫より中の町上總屋新二郎前まで来りわかれ、又々茶屋へゆく。やくそくのなきは、客のあるかほにて内へ歸る。客のあるは客をつれてよる歸る。わかいもの、くひつみを持来る。吸物出る。下にて茶をたてもつて行く。

三日は中座許へ仕著せ出る。絞にて黒鶯色、梅に鶯などの模様なり。三日迄雑煮汁なり。四日五日は、てんぐ物すきの著物をきる也。中座は、しきせともに五通ほど著物をきかへる也。へや持は四通、まはりは三通也。(但孔雀とも)四日より十六日迄醬油の雑煮なり。

上草履はく事なし。中座へやもち二人程、としまばかりこれをゆるす。まはり、髪丸わけにゆふ事ならず、島田也。年明まへなればかまはず。女郎衆みせのかうし先へ出る事ならず。子供計出す。もし用あれば跡尻へことわりて出る。みせにて見立ありてあがりても、直に二階へ行く事ならず。内所へ一寸目禮してゆく。

仕切場もの
一劇場の事
務員

せうがみ
たゞ来てお
る客
引込一病氣
などにて引

みせに居るに横すわりにする事ならず。三線ひきても歌うたふ事ならず。しのびて小聲にうたふ。たびく小用にたつ事ならず。客人の座敷にて何にても物くふ事ならず。しやれことばいふ事ならず。聞きつければ呼びつけて叱る。客人によりても、かけま、役者、仕切場ものは法度也。座敷へつれてきてても、ねかす事ならず。二十日は中の町の惠比壽講、二十一日は内の惠比壽講也。たいこもちだんな衆より合ひ、下座をうちぬき素人狂言あり。内所にて膳をならべ、かみさんめしを盛る。高盛也。いくらかへても何ともいはず。本膳坪汁にさるほほと午房也。繪は海鼠、大こん、にんじん、九年母也。香の物は膳へくまざさの葉をしきておく。二日の膳はあらひ鯉子つけ、二の汁は鱈にこんぶ也。此日ばかり、どんなに食うても小言いはず。焼物は鹽引鮭に白酒をかけてひく。三味せんや殿(傳八)久しく出入る。片眼なり。をどりなどをどり、をかしき男、やき物をみなく、持ちゆきし事あり。内所にせうがみ絶ゆる事なし。引込甚だうるさがる也。きふじなどに使はれるから。ほくづきふく事ならず、口が大きくなるといふ。玉をとる事ならず、手が大きくなるといふ。きさごはじきする事ならず。客をはじき出すといふ。すががきはふり袖計ひくも

籠り居る女
郎
玉一お手玉
ふり袖一振
袖新造

左平次一さ
して口する
ものの異名

の也。ゆゑに二人三人ほどより外になし。もしみせの出る時引手なければ、中の町中さがして来る。人々にあだ名をつけて、隠してひそかに呼ぶ。だんなは、おやゆび。ちびともいふ。(あたまの毛ちびれたる故也)かみさんは、(つる葛やの若紫也。今の名はおいね)ちんころ。(なりがちひさくて利口也)よめは、(丸海老屋のまきしの也。今の名はおとよ)小ゆび。(はなはだこんじやうわるし)番頭仁平次は、佐平次、はなじわ。(はなに皺あるゆゑ也)やりておまさば、へそ、(やくにたくぬといふ事也)もはや、とも。わかだんな(平助)は、めだま。若いもの清次は、おはちのかよひ人。同又助は、よくふか。同源助は、和尚。(似たるゆゑ也)

同傳兵衛は、おきつね様。

同十助は、横とび。

同源太郎は、帆たてがひ。(顔が大きいから。)

同甚平は、よばひほし。

ねずの番二人づつかはりぐにつとむ。甚平常番也。

三月節句、内證にて雛をかざり、子供のひなとて内裏雛を別段にかざる。白酒をつくり、

皆々にのましむ。禮日にあらず。仕著せなし。きものはてんぐ也。

拾あはせきる事なし。五月節句もきものわたいれ也。わたいれ仕著せ、惣模様にて古風なるも

の也。いたじめの單物も二通也。中座ひとへ物二つ、へや持、まはりは一つ、ふり袖は麻

也。六月朔日より、内にるるは著物、中の町へは帷子也。

火鉢、十月えびす講より出し、正月夷講に仕廻ふ。みせの火鉢は、大きなるしかみ火鉢

にて、真中へ置く。寄りてあたる事ならず。

毛氈まうせんしく事なし。みせに花ござ計也。

七月十五日、仕著せ惣模様のかたびら也。跡にてたれも著るものなし。子供へは麻也。

毎月二十七日髪をあらふ。あらひ仕廻て、ふきぬ内かたい油をつけ、人によい事をいう

てもらふ。坊主のみぬうちよい事を聞くものといふ。

八朔はしろむくなり。中座は三つ、へやもち、まはり、二つ重ねてきる。仕著せにあらず。

年中いつち賑かなるは、月見とつき出しの出る也。

八月十四日待宵まつよひにぎやかなり。

十五日十六日、肥前座人形來る例也。夜一夜かひきり也。月見には新造二十人程つく。

出みせの内をかりる也。

つき出しの出るまへ、よりあひといふ事あり。内證の奥へ女郎衆のこらずよばれ、かみ

さんたのむ也。よく引廻してやつてくれろといふ。内の庭にて道中のけいこあり。かみ

さんこれををしゆる也。うちかけをして前帯の中へ扇をいれてつつばる。つき出しの出

る日になりて、金銀の扇などに紋所をつけてくばる時もあり、盃さかずきをくばるもあり。中の

町たいこ持、茶屋の兄さんをたのみ、ついてあるかせる。金壹歩づつ也。しやんぐと

手をうちてわかる也。

七月十五日に、かゝへ四人にしきせをするなり。よい客は花をやる也。

つき出の出る日、強飯をふかす。五町中へ配る也。蒸籠はてんぐ出る茶屋へ計配る也。月見の挑灯百張ほど出来る。十五日十六日二日には、客人みなく持行く。かざり物年思ひつきちがふ也。蒸籠二階の口までかざる。(月見の衣類二日に二通なり)月見の日、若者惣花、かゝへ四人に惣花なり。若者下の惣花三匁貳分。

後の月は前ほどに賑にてはなし。

七月盆には、赤豆、きなこをつけし團子を食す。八月は、團子に豆、くり、かき、など、

九月は汁團子也。

九月節句は仕著せにあらす。各物すきの著類也。

十月玄猪、ほたもちを食はしむ。二季の彼岸も同じ。玄猪には又著物をきる事也。酉の

町は物日なれども著物は著す。

十二月八日ほたけには著物をきる也。

毎月晦日豆腐汁也。

庚申、甲子、己巳待には、引ずり豆腐、ぜんまいに油揚の煮物、茶飯也。赤豆きなこを

納 ほたけ事

つけし餅を内證の客に出す。

晝みせは八つ時過、夜みせは五つ頃出る。

二階にて身ごしらへする事一切ならず。内證の次に髪べやあり。

座鋪代(瀬川座鋪四間)金壹兩、松人其外は金壹分貳朱、へや持も新造のつくは壹分、外

のへや持は二朱也。五節句に内證へやる也。茶屋のつけ金は一月置壹分づつ也。

唐紙張かへは暮計、一年に一度なり。床計が三匁位也。あるは張りかへぬもあり。

疊かへは七月十二月計也。四疊で金一匁也。蛤一つは七十二文程。鮑生貝一貫程也。

身ごしらへござ、油じみてあしき時かふに、價二百文也。

蕎麥など、二朱か三百文あつらへても少し計よこす也。これは中居二人ありにたのむ。

中居中途にてあたへをとると見えたり。

波多野大根五本ほどにて二十四文歟三十二文也。飯は下へおりて食ふ事也。菜はてんで

んに持て行く也。數なし。二階にあがらぬ時は下にてくふ。客ありて二階に居ればかへ

して食ふ也。お茶をひきたる女郎、二階に一切ねる事ならず。

禿廻し女一人あり。子どものせわをやく也。衣類等のせわまでやく也。

若いもの、ふるきはみせを出し、かよひて勤る也。
敷初の時、蕎麥三兩二分ほど入る也。内證のそばはよき蕎麥なり。

右雛妓三穂崎口授

天明丙午元日蝕

四方山人

上下のひざから酒をかけはじめますくすむ元日のしよく

おなじく二日の夜瀬川の座敷に此歌を見て

幫間長門萬里

狂名 猿萬里大夫

元日の朝から客をかけはじめますくすむ松葉屋のしよく

松樓私語終

此書也。天明乙未春日。亡妾阿賤所口授也。宜於畫簾障中。喫梅子飲溫酒。與山東外史所著總籬併讀。時人有詩以爲證。曰。

松葉樓中三穂崎

更名阿賤落蛾眉

天明丙午中元日

一擲千金贖身時

嘉平幾望

山谷道人書於越鳥巢

四段目の由良之助と不老門口の引け四つは來る事遅しといへども、光陰のうつることは猪の牙の舟のいちはやければ、芦葉に乘し初祖菩薩もおかんの膳にばかりしう、拂子を投けて孔雀の袖をしほりなん。三保の松葉屋羽衣の賤のをだまきくりかへさす、惜き硯の水調子に、いうた詞のかぞへがきも、美婦人去て返魂香のなきをかなしむ。彼小冊の昔おもへば、師走のはての狐舞、初買の四手駕籠に夢を結びし輪かざりの、わかざかりの時もありしが命といふ字をけさせたる、吸膏藥の芭蕉も破れ、居續の火鉢にのせし榮螺もくだけて、身をうすの目に鶴龜の臺もキノ字にお茶をひきたがたがかけし屋の棟の、天水桶もすくなくなり、かんざしでくふ帆立貝にも、はからざる世の古風を失ふ。翠簾の障子もう

つりかはり、昔の禿はばくアとなり、小町のはてにたま〜あへば、オヤ
 おひさしいといふばかり、三日見ぬ間に流行おくれ、二十五の曉と、しる
 せし年をさかしまに、五七二の晝みせ時分、艶示老人、懐舊箱入恩借の此
 小冊の奥の間にかきつけて、唯今返上仕るといふ。

太田南畝集索引

(語句は凡て發音に従つて五十音順に排列し、目錄に出でたるは概ね省略に従ふ)

○青梅撰食盛 <small>(アヲウケ)</small>	六二六ノ七	○足利尊氏	五六四ノ一三	○網の破損針金	六八九ノ一三
○青木坂	三五二ノ一三	○蘆づくし	一〇七ノ三	○安國寺	五六四ノ一四
○関伽井	三九〇ノ二	○蘆屋の道滿	一〇七ノ七	○鈴餅	三五三ノ三
○赤羽先生	四五四ノ三	○あそ	一一九ノ二	○鈴寶引	八四ノ九
○赤本	一四八ノ三	○愛宕山	一六六ノ六	同	一四一ノ九
○赤前垂	三八三ノ一四	○小豆飯	四三五ノ一	○あやめうち	一〇ノ九
同	三九五ノ四	○東鑑	五一六ノ二	○あらにごはらへ	二〇八ノ三
○秋風女房	七〇七ノ四	同	五七六ノ一	○有難坊	四八二ノ五
○あきしべばな	四四七ノ四	○吾妻權現	三三七ノ三	○粟田口	三九四ノ二
○朱樂管江	二六ノ三	○吾妻錦繪	一四五ノ五		
同	六九〇ノ二	○跡尻	七一三ノ一三		
同	一〇九ノ一〇	○穴一	一一ノ二〇		
○あけら館の主	六二ノ七	○穴八幡	三〇五ノ二		
○淺黄うら	一三三ノ四	○穴太記	三八五ノ二		
○淺草菴	三〇二ノ一	○安倍川	三四九ノ二		
○足利學校	五五六ノ五	○天國 <small>(アマケニ)</small>	二六九ノ一		
		○天野信景	五五三ノ一		
		○編笠茶屋	四三六ノ九		

索引 ア イ、キ

七二五

○石巻山 三六三ノ五
 ○衣裳繪 一四五ノ七
 ○異制庭訓 五一五ノ五
 ○伊川法眼 三一五ノ六
 ○異素六帖 六九六ノ四
 ○一圓窓 二五六ノ七
 ○市川三升 一八一ノ一〇
 同 六二二ノ一四
 ○いちぐら 七〇ノ一
 ○いちご 七〇ノ七
 ○一二の松 二九二ノ六
 ○市原野 四四二ノ一四
 ○一枚繪 一五三ノ一
 ○市村家橋 一八ノ二
 ○一文取 一七二ノ二一
 ○一路老人 五九七ノ一三
 ○巖島 五四一ノ五
 ○一心二河白道 四三三ノ一
 ○いづ平 六三三ノ一四
 ○一本氣 一ノ一
 ○一本亭芙蓉花 六三一ノ八

○いづみ川 三七五ノ一〇
 ○井出の玉川 一九〇ノ九
 ○稻荷の社 七〇三ノ六
 ○稻荷町 一一七ノ二
 ○猪鼻の立場 三八〇ノ七
 ○伊吹山 四八六ノ五
 ○衣服の流行 六六一ノ八
 ○今井四郎 三八七ノ七
 ○今川記 五七八ノ一
 ○今福 八七ノ二〇
 ○因樹屋書影 五〇〇ノ四
 ○以呂波石 四四四ノ一
 ○いろはの考證 四四四ノ八
 ○以呂波問辨 四四四ノ一四
 ○岩井杜若 三二五ノ九
 ○岩上 三八一ノ九
 ○岩根山 三八二ノ八
 ○いはほ琵琶 四四三ノ二
 ○石見銀山 一五ノ三

○外郎(ウキラウ) 三三八ノ一〇
 ○外郎賣 一七八ノ九
 ○上杉管領 五四〇ノ五
 ○上田餘齋 四六二ノ六
 ○上野山 一九〇ノ六
 ○鶴飼金平 四七四ノ二
 ○うかむ瀨 四三一ノ二
 ○浮島が原 三四五ノ一
 ○浮世又平 三九二ノ七
 ○牛天神 三〇ノ一
 同 九九ノ二
 同 二六四ノ七
 同 二九七ノ一〇
 ○牛の御前 六三一ノ三
 ○有心無心 一一一ノ二
 ○歌合 九九ノ五
 ○氏綱 四六五ノ三
 ○内山先生 六九〇ノ二
 ○うつくし松 三八三ノ一〇
 ○鶉衣(ウツラゴロモ) 一〇二ノ三
 ○鶉山櫻花 三〇三ノ九

エ、エ

○烏亭 一一二ノ二
 ○烏亭馬馬 二八四ノ一
 ○うなぎの酢味噌 七〇四ノ六
 ○宇野三平 四六九ノ五
 ○姥が餅屋 三八六ノ六
 ○うげ玉 三〇五ノ一三
 ○飲馬乎 一五一ノ五
 ○午まつり 一〇ノ八
 ○海の幸 六九九ノ七
 ○雲谷雜記 五一二ノ二
 ○温鈍に胡椒 七〇一ノ二
 ○梅の木和中散 三八四ノ一

○枝豆 四一一ノ二
 ○江戸鹿子、江戸砂子 六八三ノ四
 ○江戸川 一九ノ六
 ○江戸節 六ノ四
 ○夷石 一二四ノ一
 ○夷石 三七九ノ一
 ○燕斜 二四九ノ六
 同 二九一ノ七
 ○延臺寺 三三五ノ一〇
 ○袁中郎集 五七六ノ六
 ○馬馬子 一一八ノ三
 ○延命囊 一七九ノ六
 ○エレキテルセイリテ イト 六九八ノ二

オ、ヲ

○大池村 三五五ノ九
 ○大岩觀音 三六三ノ五
 ○大江匡衡 一四ノ四
 ○大岡寺繩手 三七六ノ六
 ○大かめ川 三八六ノ一〇
 ○大かれ木小かれ木 三四二ノ一
 ○扇箱 四四一ノ七
 ○王凝齋 五三六ノ一
 ○大藏千文 四二二ノ二
 ○王阮亭 五六七ノ三
 ○大雜書 五二七ノ八
 ○大薩摩 一七六ノ一
 ○櫻壽院 五四〇ノ一
 ○大島蓼太 六八四ノ八
 ○大高清助 四七〇ノ二
 ○太田金吾 三五ノ一〇
 ○大谷 三九七ノ二四
 ○大谷町 三九二ノ二
 ○大津繪 一六ノ六
 同 一七四ノ四
 同 三一四ノ六

○大池町 三八二ノ三

大津繪 三九三ノ一
 同 三九二ノ七
 ○大津馬 四〇〇ノ八
 ○大歳 二一三ノ一
 ○應仁の亂 五九二ノ一
 ○大根太木 二二九ノ一
 同 二九ノ一
 同 六八六ノ二
 同 六九六ノ二
 ○茶萱殿(オホバコトノ)の
 みとぶらひ 一一ノ七
 ○近江八景 二九八ノ八
 ○大三輪 六六ノ二
 ○大飯食人 一二六ノ二
 ○大森宗勳 六〇二ノ四
 ○大屋川 三六七ノ四
 ○大屋裏住 六八六ノ二
 ○岡崎計 三五ノ五
 ○岡西惟中 五四〇ノ二
 ○岡部公脩 五七二ノ七
 ○岡部の宿 三五一ノ二

○おかん 七二二ノ一
 ○岡本一抱子 四二一ノ二
 ○沖津川 三四八ノ一
 ○沖津のり 三四七ノ二
 ○笈盤内傳(オキナイデン) 九三ノ一
 ○奥山宗麟 五七八ノ三
 ○小栗堂 三三三ノ一
 ○おことなをさめ 二六二ノ二
 ○御作事 六九四ノ一
 ○おじやれ 二一三ノ五
 ○御關所 三四二ノ三
 ○おせち 七二二ノ五
 ○おせん 三三三ノ二
 ○御草子かけの松 三六五ノ七
 ○おたふくの面 一〇八ノ五
 ○於玉於杉 一七四ノ六
 ○お玉坂 三四一ノ四
 ○小田原記 五二八ノ四
 ○遠近の宮 七〇三ノ二
 ○お茶をひき 七二二ノ九
 ○などり子 七〇二ノ五

○鬼をする 五一四ノ六
 ○鴟吻(オニガハラ) 六九四ノ一
 ○鬼ついは 一一ノ一
 ○鬼念佛 五二ノ八
 同 二二七ノ五
 ○鬼の首の紋 四三五ノ四
 ○鬼の手柄 一四八ノ一
 ○おぬいの道行 三七ノ二
 ○小野川榮藏 六三〇ノ二
 ○なはぎのもち 四八ノ二
 ○小原 一六七ノ九
 ○於針 四八三ノ二
 ○お萬が紅 一一ノ二
 ○音樂(調子の説) 四六〇ノ五
 ○面楫似足 三四ノ八
 ○而八旬 五四ノ七
 ○阿蘭陀人献上物 三三一ノ二
 ○かひこ菴 二四三ノ二
 ○海槎餘録 五〇八ノ八

○諧聲字箋 五五八ノ一
 ○海棠 四八一ノ一
 ○海防纂要 五七六ノ九
 ○臥雲橋 三九九ノ一
 ○臥雲日件録 五三三ノ二
 ○顔見世(つらみせを見よ) 五一六ノ九
 同 五三七ノ二
 ○火浣布 六九八ノ八
 ○加賀屋 三二二ノ二
 ○香川太沖 四六七ノ七
 ○柿頭巾 三一ノ六
 ○嶽歸堂合集 五〇〇ノ九
 ○格古要論 四九九ノ八
 同 五一二ノ九
 ○權銅(クワクドウ)の場 四〇一ノ六
 ○加久繩 五五三ノ七
 ○鶴南飛 五八五ノ二
 ○鶴林玉露 五一九ノ三
 ○かくれん房 一一ノ二
 ○確連坊 四二三ノ八

○影づくし 九〇ノ一
 ○かげとり 三三三ノ二
 ○かげま 七二四ノ三
 ○花甲重逢 五三一ノ三
 ○加古川行國 一八ノ八
 ○がごせ 九六ノ九
 ○籠目々々 一一ノ四
 ○葛西太郎 四二ノ五
 同 一六四ノ一
 ○かさご 六九ノ四
 ○笠寺觀音 三六九ノ二
 ○笠堂 三七四ノ三
 ○風祭 三三九ノ一
 ○柯山隨筆 五四四ノ八
 ○笠森稻荷 三三ノ八
 同 一八〇ノ四
 ○鹿嶋禰宜 一七八ノ三
 ○賀勝水 三六六ノ五
 ○春日部錦江 二六ノ七
 ○春日部左衛門尉 二七ノ五
 ○片岡丑兵衛 三九三ノ五

○かた言 五五四ノ四
 ○華頂山 三九五ノ九
 ○梶原山 三四九ノ七
 ○かつな 九ノ二
 ○上總念佛 一七七ノ三
 ○上總木綿 一八四ノ五
 ○葛飾蟹子丸 二六六ノ一
 ○葛飾のせき 二八八ノ四
 ○カッソウ善兵衛 四二六ノ三
 ○賀邸先生 六八七ノ九
 ○河東節 二五一ノ一
 同 六四六ノ八
 ○門びらき 六七ノ一
 同 六二六ノ二
 ○兼平が手向の花松 三八八ノ四
 ○兼平の松見 三九〇ノ二
 ○狩野探幽齋 三〇二ノ九
 ○歌舞伎年代記 二八四ノ二
 ○かぶる 六五七ノ五
 ○かばちやの元成 四三ノ三
 同 八六ノ四

加保茶元成	四七八ノ八	○禿廻(カムロマンシ)	七二〇ノ三	○義經記	五一ノ五
同	七〇七ノ四	○龜成	四六九ノ一	○鬼狹頭	六九四ノ一
○鎌倉三代記	六六六ノ一	同	六二四ノ七	○きさこ	一一ノ二三
○鎌倉志	五三三ノ六	○龜屋太助	四七七ノ二三	○菅山上人	五七四ノ二四
同	五四一ノ七	○鴨三竹	四七一ノ二一	○鬼子母神	三〇八ノ九
○紙花	九一ノ九	○加茂季鷹	二九六ノ一三	○吉書はじめ	一〇五ノ一一
同	一六七ノ八	○がらく	六三二ノ五	○喜瀬川	三四三ノ五
○感應寺	二八二ノ二三	○輕尻	四七七ノ四	○黄瀬川の龜鶴	三四四ノ二三
同	二九三ノ三	○川合橋	三五七ノ二	○歸藏抄	五五六ノ五
同	四九二ノ三	○寄園寄所寄	四九八ノ七	○北村季吟翁	五八二ノ一
○寒山子	一七〇ノ七	同	五一〇ノ八	○きちん	七六ノ八
○元三大師	四五九ノ二二	同	五二〇ノ八	○熙朝樂事	五一ノ七
同	七〇三ノ八	○祇園執行日記	五二二ノ二	○吉祥山安祥寺	三九三ノ七
○顔氏家訓	五一五ノ九	同	五二二ノ二	○橘仙	一八ノ七
○神田祭	三〇九ノ九	○祇園豆腐	五四四ノ二	○橘奴	一八ノ七
○神田明神	五一ノ二四	○聞き上手	四二〇ノ一	○狐が崎	三四九ノ七
○権銅(クワンドウ)	三二九ノ一	○菊合	四二九ノ七	○歸田録	五〇九ノ二三
○願人坊	一四五ノ二	○菊煙草	四三七ノ三	○義堂	四九七ノ六
同	一六七ノ九	○菊の沿革	四四六ノ三	同	五〇一ノ一
○觀妙山妙星寺(貫妙山妙日寺)	三五五ノ一四	○桐座	四六ノ七	○紀海音	五六四ノ一三

○紀の國ヤ	二六二ノ一四	○龜茲國王	七〇四ノ二	○きりしたん	一三四ノ二
○紀國屋作内	五三二ノ七	○舊唐書	五八五ノ七	○桐づくし	四六ノ七
○紀定鷹	四九ノ五	○牛門の四友	五二四ノ一	○麒麟	六一ノ二三
○木の下おこし米	四三三ノ七	○狂雲寺	六九五ノ六	○貴嶺問答	五一五ノ三
○紀文衰へて後の住所	四七八ノ二二	○教恩寺	五九八ノ四	○くひつみ	七一三ノ五
○紀文が涼の酒盃	四八三ノ一	○俠客	三六一ノ九	○空華集	七二ノ一
○金華	四三五ノ二	○狂歌盃	六五六ノ七	○空華日工集	五〇一ノ一
○きんく	六一ノ四	○狂歌堂	一一三ノ六	○公家悪	四九七ノ六
○きんくたる	九二ノ三	○狂歌堂の主人眞顔	一二七ノ一	○草津川	六九四ノ六
○金谷	四六八ノ五	○曉月房	一一ノ四	○草薙村	三八六ノ四
○近松寺	三九一ノ一	同	七六ノ一	○草薙村	三九九ノ四
○金錢(莫謂目腐金)	一四二ノ四	○行狀記	八八ノ六	○曲舞(クセマヒ)	六六八ノ一一
○金錢物價(日清の比較)	六〇九ノ六	○京間田舎間	四三八ノ四	○九十九庵風之	四八五ノ一
同(遊廓の諸費)	七一九ノ七	○玉海	二二ノ六	○くつかけ村	三七九ノ九
○銀出	一六六ノ一〇	同	五〇八ノ一	○九年酒	三ノ四
○金猫銀猫(賣女)	六九三ノ八	○玉桂	五六〇ノ一四	○虞聞子	三五ノ四
○金羅	六二二ノ四	○きり金	四二八ノ一四	○雲切よけ	一三二ノ二
○木村源之進	四六七ノ一〇	○桐座	二八二ノ七	○倉澤の立場	三四七ノ三
○金埒	二四一ノ四	○きり金	六八七ノ三	○栗のもと	六三ノ九
○金龍山の淺草餅	四三四ノ三	○桐座	四六ノ七	同	一一ノ一一
○客人権現	四八六ノ七				

○車どめ	五ノ一〇	○妓者呼子鳥	七〇二ノ六	○小謠	二〇三ノ八
○黒吉	一一九ノ八	○傾城	三ノ七	○光悦寺	四六〇ノ二
○黒づくし	四五ノ九	○慶念山誓願寺	三六八ノ三	○古近江	四二六ノ一〇
○委しくば先の辻番に	一三五ノ九	○下戸	二三九ノ四	○鉤匙橋	一九ノ一
問ふべし	一三五ノ九	○蹴轉	一七二ノ五	○皇館太神宮	三七六ノ三
○桑名彌次兵衛	五二六ノ一三	○結制	四五〇ノ一	○香玉子	八ノ六
ケ		○卷懷食鏡	五六六ノ五	○弘慶子	一七〇ノ五
○蹴揚	三九四ノ五	○源五兵衛餅	四三三ノ二	○黄山谷	五九五ノ五
○藝苑日涉	六〇三ノ一	○源五郎鮒	三八八ノ三	○荒神	二〇六ノ一
○繼華會	九八ノ六	○拳酒	一一一ノ七	○高嵩谷	四二四ノ三
同	四九七ノ七	○源氏物語	四三四ノ七	○横川	四九九ノ一
同	四九七ノ七	○源氏やしき	五四〇ノ一	同	五〇二ノ六
○桂開會	四九七ノ六	○幻住菴	三八八ノ一	○香祖筆記	五六五ノ一
○京華集	四九九ノ一	○元政上人の墓	三九九ノ七	○江泰父	五三〇ノ六
同	五〇二ノ六	○けんどん	四四六ノ二	○高枕表號の説	五八一ノ五
同	五二九ノ一〇	○劍菱	三〇一ノ七	○弘法大師の本杉	三八三ノ五
同	五三三ノ二	○乾隆帝	六一五ノ五	○弘法大師の靈夢	五三二ノ四
同	五五四ノ一三	○戀川春町	四二八ノ二	○弘法大師火除名號石	三九二ノ九
同	五六五ノ一	○小磯宿	三三七ノ一	○高野山日記	四四四ノ七
○藝者	七〇二ノ五			○高野麥	三六七ノ二
○藝者甚孝記	二八四ノ一〇				

○甲陽軍鑑	四九八ノ二	○乞兒橋	一七三ノ九	れば怪しみおのづ	二〇ノ四
同	五二二ノ二	○五色山	三五七ノ六	から消ゆ	一五ノ一
同	五四〇ノ四	○小島橋洲	六一七ノ三	生馬眼	三〇〇ノ一〇
○氷うめ	二六九ノ六	同	六八六ノ一	一富士二鷹	一五二ノ二
○香爐山彌陀寺	五七八ノ一	○御所謎の本	一一九ノ一〇	一富士二鷹三茄子	三二〇ノ五
○幸若のお禮	二〇五ノ一	○子育の觀音堂	三五三ノ四	一文惜	二〇五ノ九
○蠶蚕權現	二八九ノ六	○碁太平記	二八四ノ一	一粒萬倍	二〇五ノ九
○五荷棒	七〇五ノ一〇	○護持院原	四八九ノ四	一升樽と百の錢に手	
○虎關禪師	五六五ノ九	○胡兆新	五三〇ノ二	を附くるとその儘	
○こぎく	一九二ノ二四	○滑稽詩文	五四二ノ九	皆になる	四七二ノ五
○こきりこ	四七ノ二	○牛頭天王	三八〇ノ一	一寸先は闇	三六ノ二四
○穀梁傳	五一四ノ三	○御殿山	二九八ノ四	一寸さきを闇	一二四ノ七
○國朝詩別裁	五七六ノ九	○琴の橋	三七七ノ四	犬ぼれ折つて鷹にと	三〇〇ノ四
○國分散	三五八ノ一	○ことのまゝの明神	三五三ノ二	らるゝ	二九七ノ二
○御げん	二五〇ノ七	○事觸	一七八ノ四	牛はれがひがらはな	二九七ノ二
○吳剛	二四ノ八	○子とろく	一一ノ四	づら通す	九九ノ九
○故混馬鹿集	六九六ノ八	○諺、格言、警句	一五二ノ一	えてに最手をあげ	九九ノ九
○五雜俎	五一五ノ二四	朝寢坊而宵迷	一五二ノ一	おくり狼	二二ノ九
同	五一七ノ一	麻布に住すればきが	一八ノ二〇	驕平家不レ久	一四九ノ五
同	五一八ノ二	しれぬ		金棒於鬼	一四九ノ九
同	五五四ノ一	怪しきを見て怪まざ		鬼目亦應レ含レ涙雨	一七六ノ八

鬼外福内 一四九ノ二〇
 親も嘉兵衛子も嘉兵衛 一二七ノ二
 子ヲ持追附貧乏多 一四一ノ一
 稼ぐに追ひつく貧乏なし 二六一ノ九
 蝸牛の角をちぢめてはいり、蟹の甲に似せて穴を掘る 五六ノ二
 果報寝待 一五三ノ六
 愛子爲旅 一四九ノ七
 元興寺にかません 五九六ノ二
 きやうこんきごも讚 四八ノ九
 佛のゆかりなり 京の女郎に江戸の張をもたせ長崎の衣装をきせて大坂の揚屋で遊ぶ 九三ノ三
 京夢大阪夢 一五一ノ二〇
 食ひものは小勢でくひ仕事は大勢でせ

よ 二六一ノ八
 くさいもの身しらす 二三八ノ九
 くじもたふる戀の山 六〇ノ二
 口も八町 五八ノ五
 下駄と焼味噌 四七ノ二四
 高野六十 一九二ノ一
 同 二五七ノ六
 こりては思案にあたはざる 六ノ五
 三味線と蛸は血を狂はす 四七四ノ二一
 したしき中の垣根 六五ノ二一
 七尺さつて師の影を踏ます 二八五ノ一
 七里かへりて喰ふ 三二二ノ七
 七里けんばい 二八五ノ二
 知らぬが佛 二五ノ五
 師走女 二〇ノ六
 同 七二ノ五
 大隠は朝市にあり 二三ノ三

鷹は死すとも穂はつます 三〇〇ノ一三
 他人のはじめ 六五ノ一〇
 ちかしき中はかきをせよ 一九〇ノ二二
 地獄沙汰金次第 一四〇ノ八
 忠臣は孝子の門に求む 七三ノ五
 土一升金一升 二四九ノ一一
 以植掃庭前 一七九ノ五
 天道不殺殺人 一五三ノ五
 天道人を殺すべし 一二四ノ八
 毒を食ふとも皿をねぶることなかれ 一二四ノ七
 隣の糶粉 六五ノ四
 隣の疝氣を頭痛にやむ 六五ノ七
 ないものは食ひたくこはい事は見たし 九六ノ八
 茄子のならぬ蔓 七〇ノ三

夏の雨は馬の脊をわくる 五一八ノ二
 なんだら法師 八九ノ二〇
 人間萬事塞翁が馬 二八四ノ三
 人間萬事早馬のごとし 三四ノ五
 人間萬事晦日暗 一四〇ノ五
 人間六十二年 二三五ノ二
 ぬかぬ大刀の高名 八八ノ八
 れこもしやくしも 二五ノ八
 寢不待果報 一五二ノ四
 能書不擇筆 一六八ノ二一
 箱根よりなたに野 九六ノ七
 夫と化物なし 一三七ノ二
 島水練 一三七ノ二
 はつち坊の報謝米ほど 六三三ノ一
 花は三芳野人は武士 九四ノ一
 人ごといへばかげがさす 九〇ノ四
 ひとつ星をみつけた

ら長者にならふ 六四六ノ二二
 人に三愛の癖ありて 牛に雙角のあらそひなし 二九ノ九
 爲貧爲鈍 一四〇ノ八
 武士不食高楊枝 一四一ノ二二
 尻をひらば尻すぼめよ 一二四ノ七
 ほれが舍利になるとも 三一ノ六
 迷へばうそも誠となり悟ればまことも嘘となる 三ノ五
 味噌之味噌臭非上味噌一也 一三七ノ一
 三子魂迄百 一四八ノ五
 見ぬ唐土の京物語 一一六ノ二二
 見ぬ京物語 八七ノ二
 美濃と近江の寢物語 六〇八ノ一〇
 むかひ三軒兩どなり 六四ノ五
 目之所寄晴之寄 一三七ノ一〇

もえ杭に火のつきやすく 一〇三ノ一一
 餅は餅屋 五四ノ六
 同 八七ノ五
 桃栗三年柿八月 二八四ノ二
 桃栗三年柿八年 一七六ノ二
 焼木杭仁火乃附安夜 一三四ノ八
 山師の玄關 九七ノ七
 山のぬしはおれ一人 一一ノ八
 山主余一人 一五五ノ九
 管から天ちよくを窺ふ 九三ノ七
 ろにご讀みるにご知らず 三二ノ七
 論語不_レ知論語讀 一四六ノ八
 禍物三年亦有可用者焉 一五八ノ一
 破鍋にとち蓋 一〇八ノ九
 ○小普譚 六九四ノ一〇
 ○五分縁 二二ノ八
 ○古文眞寶抄 五八三ノ七

○古文眞寶のはなし 三三ノ六
 ○古法筆捨山 三七九ノ三
 ○小松百龜 七〇五ノ五
 ○こまどり 一一ノ四
 ○古馬屋 三七六ノ四
 ○金剛山平間寺 五三二ノ九
 ○金堂 三九〇ノ一
 ○今日歌集 六八六ノ七
 ○廻山姥「コモチヤマウ」 六三六ノ二一
 ○小紋の絹羽織 四二九ノ四
 ○五葉の松 一〇三ノ二
 ○小吉田の立場 三四九ノ四
 ○古列女傳 五二四ノ七
 ○語路 四三九ノ八
 ○語路萬句 六二一ノ七
 ○西園雅集 一〇八ノ二
 ○柴屋寺 三五〇ノ一
 ○才牛 一七四ノ三

○西行忌 一六六ノ一
 ○西行法師 六ノ九
 ○再昌院法印 三〇三ノ一
 ○濟松寺 三〇五ノ四
 ○才藏集 六九六ノ七
 ○塞の河原 三四一ノ四
 ○濟北集 五一ノ三
 ○同 五六六ノ二
 ○堺川の土橋 三六八ノ三
 ○盃のいろく 一六ノ二
 ○同 一二ノ九
 ○盃の米人 四二四ノ二
 ○倒柱 五〇二ノ一
 ○酒匂川 三三七ノ三
 ○策彦 五〇四ノ三
 ○櫻井谷 一一ノ四
 ○さくら鏡 七〇七ノ一
 ○櫻川 三八三ノ八
 ○鮭 七〇ノ七
 ○酒(其徳) 一二ノ六
 ○同(飲酒法令) 三二ノ六

○酒上熟寢 六九〇ノ三
 ○同 六九六ノ四
 ○酒上不埒 四二ノ三
 ○同 一一九ノ一
 ○さゝ粽 四三三ノ七
 ○笹屋の胡麻どうらん 四三四ノ三
 ○左慈 一〇九ノ五
 ○さし出し 二五七ノ五
 ○薩埵峠 三四七ノ七
 ○左内坂の粟焼 四三四ノ三
 ○讚岐圓坐 五二九ノ三
 ○三黄湯 二四ノ四
 ○さんぐわん飴 四三三ノ二
 ○三間梁 七〇五ノ一
 ○三間屋 一八五ノ四
 ○三酸 五〇二ノ五
 ○三條の大橋 三九四ノ八
 ○三體詩抄 五〇二ノ〇
 ○酸物圖 一一九ノ七
 ○三寶荒神 四七七ノ四
 ○三本傘 一八一ノ四

サ

三本傘 一八三ノ五
 ○三本松 三五七ノ八
 ○山門五三桐 二四〇ノ八
 ○山谷 八ノ四
 ○鞘繪 一四五ノ〇
 ○猿が馬場 三六二ノ一
 ○猿寺 二五七ノ三
 ○猿拔山 三六八ノ六
 ○さるぼう 七一四ノ七
 ○猿萬里大夫 七二一ノ五
 ○澤村宗十郎 二五五ノ五
 ○澤村訥子 二六二ノ〇
 ○慈安寺 三八一ノ一
 ○思案橋 二七二ノ二
 ○鹽尻 五五三ノ一
 ○鹽瀨饅頭 四三三ノ七
 ○鹽見觀音 三六二ノ七
 ○沙見坂 三六二ノ六
 ○鹿津部眞顔 一〇一ノ三

同 一三ノ一
 ○似我蜂物語 五二八ノ一
 ○しかみ火鉢 四五〇ノ四
 ○色紙 五三ノ五
 ○鳴立庵 三三五ノ四
 ○師行未師行 五八八ノ九
 ○仕切場 七一四ノ四
 ○時雨蛤 三七二ノ八
 ○恃古之節 四九七ノ六
 ○自殺の一例 四五三ノ六
 ○子孫彦 四九ノ一
 ○自性院 四八一ノ三
 ○自墮落先生 三四ノ二
 ○糸竹初心集 五九八ノ八
 ○絲竹大全 六〇一ノ七
 ○七拳 一一一ノ八
 ○七賢圖式 一一六ノ一
 ○七の字づくし 二八四ノ四
 ○七面の社 三四ノ一
 ○實事仕 六九四ノ六
 ○詩轍 五四九ノ〇

○信濃屋 二五ノ二
 ○不忍の池の蓮 六四六ノ四
 ○芝居(其四時) 一八二ノ二
 ○同(其光景) 四四六ノ八
 ○同(竹本八太夫堀川の唱歌) 六三二ノ四
 ○芝居狂歌摺物はじめ 六四〇ノ四
 ○芝全交 九四ノ四
 ○慈悲心(鳥の名) 一八九ノ五
 ○嶋田の宿 三五一ノ七
 ○四萬六千日 二九三ノ二
 ○清水谷大納言實業 四二八ノ一
 ○沈歸愚 五七六ノ九
 ○信玄公 五四〇ノ六
 ○新五左 一三三ノ四
 ○同 一一一ノ三
 ○新齋諧 五一九ノ〇
 ○晉子 二六〇ノ一
 ○新彌濱 一三九ノ五
 ○神泉苑 三九五ノ一
 ○眞俗交談記 四九七ノ七

○新年(江戸の春)	一四一ノ七	○壽徳院	三五〇ノ三	○蕭鳴草	五五三ノ一四
○同松の内の遊里	六五九ノ八	○遵生八牋	五〇一ノ七	○小右紀	五一四ノ二
○同(遊女屋の元旦)	七一ノ五	○春臺	四六五ノ七	○逍遙亭	三八ノ四
○新年おとし咄	二八四ノ二	○聖一國師	四四七ノ二	○鐘離權	五三〇ノ五
○新命婦	一二五ノ六	○松蔭寺	三四五ノ三	○蕉了	五八八ノ一
○神門寺	四四四ノ九	○生姜市	二五五ノ二	○證類本草	五五四ノ八
○眞立寺	五四〇ノ六	○せうがみ	七四四ノ二	○淨瑠璃の沿革	一二三ノ八
○神靈矢口渡	六九九ノ四	○勝軍	五六五ノ二	○書畫(櫻の寫生)	四八二ノ八
○四溟陳人	三三〇ノ六	○響牙	五一四ノ九	○同(印の押し所)	四七六ノ六
○釋名	五一〇ノ二	○正慶寺	五八二ノ一	○同(猿の寫生)	四七六ノ四
○捨樂齋	五〇九ノ五	○松月院	五七二ノ六	○同(名畫無對軸)	五一二ノ九
○十九日(馬鹿の事)	四二二ノ七	○尙齒會	四九二ノ三	○蜀山人の老病	七〇八ノ七
○收魂	六八四ノ五	○上々等	一一九ノ八	○徐氏筆精	五〇〇ノ八
○修性院	五一九ノ六	○紫陽素隱	五〇二ノ〇	○同	五一〇ノ三
○衆星閣	二五三ノ三	○裝束榎	一〇四ノ〇	○白菊	五四一ノ九
○秋燈叢話	三二七ノ一	○正直蕎麥	四三九ノ二	○白子の臺	三三二ノ九
○秋坪新語	五三六ノ一	○同	六二一ノ七	○白鳥陵	三七四ノ四
○十六羅漢と十八羅漢	五二ノ七	○正傳節	三一ノ一	○風先生	四六八ノ三
○宿次	七〇〇ノ〇	○正燈寺	一一一ノ五	○知れずば先の辻番にと	三三ノ四
	二一六ノ五	○紹巴法橋	四三四ノ九	○しろ水	三四一ノ五
		○菖蒲にて作るいろく	五五四ノ四		

○詩話類編	五三〇ノ一	○雀いろ	二三六ノ二四	○瀬川菊之丞代々の墓	六三八ノ二
○隨園詩話	五一七ノ七	○雀色時	二九四ノ二四	○瀬川仙女	二六八ノ二
○瑞應山廣徳寺	三八二ノ二	○硯水	三七四ノ九	○瀬川路考	一五三ノ三
○すいじやぐわらじや	四七五ノ五	○簾	三四五ノ四	○同	二六二ノ七
○水晶宮	五一八ノ四	○すれくさ	一六ノ一	○石燕翁	三二ノ一
○水道	一八五ノ八	○相撲	九九ノ四	○同	九五ノ六
○すくわい(馴僧)	一五ノ二	○須磨寺	五三七ノ六	○關川	三七六ノ五
○すががき	二九六ノ四	○諏訪明神	三七三ノ一	○赤光	七〇ノ九
○同	七五ノ一	○青雲寺	三五ノ九	○節季候	一七五ノ九
○巢鴨	二九三ノ五	○清見寺	三四八ノ四	○赤壁の五個所	五八三ノ三
○助三藪	四三三ノ〇	○同	五四四ノ九	○世諺問答	五一八ノ五
○助惣ふのやき	四三四ノ四	○西湖志餘	五一三ノ九	○勢多唐巴詩	四六一ノ一
○すけん	一三三ノ四	○西湖志興	五一九ノ七	○雪舟	五八八ノ七
○資盛殿下と乗合及髻切	五五九ノ二	○清淨光寺	三三三ノ九	○攝待	三四三ノ一
○の考證	五〇二ノ二	○盛衰記	五六〇ノ二	○薛文清公	四九七ノ一
○酔吸の三聖の圖	三七六ノ二	○西藏院	二六五ノ五	○錢屋金埒	二六六ノ三
○鈴鹿の關	三七六ノ三	○青特	四六九ノ一	○千貫樋	三四四ノ三
○煤掃の考證	五七六ノ一	○西肥の水秀才	四七一ノ二	○淺間の社	三四五ノ二
		○脊川	三五五ノ二	○善光寺	三〇六ノ三
				○千石通	二七一ノ二
				○泉松山	三〇一ノ〇

○錢湯 一三二ノ五
 ○千人塚 三六八ノ二四
 ○千本松 三九四ノ二
 ○千里亭白駒 三一ノ五
 ○せり出し 二五七ノ五

○續博物誌 五一八ノ二
 ○續無名抄 五四〇ノ二
 ○祖仙の猿 四七六ノ九
 ○袖の梅 二一ノ九
 ○袖の岡 二九八ノ五
 ○曾根崎心中 六三五ノ五
 ○蕎麥に豆腐 七〇一ノ〇
 ○尊圓親王 四四四ノ二
 ○存義 四七八ノ二〇
 ○徂徠 四四〇ノ〇
 ○同 四六四ノ九
 ○同 五六六ノ三
 ○同 六三五ノ二
 ○楚割 七一ノ二

○大臣ばしら 三〇八ノ六
 ○大正 一二五ノ六
 ○太中庵 三〇九ノ三
 ○大通 六一ノ四
 ○鯛づくし 八七ノ一
 ○大抵御覽 六八三ノ二〇
 ○大道めぐり 一一ノ七
 ○鯛の味噌津 一四六ノ二
 ○太平樂 四六一ノ二
 ○太平樂の巻物 二八四ノ二〇
 ○たいまつ山 三六三ノ三
 ○大名行列 一四四ノ二
 ○大門屋 一三九ノ五
 ○平忠度の腕塚 五一ノ一
 ○第六天 一八〇ノ七
 ○タナ(峠) 五二三ノ三
 ○高尾 八ノ八
 ○鷹が峯 四三八ノ八
 ○同 四六〇ノ二
 ○高觀音 三八九ノ九
 ○同 三九一ノ六

○高師山 三六二ノ五
 ○高田の馬場 二五ノ二
 ○鷹の沿革 三〇〇ノ一
 ○寶合 六九〇ノ二四
 ○財のみなもと福の湊 二四八ノ二〇
 ○瀧水 七六ノ二〇
 ○竹本住太夫 一七四ノ二〇
 ○同 六三二ノ二
 ○竹本文起 三九ノ二四
 ○竹本政太夫 三八ノ二二
 ○紙鷹の名稱 六八ノ二
 ○多田人成 四九ノ三
 ○疊算 一九五ノ一
 ○疊のかす 二二ノ五
 ○立岩の觀音 三六二ノ二
 ○立君 二八八ノ二
 ○橋づくし 一八ノ一
 ○橋まち 五五ノ三
 ○龍田詣 四二二ノ二
 ○辰巳屋 二三六ノ八
 ○立石助兵衛 五二七ノ五

○立髮五人男 四六四ノ六
 ○喻草 四七二ノ二
 ○谷風 一六八ノ七
 ○谷風梶之助 六三〇ノ一
 ○谷左仲 四六九ノ六
 ○谷水音 五一ノ二〇
 ○烟草 四三七ノ四
 ○談淵 五一〇ノ五
 ○淡海録 五四〇ノ四
 ○談洲樓 一一七ノ二
 ○譚友夏 五〇〇ノ九
 ○同 六〇七ノ三
 ○探幽の鷹 四四二ノ五
 ○田村丸の社 三八〇ノ五
 ○爲朝 五七九ノ七
 ○爲朝明神 五七七ノ三
 ○大夫格子 四三ノ四
 ○達摩 三二四ノ九
 ○達磨忌 五七七ノ四
 ○達磨糖 七〇五ノ一
 ○依藤太秀郷 三九〇ノ五

○地赤 一九一ノ二
 ○千秋井 二七二ノ三
 ○知恵の内子 六八七ノ五
 ○智恩院 三九五ノ九
 ○近松御坊 三八九ノ八
 ○地錦抄 六九二ノ六
 ○地口 四八ノ九
 ○地口有武 四二ノ六
 ○兒淵 四二ノ七
 ○ちぢら糖 四三三ノ一
 ○乳附親 一四ノ五
 ○地主権現 三九七ノ一
 ○ちのわ 一九一ノ四
 ○池北偶談 五六七ノ二
 ○ちんがら、 一一ノ五
 ○陳繼儒 五〇九ノ七
 ○陳獻章 五三一ノ七
 ○椿軒先生 六八三ノ七
 ○沈草亭 二六二ノ四

○ちんちん 六二七ノ二四
 ○狎の名 六四三ノ一〇
 ○茶きん餅 六三四ノ五
 ○長元記 五二六ノ三
 ○趙恒夫 四九八ノ七
 ○長者が丸 一九ノ一
 ○長嘯子 六六ノ五
 ○長生花林抄 六九二ノ二一
 ○帳中香 四九九ノ五
 同 五二二ノ三
 同 五八四ノ二一
 同 六九三ノ一〇
 ○兆殿司の涅槃像 二五〇ノ四
 ○鳥文齋榮之 五五二ノ七
 ○朝野雜記 二六二ノ二
 ○千代菊 七二二ノ二二
 ○晝三 五七三ノ二一
 ○中正子 五三三ノ二〇
 ○報條(チラシ) 三六八ノ一〇
 ○知立神社 四三三ノ一〇
 ○ちりめん饅頭

六二七ノ二四
 六四三ノ一〇
 六三四ノ五
 五二六ノ三
 四九八ノ七
 一九ノ一
 六六ノ五
 六九二ノ二一
 四九九ノ五
 五二二ノ三
 五八四ノ二一
 六九三ノ一〇
 二五〇ノ四
 五五二ノ七
 二六二ノ二
 七二二ノ二二
 五七三ノ二一
 五三三ノ二〇
 三六八ノ一〇
 四三三ノ一〇

ツ

○杖衝坂 三七四ノ二
 ○塚越菜陽 六二五ノ九
 ○月づくし 二二三ノ一〇
 ○つき出し 六〇ノ七
 同 六四八ノ二一
 同 七二七ノ六
 同 七一八ノ三
 同 三八六ノ二二
 同 一三二ノ五
 ○月輪の池 三九〇ノ二二
 ○月見 三〇ノ九
 ○月見の舞堂 五一ノ二四
 ○津久戸明神 三六ノ六
 同 一三三ノ一
 ○筑波山人 一〇六ノ二一
 ○附祭り 一一四ノ二二
 ○葛の唐丸 四八七ノ五
 同 二二六ノ一〇
 ○土物語 一七一ノ九
 ○土屋清三
 ○土弓場

三七四ノ二
 六二五ノ九
 二二三ノ一〇
 六〇ノ七
 六四八ノ二一
 七二七ノ六
 七一八ノ三
 三八六ノ二二
 一三二ノ五
 三九〇ノ二二
 三〇ノ九
 五一ノ二四
 三六ノ六
 一三三ノ一
 一〇六ノ二一
 一一四ノ二二
 四八七ノ五
 二二六ノ一〇
 一七一ノ九

○ツ、カフ 五二三ノ一〇
 ○壺皿 一五二ノ六
 ○壺屋 一〇九ノ六
 ○つらみせ 四ノ二
 同 一六七ノ二二
 同 一七〇ノ一〇
 同 一八三ノ八
 同 二一一ノ七
 同 六二五ノ二
 同 六六八ノ一
 同 六七二ノ三
 同 一一九ノ二
 同 一七一ノ三
 ○鶴吉 一一ノ四
 ○つるく 五三三ノ五
 ○龜満丸 九ノ三
 ○つれく草 五〇七ノ七
 ○つれく草野槌 五〇四ノ八
 ○庭湖石 一二ノ五

五二三ノ一〇
 一五二ノ六
 一〇九ノ六
 四ノ二
 一六七ノ二二
 一七〇ノ一〇
 一八三ノ八
 二一一ノ七
 六二五ノ二
 六六八ノ一
 六七二ノ三
 一一九ノ二
 一七一ノ三
 一一ノ四
 五三三ノ五
 九ノ三
 五〇七ノ七
 五〇四ノ八
 一二ノ五

○帝城景物略 五一五ノ八
 ○出女 二二三ノ五
 ○手柄岡持 二九一ノ五
 ○出替 一六九ノ三
 ○出來秋萬作 二六〇ノ二
 ○適從錄 四七〇ノ二
 ○徹山 二四一ノ二四
 ○鐵石軒吉久 四三九ノ一
 ○手孕村 三八五ノ七
 ○てんぐるま 一一ノ五
 ○てんごう 一八ノ五
 ○天竺浪人 四二八ノ四
 同 六九九ノ九
 ○沾頂子 一八ノ一
 ○田汝成 五一三ノ九
 同 五一九ノ七
 ○傳通院 二九七ノ二
 ○天道の宮 七〇四ノ四
 ○轉法輪三條家 四四三ノ二

五一五ノ八
 二二三ノ五
 二九一ノ五
 一六九ノ三
 二六〇ノ二
 四七〇ノ二
 二四一ノ二四
 四三九ノ一
 三八五ノ七
 一一ノ五
 一八ノ五
 四二八ノ四
 六九九ノ九
 一八ノ一
 五一三ノ九
 五一九ノ七
 二九七ノ二
 七〇四ノ四
 四四三ノ二

○唐衣橋洲 二七ノ四
 同 二八八ノ二
 ○東醫寶鑑 九ノ二
 ○唐院 三八九ノ二四
 ○東海道名所記 五三二ノ三
 ○東牛齋蘭香 一一ノ三
 ○東牛子 八九ノ三
 ○東海平子文 五五二ノ七
 ○東江先生 六九六ノ一
 ○唐獨樂 一〇ノ二
 ○東作 六八七ノ一
 ○豆三 二四九ノ六
 ○蠟車 一〇九ノ五
 ○洞簫曲 六〇ノ一
 ○十圓子 三五ノ一
 ○透頂香 一七八ノ二
 ○道場法師 五九五ノ一
 ○榻嶋曉筆 六〇七ノ四
 ○東坡 五九五ノ四
 ○東坡懿蹟 五〇二ノ三
 ○東坡紀年録 五八四ノ三

二七ノ四
 二八八ノ二
 九ノ二
 三八九ノ二四
 五三二ノ三
 一一ノ三
 八九ノ三
 五五二ノ七
 六九六ノ一
 一〇ノ二
 六八七ノ一
 二四九ノ六
 一〇九ノ五
 六〇ノ一
 三五ノ一
 一七八ノ二
 五九五ノ一
 六〇七ノ四
 五九五ノ四
 五〇二ノ三
 五八四ノ三

○洞房語園 一二五ノ四
 同 七〇七ノ一四
 ○道本 五五三ノ二四
 ○銅脈 二七七ノ六
 ○東明寺 五七二ノ六
 ○遠目鏡 五五三ノ六
 同 三九〇ノ二二
 ○唐來參和 九三ノ四
 ○戸隠大明神 三〇六ノ五
 ○鷄冠海苔 三四七ノ二四
 ○讀書錄 四九七ノ一
 ○ドクハンス(宴席の戲) 六二四ノ四
 ○とくほん(徳本上人) 一二九ノ二
 ○徳和歌後萬載集 六九六ノ七
 ○吐月峰 三五〇ノ二
 ○とこ夏 一九一ノ二〇
 ○床花 三ノ一
 ○土佐軍記 五二六ノ一三
 ○とさん 七二二ノ一
 ○豊島屋 六九ノ二
 同 二九〇ノ一三

一二五ノ四
 七〇七ノ一四
 五五三ノ二四
 二七七ノ六
 五七二ノ六
 五五三ノ六
 三九〇ノ二二
 九三ノ四
 三〇六ノ五
 三四七ノ二四
 四九七ノ一
 六二四ノ四
 一二九ノ二
 六九六ノ七
 三五〇ノ二
 一九一ノ二〇
 三ノ一
 五二六ノ一三
 七二二ノ一
 六九ノ二
 二九〇ノ一三

○豊島屋の大田樂 四三四ノ三
 ○鳶坂 三一ノ七
 ○富田座 一七三ノ一
 ○富突 一五〇ノ五
 ○富本豊前太夫 五八ノ一
 ○曇龍上人 五七四ノ二
 ○巴寺 三八八ノ三
 ○豊川 三六四ノ一
 ○豊國社 三九八ノ六
 ○豊臣秀吉 五四四ノ九
 ○豊原龍秋 六〇七ノ六
 ○虎御石 三三五ノ二
 ○鑼焼甘藷 一四五ノ二
 ○鳥追 八三ノ六
 ○島毛槍 二五八ノ一
 ○鳥の跡の千二郎 一ノ二
 ○取退(トリノキ) 一五〇ノ五
 ○鳥邊山 三九八ノ一
 ○中泉 三五七ノ三

○長井の浦 三二三ノ二
 ○中岩 五七三ノ一
 ○中汲 二一ノ四
 ○中座 七三ノ七
 ○中島點の四書 四五八ノ二
 ○長門館 三四九ノ五
 ○長門本平家物語 五五八ノ六
 ○中賞 三四二ノ四
 ○中芝居 六三二ノ二
 ○中乘山人 一二〇ノ四
 ○長櫃 一二八ノ四
 ○中村座 一六八ノ一
 ○長等山 三八九ノ七
 ○謎の沿革 一二九ノ一
 ○夏草のかすく 一六ノ一
 ○夏見 三八三ノ六
 ○撫子 一九一ノ二
 ○七くさ瓜 一三ノ五
 ○七種の一 五四四ノ七
 ○七陰囊(ナナフグリ) 一五六ノ二
 ○浪花五人男 四六四ノ一

○鍋とり公家 二八一ノ四
 ○名見崎大喜 六六五ノ三
 ○南齋書 五一ノ二
 ○南條山人 五七二ノ七
 ○同 三三〇ノ七
 ○同 四五九ノ三
 ○南浦文集 五四二ノ四
 ○南遊藁 五〇四ノ三
 ○南嶺 七一ノ二
 ○成田屋 八九ノ三
 ○鳴子瓜 七〇ノ三
 ○なるとぼれ 八七ノ二
 ○鳴海神社 三六九ノ二
 ○二 三八七ノ三
 ○鳴の湖鏡 五四五ノ一
 ○西どつち 一一ノ九
 ○西本徳寺 三六〇ノ三
 ○二水樓 一一四ノ一
 ○似せ繪 六六九ノ四

ナ

○日輪寺 六三二ノ八
 ○日蓮上人御書撰時抄 五七四ノ一
 ○日觀要考 五二八ノ二
 ○同 五五四ノ七
 ○日工集 五二三ノ二
 ○同 五二九ノ五
 ○二寶荒神 四七七ノ四
 ○日本魚譜 六九九ノ八
 ○日本左衛門 三八六ノ一
 ○日本詩史 五五一ノ一
 ○日本人物史 六〇二ノ三
 ○日本風土記 五一〇ノ一
 ○同 五五〇ノ二
 ○仁如和尚 四一九ノ一
 ○入花 六九七ノ六
 ○入梅時の光景 一六ノ三
 ○俄と茶番 六二四ノ九
 ○又
 ○鶴學問 四六七ノ五
 ○布引山 三八一ノ九

○沼津 三四五ノ四
 ○猫 一三ノ三
 ○鼠 一三ノ二
 ○同 一四ノ九
 ○鼠木戸 六一ノ四
 ○鼠算 一五ノ四
 ○れぢがれ 五五三ノ七
 ○年魚 七〇ノ六
 ○野牛門 三六四ノ三
 ○機關(ノヅキ) 一七二ノ二
 ○のべ 二六八ノ九
 ○吞掛山ノ寒鴉 一四六ノ三
 ○野見てうなごんすみか 二八四ノ二
 ○乗かけ 四七七ノ四

○梅園主人 四二一ノ一
 ○佩文齋書畫譜 五二四ノ四
 ○同 五四三ノ三
 ○貝まわし 一〇ノ一
 ○羽織 七〇五ノ五
 ○博多ごま 一〇ノ一
 ○はきだめおまつ 二八八ノ四
 ○萩寺 三〇一ノ三
 ○萩の屋 四二四ノ一
 ○白沙子 五三一ノ七
 ○白獅 六三九ノ一
 ○莫愁 五〇九ノ八
 ○白水真人 一五七ノ八
 ○白馬道人 六九五ノ八
 ○白鯉館卵雲 二六ノ三
 ○坡谷菴 四一九ノ四
 ○箱根權現 三四一ノ九
 ○巴人集 一三五ノ二
 ○巴人亭 五六ノ二
 ○橋本 三六一ノ八
 ○芭蕉 二〇ノ七

○走り井 三九二ノ一三
 ○早稲賣(ハセウリ) 一四一ノ八
 ○長谷寺 三〇四ノ二
 ○畑 三四〇ノ七
 ○はたうち川 三四八ノ九
 ○島中頼母 四六一ノ四
 ○馬端臨 五二二ノ三
 ○八詠櫻 三九一ノ七
 ○八王子 三七五ノ六
 ○八居隠詠 五五一ノ六
 ○八軒屋 四〇〇ノ二四
 ○八丈島宗福寺 五七七ノ九
 ○八里半 二九七ノ七
 ○初がつな 九ノ七
 ○初倉山 三五二ノ四
 ○八朔 二五二ノ六
 ○服部南郭 五七四ノ二一
 ○馬蹄 六八六ノ二四
 ○ばてれん 一三四ノ二
 ○英一蝶 二八三ノ二一
 ○花道のつられ 六六七ノ二二

○花水橋 三三五ノ四
 ○馬入川 三三五ノ三
 ○濱名の湖 三六〇ノ四
 ○濱邊黒人 二七ノ一
 ○同 六九七ノ五
 ○濱むら 二六二ノ八
 ○半田稻荷 二九五ノ一〇
 ○半陶稿 五八八ノ二
 ○飯道寺 三八二ノ九
 ○噺方 六八ノ一〇
 ○腹唐の秋人 三八ノ二
 ○同 四二ノ二一
 ○腹川 三五五ノ一〇
 ○原富 八ノ五
 ○馬蘭亭 一〇三ノ一
 ○播磨清絢 四三二ノ一
 ○同 四七〇ノ七
 ○はりうち 七一ノ九
 ○春駒狂歌集 五四八ノ三

七
 ○ひおほひ 六六七ノ八
 ○檜垣寺古瓦の記 五七四ノ一
 ○干菓千 一六四ノ七
 ○日暮の宮 三五ノ六
 ○引け四つ 二八九ノ三
 ○同 二九六ノ二
 ○同 七二三ノ一
 ○肥前座 七一七ノ八
 ○引込 六〇ノ六
 ○同 七一四ノ二
 ○一節切尺八 五九六ノ五
 ○雛のいろく 六八ノ一
 ○干鯨 六九ノ四
 ○彬師 一三〇ノ一
 ○貧貧堂 一五〇ノ二
 ○貧民窟の光景 四六二ノ九
 ○百喜齋 七五ノ五
 ○冷水ばんそ 三〇ノ九
 ○兵庫結 七二ノ六

○病目鏡 一五七ノ九
 ○日吉元服記 五二五ノ一
 ○ひよどり塚 三七四ノ二四
 ○平賀源内 六九七ノ二二
 ○琵琶行の翻案 六四九ノ七

フ

○笛の息 四五六ノ二二
 ○笛吹大明神 三七七ノ七
 ○鱒やぶ 二二四ノ六
 ○福内鬼外 七〇〇ノ六
 ○福壽草 一八九ノ一
 ○同 三二四ノ八
 ○同 六九二ノ二三
 ○ふくろふの暖め土 四四九ノ二
 ○普濟寺 五六七ノ一
 ○浮槎散人 五一二ノ七
 ○富士川 三四六ノ九
 ○富士山 五二一ノ一〇
 ○富士沼 三四六ノ八
 ○富士の白酒 三四六ノ七

○伏見 四〇〇ノ一
 ○富士見平 三四三ノ四
 ○不成就日 五二七ノ八
 ○覆醬集 五四六ノ九
 ○二瀬川 三五五ノ七
 ○藤枝 三五一ノ四
 ○藤の森 三九九ノ一三
 ○藤卷寺 三三七ノ七
 ○藤本由己 五四八ノ三
 ○普茶會 二五九ノ二
 ○物産會 六九七ノ二四
 ○佛祖統紀 五三〇ノ九
 ○佛法僧 一八九ノ五
 ○物理小識 五〇九ノ三
 ○物類品隲 六九八ノ四
 ○太印太之根 一四五ノ二四
 ○船繫松 三五ノ二〇
 ○文獻通考 五二二ノ四
 ○文庫山 三四一ノ三
 ○文武丸 七〇五ノ八
 ○文武火茶釜 一七七ノ七

○文鳳 二八二ノ七
 ○文寶亭 三二七ノ一〇
 ○文彌節 六四五ノ一四
 ○ふらそこ 六八ノ四
 ○ふり袖 七一五ノ一
 ○不老門 七二三ノ一
 ○平家物語 五五九ノ一〇
 ○閉戸先生 四六九ノ九
 ○瓶山 四四七ノ八
 ○邊越方人 七四ノ六
 ○臍の穴守禪師 七三ノ一
 ○平秩東作 四四四ノ一
 ○べらぼう焼 四三三ノ九
 ○べろくの紙 一一ノ二
 ホ
 ○寶繪録 五四三ノ二
 ○放下師 二九七ノ四
 ○放下僧 二六九ノ七

○放下著	六四〇ノ三	○本なれ	一九一ノ二一
○放魂	五一九ノ五	○堀口幽谷	四五九ノ二〇
○報謝宿	四八七ノ五	○保曆間記	五六〇ノ二一
○北條氏綱	九ノ九		
○北條五代記	四六五ノ二二	○舞坂	三六〇ノ三
○坊主合羽	一九四ノ三	○舞鶴	一七四ノ二
○法藏寺繩	三六五ノ五	○前野村	三八一ノ二
○望陀欄	六三〇ノ一	○鉤川(マガリガハ)	三八五ノ一〇
○寶塔寺	三九九ノ三	○枕橋	四五一ノ八
○棒鼻	三三〇ノ一	○馬込川	三五八ノ九
○蓬萊亭翁屋	三〇七ノ一	○政右衛門	三四三ノ一
○牧溪	四二八ノ一三	○鯨岩	三八二ノ一
○遊(墨水)賦并序	五八六ノ一三	○ますの芋	五五ノ七
○北肉山人	四四二ノ一四	○木天蓼(マタタビ)	一三ノ八
○星見世	九三ノ一	○松岡玄達	五六六ノ一
○蒲州府志	五七一ノ六	○松風瀨平	四三七ノ二〇
○はたけ	七一九ノ一	○末社	一三三ノ一
○法華堂	五四二ノ九	○松人	七一九ノ七
○本宮山	三六三ノ五	○松本のわたし	三八八ノ二
○本多風	一六五ノ五	○松屋せんべい	四三三ノ一〇
○本多鬻	六二三ノ一三		
		○まないた橋	三六四ノ八
		○間部河岸	一八九ノ三
		○萬歳	八三ノ七
		○萬載集	六九六ノ七
		○萬人講	二四九ノ九
		○萬八樓	三一〇ノ四
		○豆(り)をくばる	六四ノ一〇
		○まめ男	三二二ノ三
		○豆づくし	三二二ノ三
		○鞠子川	三三八ノ一
		○丸鑑	一二五ノ一
		○まげり	七二二ノ一四
		○御井	三九〇ノ二
		○三浦屋	八ノ四
		○三浦安貞	五四九ノ一〇
		○三香野橋	三五七ノ四
		○三上山	三八二ノ八
		○三河記	一九〇ノ一〇
		○三草山	一二ノ七

○みす紙	七二一ノ一	○妙恩寺	三五八ノ三
○みせすががき	三八ノ八	○妙國寺	七〇七ノ二
○三千風	三三五ノ一三	○妙秀	四三八ノ二一
○水いなり	三〇五ノ二	○妙有菴	四四八ノ二一
○水懸論	一五三ノ四	○みれんなし	六四三ノ四
○水潜	四二九ノ二二	○彌勒といふ年號	四三五ノ八
○光富權之助	五二六ノ一三		
○水の行方	四五九ノ三	○無思庵	四二三ノ七
○三又	六六六ノ六	○昔の反古	三四ノ二四
○源經基	一九ノ一	○昔八丈	一六五ノ二一
○三升(市川三升参照)	二五九ノ一〇	○無間山觀音	三五三ノ五
○みくづく	四〇ノ三	○無間鐘	一五二ノ八
○みくづくの形	六三ノ九	○向島	四一ノ一
○三圍稻荷	二五七ノ八	○むさし屋	四二ノ六
○都春雪	一二九ノ二二	○貉	九六ノ二〇
○宮古路一中墓	三九三ノ二二	○無盡	一五〇ノ一
○都の富士	三八五ノ五	○六玉川	三八六ノ九
○みやこぶし	三九三ノ二二	○紫の帽子	三九一ノ二
○宮の驛	三六九ノ二二	○紫のゆかり	一二八ノ三
○明阿彌陀佛	二四〇ノ二	○紫麥	三六七ノ一
同	四二二ノ二一		
		○村瀬榜亭	六〇三ノ一
		○無量寺	三六八ノ八
		○名物六帖	六九七ノ九
		○茗葉集	六九六ノ八
		○目かくし	一一ノ三
		○目川菜飯	三八五ノ一三
		○目腐市	二五五ノ一三
		○飯盛	六ノ二一
		○飯賣女	四四四ノ一
		○めりやす	七〇六ノ七
		同	二一ノ八
		同	六六五ノ一四
		○孟宗竹	六九一ノ六
		○展子肩衣	一五ノ一〇
		○展摺石	五三三ノ九
		○文字大夫	三ノ一
		○尤草紙	五〇六ノ九

○元宿	三六五ノ三	○奴茶屋	三九三ノ五
○もとの木網	三八ノ一	○宿屋飯盛	一ノ八
同	八六ノ七	同	七七ノ四
同	六八七ノ四	○柳堂	三六八ノ三
同	六九七ノ二	○矢野	六九ノ二
○物見塚	三六ノ二	○矢矧川	三六七ノ三
○百川樓	三一〇ノ四	○藪柑子	二四四ノ三
○桃栗山人	八八ノ九	○藪疊	四七三ノ三
○桃太郎	一四九ノ三	○藪の下	三九三ノ九
○森下の立場	三七五ノ三	○山川白酒	六九ノ二
○森田座	一六八ノ五	○山科	三九三ノ三
同	二三七ノ一	○山だし	四七五ノ一
○諸白	二一ノ三	○大和七言城	三一〇ノ七
○諸羽大明神	三九三ノ四	○大和屋	三一二ノ二
○屋形尾の鷹	一九四ノ七	○山中村	三六六ノ一
○薬研堀	一九ノ一〇	○山猫	一七八ノ八
○八十瀬	三七九ノ三	○山の手	七ノ四
○やつこしまだ	七一ノ九	○山ばなの立場	三五四ノ一
○やつこだこ	六八三ノ一	○山邊村	三七四ノ九
		○やり梅	一八九ノ九

○吉野拾遺	四九八ノ四	同	同	同	同
○良村安世	五〇ノ一	○よりあひ	七一七ノ一〇	○駒勇則花散	一五一ノ一
○よし原	三ノ六	同	一三五ノ二	してやんして	六二三ノ四
○吉原草摺引	一二五ノ一	○羅漢寺	二六〇ノ二	しやうならく	六三四ノ三
○吉原戀の道草	一二四ノ九	○樂心	四八一ノ二	そもくわれらは	六三四ノ一〇
○吉原細見の沿革	一二五ノ四	○蘭雨	一〇九ノ六	そよく風に	六三五ノ一
○よし原雀	一三三ノ一	○李委	五八五ノ一	のび上らねば	一一九ノ九
○吉原大黒舞	一二五ノ一	○栗花集	六三ノ一〇	橋の下の菖蒲は	七五ノ六
○吉原大全	四九一ノ七	○隣松	一〇九ノ五	富士のしら雪	五〇六ノ一
同	六九六ノ三	○立慶橋	三〇ノ一〇	文がやりたや	五三ノ三
○吉原年代記	二八四ノ一	○龍尾石	二八九ノ二	ほづき程な	五八ノ一
○夜鷹	一四三ノ二	○俚諺	五〇五ノ六	向ふ通るは	七〇ノ二
○夜鷹蕎麥	一七五ノ四	一りけんぢやう	三二〇ノ三	めでたく	一一九ノ二
○四つ切	二二三ノ三	遠州濱松	四九ノ八	まうそく赤事申す	八九ノ一
○淀鯉出世瀧徳	六三七ノ六	おまへその様に	三二二ノ四	涼菟	五〇六ノ一〇
○夜啼の石	三五三ノ一	君と寝やるか	六四四ノ四	○龍頭雜字元龜大全	六三六ノ三
○讀うり謎かけぶし	一二九ノ一〇			○兩巴扨言	四九七ノ九
○四方山人	六一ノ三			○料理獻立表	一二五ノ三
○四方の赤	一ノ一			○呂純陽	六七三ノ二
○四方酒(ヨモノアカ)	一四六ノ二				五二九ノ四
○四方赤良	二一ノ一				

○冷齋夜話 五一ノ一
 ○靈梅集 五五ノ三
 ○歷代記 五二五ノ一
 ○列山傳 五三〇ノ五
 ○聯珠詩格 四九九ノ二
 ○蓮如上人 三九一ノ二
 ○連誹 二四ノ二

ロ

○弄籟子 一〇〇ノ七
 ○瑯琊代醉編 五一ノ二
 ○蘆橋菴 四二ノ三
 ○路考錦考 一七八ノ二
 ○路考大明神 一七九ノ二
 ○蘆水 一〇七ノ二

ワ

○和繪唐畫 一五四ノ六
 ○若木の櫻 五三七ノ四
 ○脇差の小刀 四三四ノ二
 ○早稻田太神宮 四三ノ八

○和田の地蔵 三七五ノ一
 ○わやく 六五七ノ七
 ○藁店 三〇ノ五
 ○蕨餅 三五四ノ六

太田南畝集索引終

大正七年三月一日印刷
 大正七年三月四日發行

有朋堂文庫
 太田南畝集 (非賣品)

編輯者 塚本哲三

發行者兼印刷者 三浦理

印刷所 有朋堂印刷部

發行所 有朋堂書店



東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

東京市神田區錦町一丁目十九番地

東京市神田區錦町三丁目九番地

東京市神田區錦町一丁目十九番地

